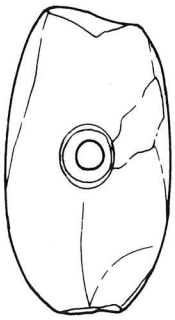
彦根市埋蔵文化財調査報告書第48集

丁田遺跡 Ⅱ

－宅地造成工事に伴う発掘調査－



平成23年３月

彦根市教育委員会

丁田遺跡 Ⅱ

－宅地造成工事に伴う発掘調査－

2011

巻頭図版１

１　調査区全景（南から）

２　調査区全景（西から）

1　SX01埋設土器　翡翠大珠出土状態　（南から）

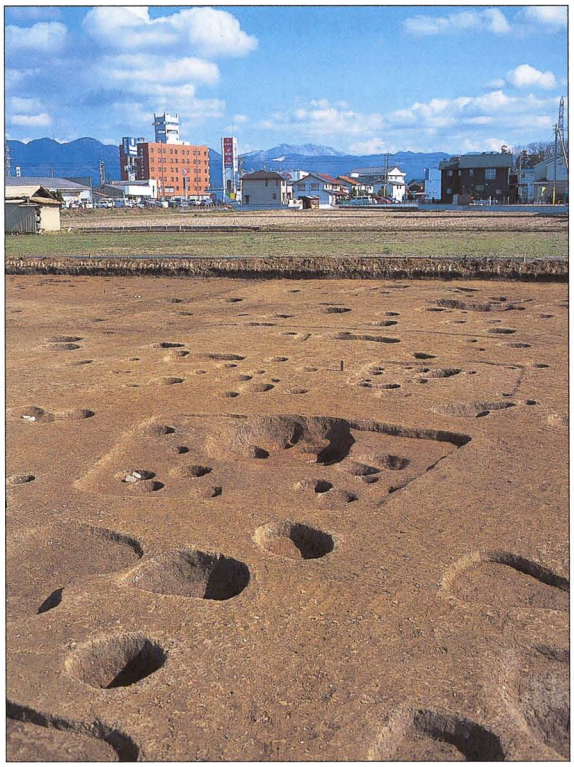
2　SX01埋設土器出土　翡翠大珠

巻頭図版 3

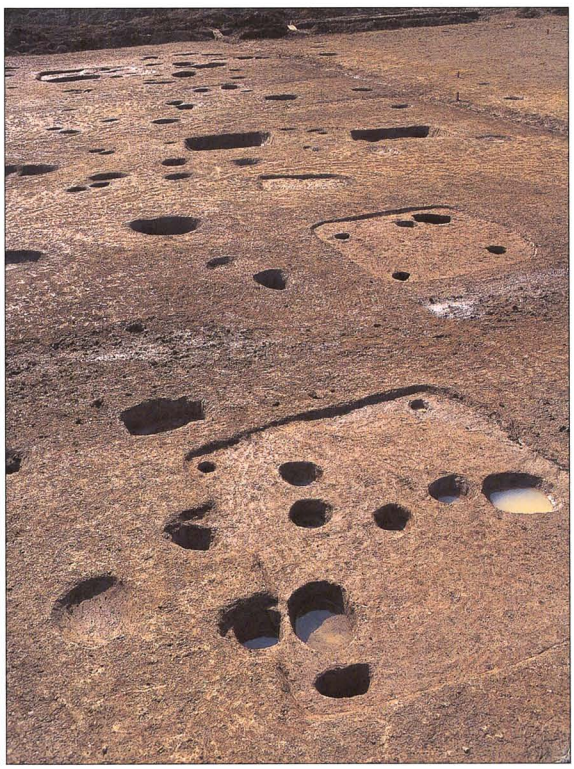
1　SX02埋設土器

2　SP01出土小珠

1　東側遺構集中部分　（西から）



2　南側竪穴建物群　（西から）



3　中央竪穴建物群　（北東から）

例　　言

1．本書は、彦根市教育委員会が、民間の宅地造成工事に伴い、平成21年12月21日から平成22年２月26日にかけて実施した、丁田遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
整理調査については、平成22年４月から平成23年３月にかけて行った。

2．本調査の調査地は、彦根市高宮町字辻ヶ内横田1644番１、1645番に位置する。

3．本調査は、彦根市教育委員会文化財部文化財課が実施した。調査の現体制は下記のとおりである。

教育長：小田柿幸男
文化財部長：谷口　徹　　文化財部次長（兼文化財課長）：上田博司
課長補佐（兼文化財係長兼史跡整備係長）：久保達彦
主　査：北川恭子　　主　任：深谷　覚
主　任：辻　嘉光　　主　任：高木絵美
主　任：池田隼人　　主　任：林　昭男
主　任：三尾次郎　　技　師：戸塚洋輔
技　師：田中良輔　　技　師：下高大輔

4．現地調査・整理調査は戸塚が担当し、以下の諸氏が参加した。
現地調査：片山正範　久保亮二　清水啓邦　中川浩行　中田鉄雄　浜野　勲（作業員）
整理調査：大西　遼　樫木規秀　北川　遼　仲田周平　八木宏明（滋賀県立大学学生）

5．本書で使用した遺構実測図は、久保亮二、田中良輔、戸塚が作成し、遺物実測図及び拓本については、樫木規秀、北川　遼、仲田周平、八木宏明、戸塚が作成した。
遺構の写真撮影は、調査担当者が行った。

6．本書の作成にあたり、以下の方々や機関からの助言・協力を得た。
泉　拓良　小島孝修　瀬口眞司　高橋　毅　中村　大　林　博通
京都大学　財団法人滋賀県文化財保護協会

7．本書の執筆及び編集は、戸塚洋輔が行った。

8．本書で使用した方位は、座標北を示す。レベル高は海抜である。

9．本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市教育委員会で保管している。

10．本書で報告する土器の断面と種類の関係は、以下のとおりである。
土師器　須恵器　陶器

目　次

巻頭図版
例言

Ⅰ　序　論
1　調査に至る経緯 ―― 1
2　地理的・歴史的環境 ―― 3
（1）地理的環境 ―― 3
（2）歴史的環境 ―― 3

Ⅱ　調査成果
1　基本層位 ―― 7
2　縄文時代 ―― 10
（1）概　要 ―― 10
（2）竪穴建物 ―― 10
（3）土　坑 ―― 13
（4）埋設土器 ―― 16
（5）小穴・包含層 ―― 21
（6）小　結 ―― 28
3　奈良時代～平安時代初頭 ―― 30
（1）概　要 ―― 30
（2）竪穴建物 ―― 30
（3）掘立柱建物 ―― 34
（4）柵　列 ―― 37
（5）土　坑 ―― 38
（6）小　穴 ―― 40
（7）小　結 ―― 41
4　平安時代以降 ―― 42
（1）概　要 ―― 42
（2）畦畔・畝状遺構 ―― 43
（3）小　結 ―― 43

Ⅲ　総　括

1　丁田遺跡における縄文時代の集落 ―― 44
（1）縄文土器の型式編年的位置 ―― 44
（2）各遺構の時期 ―― 45
（3）竪穴建物の構造 ―― 45
（4）集落構造 ―― 45
（5）埋設土器の性格 ―― 46
（6）石器について ―― 48
（7）湖東地域における縄文時代中期末の集落 ―― 48
（8）結　語 ―― 49
2　丁田遺跡出土翡翠大珠をめぐる問題 ―― 51
（1）はじめに ―― 51
（2）翡翠大珠の広がり ―― 51
（3）丁田遺跡出土例の型式学的位置 ―― 52
（4）近畿地方の大珠 ―― 52
（5）近畿地方における翡翠大珠出現の背景 ―― 53
（6）結　語 ―― 55
3　丁田遺跡における古代の集落 ―― 56
（1）はじめに ―― 56
（2）丁田遺跡の古代集落 ―― 57
（3）犬上川右岸における古代集落 ―― 57
（4）古代集落の変質 ―― 58
（5）結　語 ―― 59

出土遺物観察表
図版
報告書抄録

Ⅰ　序　論

1 調査に至る経緯

丁田遺跡は、彦根市高宮町に位置し、今回の２次調査区は、高宮町字辻ヶ内横田の一部に含まれる。太田川と国道８号線が交差する地点の北東にあたり、調査地の周辺には、もともと田地が広がっていたが、近年宅地開発が進んでいる。２次調査区の西側では、彦根市による浸水対策下水道工事（高宮新川第１排水区）に伴い、第１次調査が平成20年６月16日～平成20年７月10日にかけて行われている。遺跡の詳細な内容は長らく不明であったが、１次調査では、主に平安時代の遺構が検出され、当該期の遺跡が存在することが判明した。

今回の調査は、民間の宅地造成に伴う緊急発掘調査である。平成21年11月27日、開発面積5242.50㎡を対象として、遺構の有無を確認するために試掘トレンチ18箇所を設定して試掘調査を行った。その結果、開発対象地の南東側は基盤層の標高が低く、遺構は確認されなかった。これに対し、開発対象地の北西側では、トレンチ７箇所で遺構と遺物を確認するにおよび、開発に先立ち発掘調査を実施する必要性が指摘された。試掘調査において出土した遺物

表１　丁田遺跡における発掘調査

調査番号	調査時期	調査主体	主な時代	文献
１次	2008年６月～2008年７月	彦根市教育委員会	奈良・平安	1
２次	2009年12月～2010年２月	彦根市教育委員会	縄文・奈良・平安	本書

文　献　1　彦根市教育委員会　2009『丁田遺跡Ⅰ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第43集

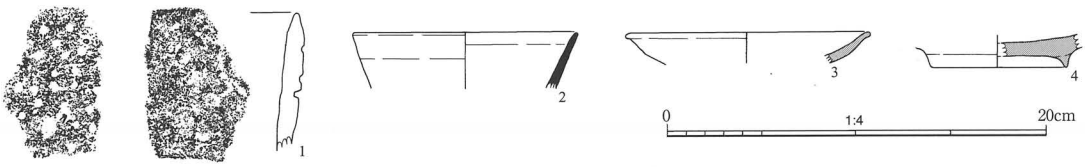


図１　試掘調査出土遺物

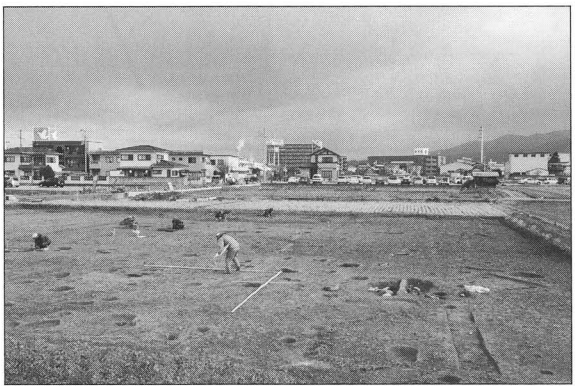


図２　調査風景

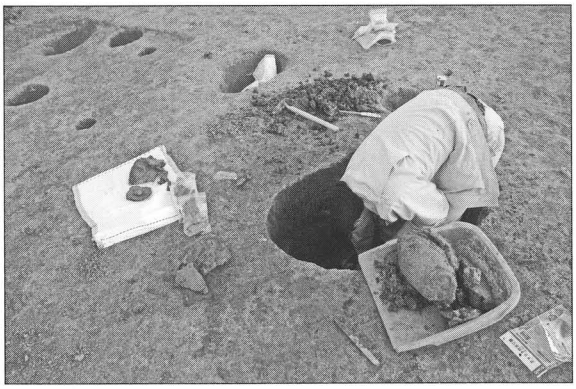


図３　埋設土器の調査

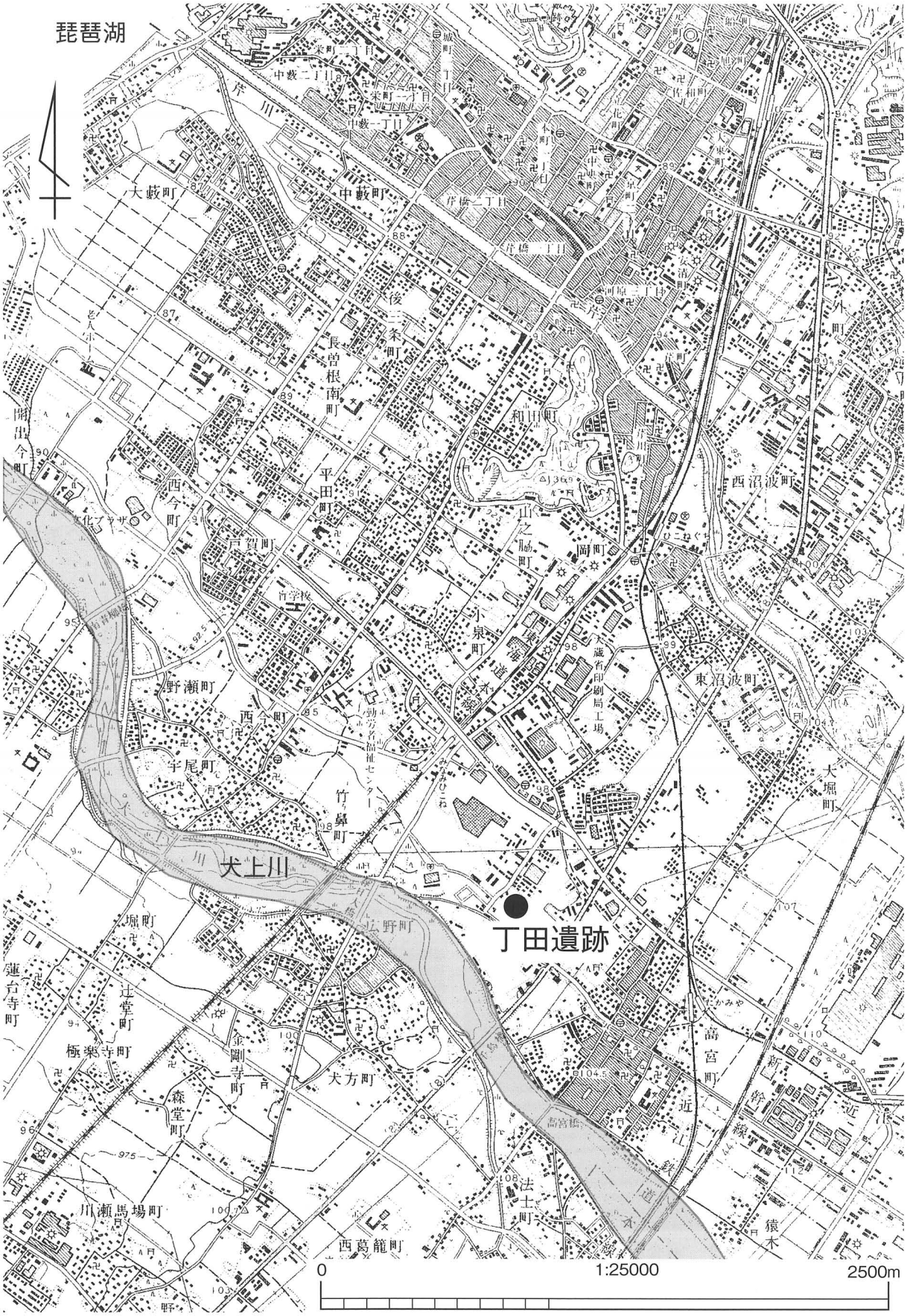

琵琶湖
丁田遺跡
犬上川
芹川
中藪町
大藪町
長曽根南町
平田町
西今町
戸賀町
野瀬町
宇尾町
竹鼻町
小泉町
山之脇町
和田町
西沼波町
東沼波町
大堀町
高宮町
犬方町
法士町
西葛籠町
川瀬馬場町
森堂町
極楽寺町
辻堂町
蓮台寺町
堀町
広野町
0
1:25000
2500m

図４　丁田遺跡の位置

を図１に示す。１は外面に連続刺突文を有する縄文土器で、調査区北西部の落ち込みに堆積した包含層から出土した。２は須恵器坏身、３は灰釉陶器皿、４は灰釉陶器碗である。したがって、平成21年12月21日～平成22円２月26日まで、本発掘調査として現地調査を実施した。調査面積は、1296㎡である。その後、平成22年４月～平成23年３月にかけて整理作業を行い、本報告書の刊行となった。

２ 地理的・歴史的環境

（１）地理的環境

高宮町は、彦根市のほぼ中央、犬上川の右岸に位置する。犬上川は、芹川、宇曽川とともに、洪水による堆積によって、彦根市域の平野部を形成しており、滋賀県においても有数の扇状地地帯となっている。犬上川の源流は、遠く鈴鹿山脈の鈴ヶ岳から発し、彦根市一帯の湖東平野の東縁の山地は、標高300～400m 程度のなだらかな山並である。また、犬上川流域では、河岸段丘を形成しながら、犬上郡多賀町の楢崎周辺を扇頂として西北方向に広がる扇状地が形成されている。扇状地の末端付近にはいくつもの湧水があり、下流の水田の重要な水源となっている。

丁田遺跡周辺における各時代の微地形については、不明な点が多い。縄文時代においては、犬上川によって形成された氾濫平野に隣接する自然堤防の微高地上に居住地が立地している。古代から中世にかけての微地形も縄文時代の様相をほぼ踏襲するが、低位面に土壌の堆積が進み、開発可能な土地が拡大されたものと考えられる。

（２）歴史的環境

犬上川流域で最も古い遺物は、福満遺跡から出土した縄文時代前期末の大歳山式土器である。丁田遺跡から西側へ約700m 離れた福満遺跡は、犬上川流域のなかでも琵琶湖に近い水の豊富な沖積地のなかの微高地上に位置する。中期の様相は不明瞭であるが、後期～晩期にかけては集落が展開する。

弥生時代前期・中期の遺跡の様相は不明瞭で、右岸の竹ヶ鼻廃寺遺跡において弥生時代前期の土器が出土している程度である。一方、左岸の荒神山麓では、稲里遺跡で弥生時代前期の集落が、妙楽寺遺跡では弥生時代前期末～中期前半の集落が検出されている。川瀬馬場遺跡では、弥生時代中期中葉から後半の集落が検出されている。これらの遺跡は、扇状地の扇端より下流の氾濫平野など低湿地に位置している。

弥生時代後期には、福満遺跡、品井戸遺跡と対岸の堀南遺跡があり、その多くは、扇状地より湖岸側に位置する。福満遺跡では、集落と墓域がともに検出されており、弥生時代後期～古墳時代初頭の方形周溝墓が検出されている。品井戸遺跡と堀南遺跡においても、同様に方形周溝墓が検出されている。福満遺跡では、北陸系土器、Ｓ字状口縁甕を含む庄内式併行期の土器が出土し、北陸地方や濃尾平野とも強い関係をもっていたことが想定される。

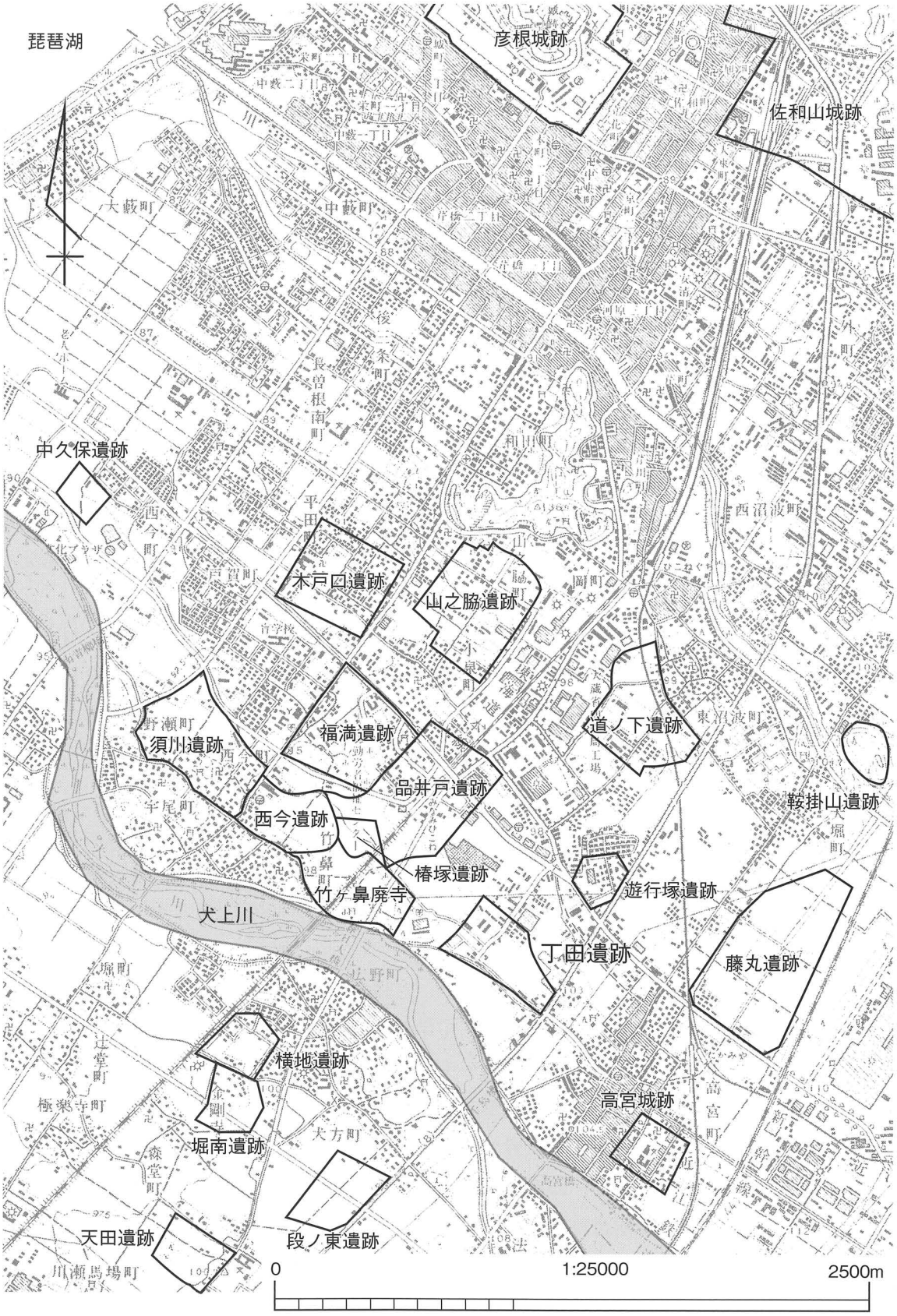


図５　丁田遺跡周辺の遺跡

古墳時代になると、前期末には、琵琶湖岸に近い荒神山丘陵の稜線上に荒神山古墳が築かれる。全長124mの前方後円墳で、大津市膳所茶臼山古墳と同形・同大とされる。膳所茶臼山古墳とともに、琵琶湖における水運の要として重要な役割を担っていたのであろう。

古墳時代後期には、同じ荒神山丘陵に横穴式石室を埋葬施設とする荒神山古墳群が築かれる。現在、30基以上の古墳が確認されている。荒神山王谷1号墳の横穴式石室の玄室は、やや寸詰まりのプランで、持ち送り技法によって構築され、天井石は一石である。ドーム状を呈し、渡来系氏族との関わりが強い。福満遺跡では、円圏文をもつ子持勾玉が出土しており、こうした子持勾玉は日本海側や韓半島においても出土していることから、韓半島と日本列島との交流を示す遺物として注目できる。これらの横穴式石室や子持勾玉からは、犬上川流域において渡来系氏族が定着した様子がうかがわれる。なお、福満遺跡の付近には、「椿塚」という藪があり、石室が発見されて須恵器が出土したと伝わり、古墳が存在した可能性が高い。

犬上川流域の白鳳寺院としては、高宮廃寺、竹ヶ鼻廃寺、八坂廃寺が知られる。高宮廃寺には、高宮町小字「遊行塚」に塚状の高まりがあり、それが鎌倉時代の遊行上人が建治3年（1277）に巡錫回向した遊行塚であったと伝わる。礎石もみつかっているが、塚状の高まりとともに現存しない。白鳳時代の瓦も出土し、古代寺院であったと考えられている。奈良時代においては、竹ヶ鼻廃寺の南東には、畿内と東国を結ぶ交通路である東山道が位置していた。竹ヶ鼻廃寺遺跡では白鳳時代～奈良時代の瓦が出土し、白鳳時代以降の寺院跡と考えられている。奈良・平安時代になると、品井戸遺跡、竹ヶ鼻廃寺遺跡、福満遺跡、法土南遺跡では、掘立柱建物跡が検出されている。なかでも、竹ヶ鼻廃寺遺跡では、奈良時代後半に寺院を廃して大型の掘立柱建物群や柵列が設置されており、円面硯や銅匙も出土し、犬上郡衙の有力な比定地とされている。東側に位置する品井戸遺跡では石帯が出土しており、竹ヶ鼻廃寺遺跡と品井戸遺跡は、古代の犬上郡において中心的な位置を占めていたものと考えられる。

犬上川の河口左岸に位置する八坂遺跡では、12世紀前半～13世紀前半の掘立柱建物、井戸、溝が検出され、土師器、山茶碗、輸入陶磁器が出土している。八坂には八坂荘があり、琵琶湖を介した広域な商業活動が行われていたことがうかがわれる。荒神山の北東に位置する妙楽寺遺跡では、平安時代末～鎌倉時代、室町時代、15世紀末～16世紀後半、16世紀末の各時期の遺構が検出されている。鎌倉時代～室町時代にかけては、掘立柱建物、井戸、溝で構成される集落である。15世紀末～16世紀末になると、条里に沿って道路と水路が縦横に整然と区画された地割りが顕著となり、掘立柱建物の立ち並ぶ屋敷地が形成される。一方、宇曽川の対岸、荒神山の麓に位置する古屋敷遺跡では、14世紀～16世紀中頃の遺構が検出されている。16世紀中頃には、石組溝と道路、土塁によって区画割りされ、掘立柱建物から成る屋敷地が形成される。妙楽寺遺跡と古屋敷遺跡では、ともに整然とした屋敷地がみられ、琵琶湖と宇曽川の水運によって繁栄していた様子が明らかになっている。

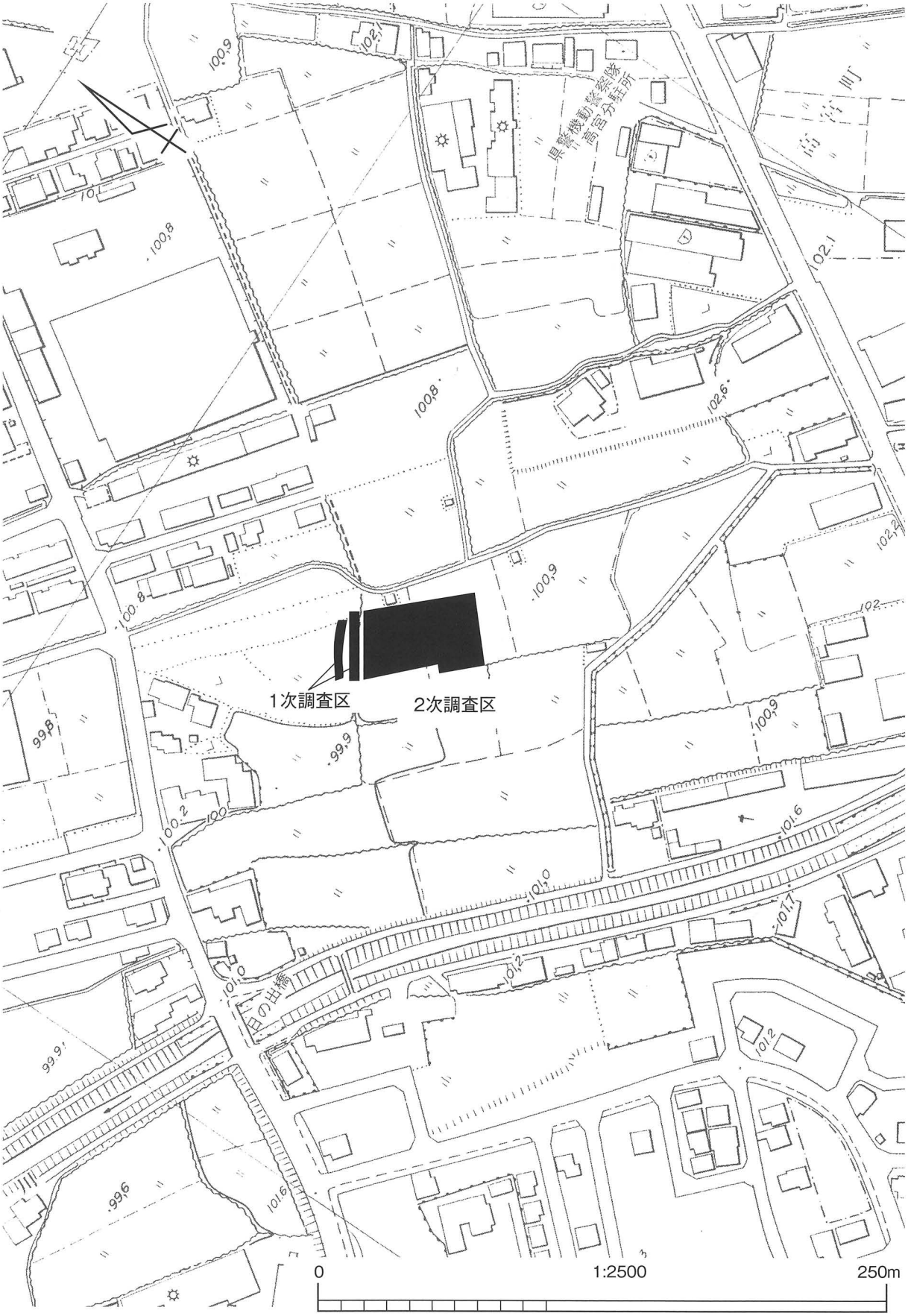


図 6　調査区の位置

Ⅱ　調査成果

1 基本層位

丁田遺跡における基本層位としては、１～６層に分類できる。１層は、暗灰色粘質土である。近現代の水田耕作土と考えられる。２層は、鉄分の多い黄褐色粘質土である。１層に伴う床土であると考えられる。

３層は、暗褐色粘質土である。図９に示した土層断面図において顕著に表れているが、基底部で幅0.7～0.85m を測る台形を呈し、人工的に盛られた土層である。２箇所で確認され、調査区の中央寄りで南北にわたって検出された盛土遺構の位置と対応する。盛土遺構は、向きが同じで、調査区西側で検出された多数の畝状遺構とも平行し、これらは一連の遺構とみられる。よって、盛土遺構は、畝状遺構に伴う畦畔であると考えられる。３層から遺物は出土していないが、調査では９世紀後半までの遺物が出土していることから、平安時代以降のものであると推定できる。

４層は、褐灰色粘質土である。後述する５層の灰色粘質土ブロックと６層の黄褐色粘質土ブロックを含む。縄文時代中期末の土器を含む包含層である。他の時期の遺物を含まず、縄文時代中期末に堆積したものであると考えられる。調査区北西部、南東部の落ち込んだ部分とその周辺に堆積している。両方とも、最大約35cm の厚さである。

５層は、灰色粘質土である。標高が低い所に堆積した土層であり、調査区内においては、低位面の調査区南端にのみ存在する。遺物をほとんど含まず、堆積した時期は不明である。

６層は、黄褐色粘質土である。丁田遺跡の基盤層であり、広域に存在する。調査区内において南西に向かって低くなっている。調査区の東側にあたる高位面においては、粒子が細かく、西側の低位面に至ると粒子が粗くなり、礫を多く含む。縄文時代の遺構検出は、基盤層である６層上面において行った。縄文時代の遺構の多くは暗褐色粘質土である。また、６層上面においては、奈良～平安時代の遺構も検出することができ、遺構の多くは褐灰色粘質土である。調査区南東部では、縄文時代包含層（４層）に掘り込まれた遺構もある。各時代とも、遺構の多くが濃い色調ではなく、遺構検出はやや困難である。

図７　調査区南東部土層断面

このように、今回の調査では、縄文時代中期末、奈良～平安時代、平安時代以降の各時期の遺構を検出した。

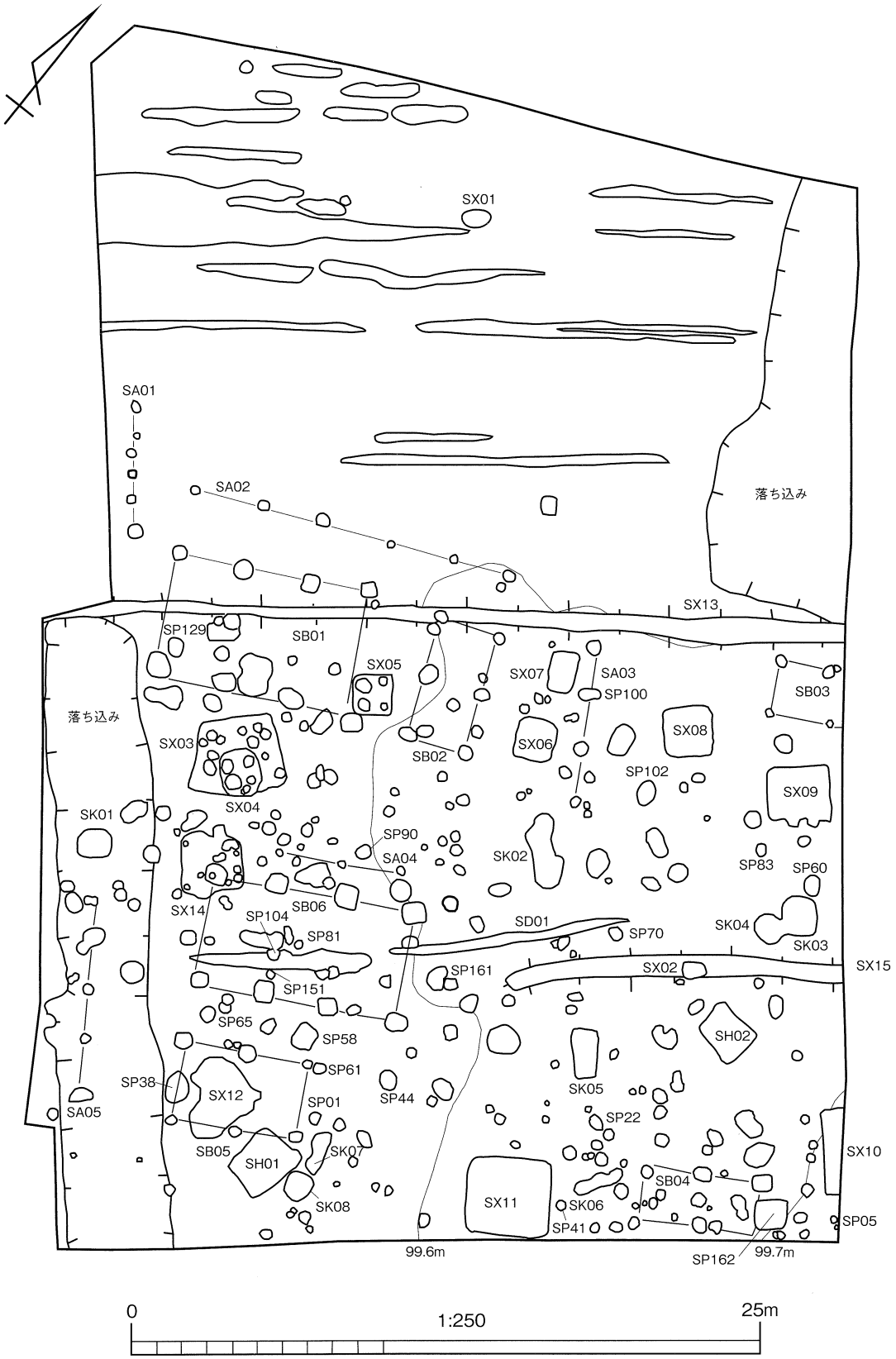
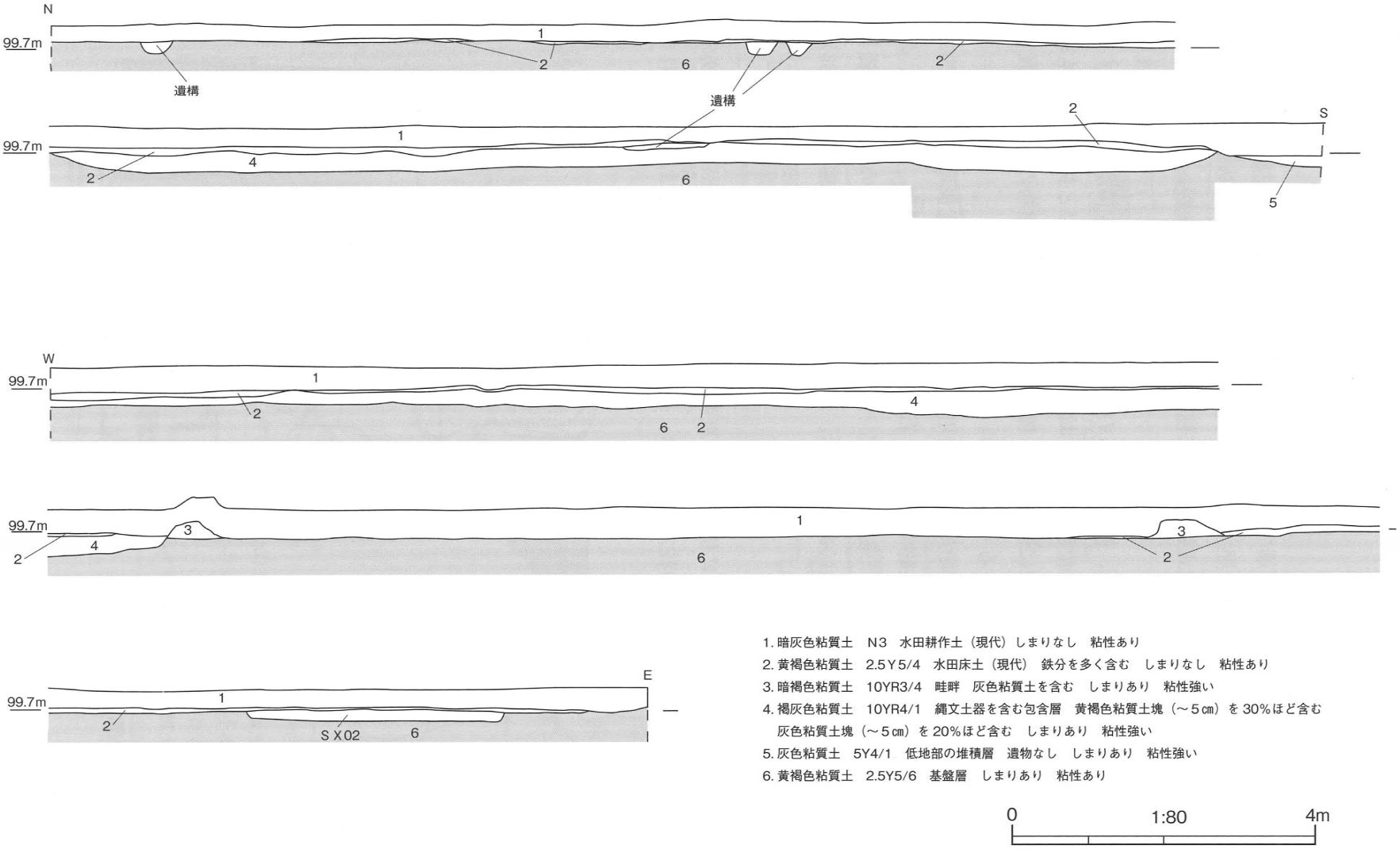

SX01
SA01
SA02
落ち込み
SX13
SP129
SB01
SX05
SX07
SA03
SP100
SB03
落ち込み
SX03
SX06
SX08
SB02
SP102
SX09
SX04
SK01
SP90
SA04
SK02
SP83
SP60
SX14
SB06
SP104
SD01
SP70
SK04
SP81
SK03
SP161
SX02
SX15
SP151
SP65
SP58
SH02
SP61
SP38
SX12
SP01
SP44
SK05
SA05
SP22
SB05
SH01
SK07
SX10
SB04
SK08
SX11
SK06
SP05
SP41
99.6m
SP162
99.7m
0
1:250
25m

図８　調査区全体図



1. 暗灰色粘質土　N3　水田耕作土（現代）しまりなし　粘性あり
2. 黄褐色粘質土　2.5Y5/4　水田床土（現代）　鉄分を多く含む　しまりなし　粘性あり
3. 暗褐色粘質土　10YR3/4　畦畔　灰色粘質土を含む　しまりあり　粘性強い
4. 褐灰色粘質土　10YR4/1　縄文土器を含む包含層　黄褐色粘質土塊（～5㎝）を30%ほど含む　灰色粘質土塊（～5㎝）を20%ほど含む　しまりあり　粘性強い
5. 灰色粘質土　5Y4/1　低地部の堆積層　遺物なし　しまりあり　粘性強い
6. 黄褐色粘質土　2.5Y5/6　基盤層　しまりあり　粘性あり

0　1:80　4m

図9　土層断面図

2 縄文時代

（1）概　要

縄文時代の遺構は、調査区西端で検出された埋設土器１基を除き、大半が東側に展開している。検出した主な遺構には、竪穴建物２軒、土坑６基、埋設土器２基がある。なお、小穴の埋土を記録し、当該期の平地式建物と掘立柱建物の検出に努めたが、こうした遺構は確認されなかった。

竪穴建物は、平面方形をなし、隅が丸いものである。柱穴は、４箇所を基本とする。それぞれ調査区東側の北端と南端に位置する。土坑には、楕円形のものと長楕円形のものがあり、一部の土坑は、竪穴建物の周辺に位置する。埋設土器には、竪穴建物の近くに位置するものと、調査区西端に単独で存在するものがある。

集落の造営時期は、縄文時代中期末（北白川Ｃ式期）～縄文時代後期初頭（中津式期）に限定される。湖東地域では、遺跡が増加し、石囲炉を有する竪穴建物、配石遺構、埋設土器が出現し、浅鉢が使用されるようになるなど、東日本から様々な文化の流入が顕著となる変革期といえる。縄文土器の記述にあたっては、近畿地方における型式編年（泉1985）に従う。

（2）竪穴建物

竪穴建物は２軒存在する。

SH01（図11）　調査区南東部に位置する。東西２m、南北2.3m、平面積4.6㎡である。４箇所の柱穴が明瞭である。南側の柱穴の間には、掘り方が確認され、焼土は確認されなかった

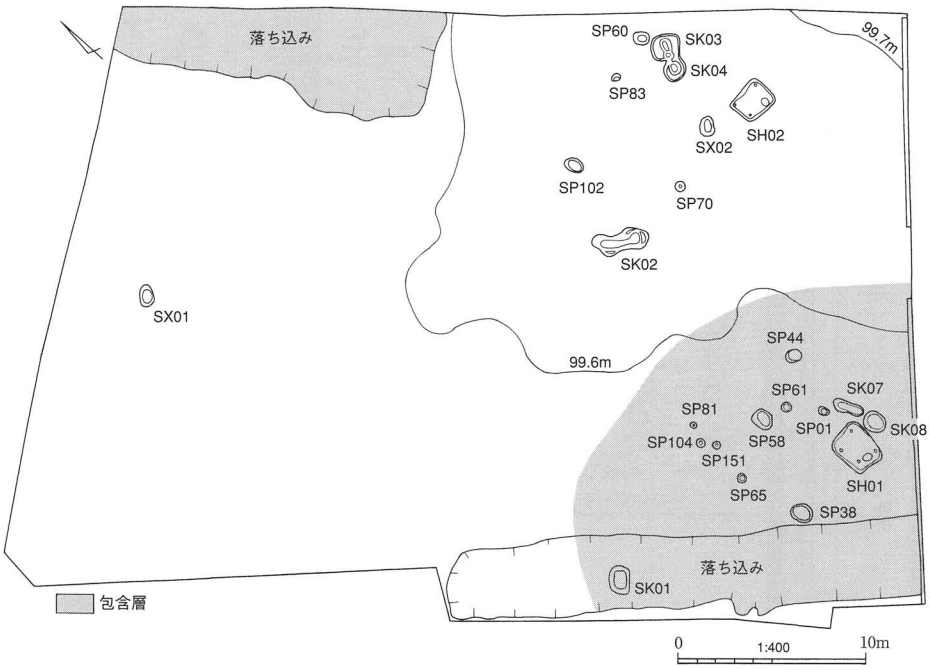


図10　縄文時代の主な遺構

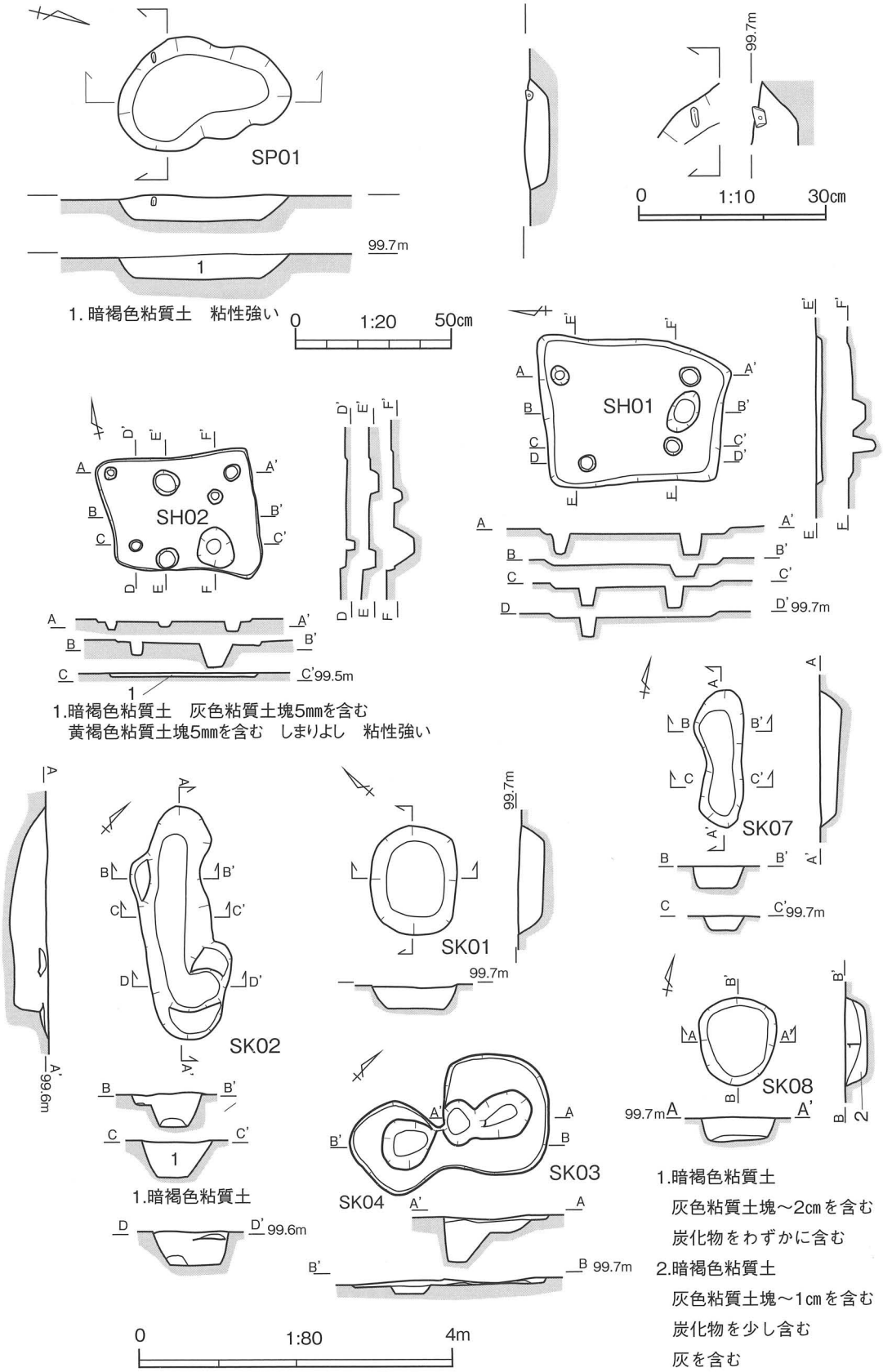


図11　竪穴建物・土坑・小穴

が、炉穴の可能性がある。

５～９は、埋土から出土した深鉢の口縁部である。棒状工具により沈線を施す有文土器である。小破片が多く、器形が窺えるものは少ない。５は、大きな屈曲部からやや内湾して口縁部が立ち上がる。口縁外面に３条の沈線を施し、その下に沈線を横位の連弧状に巡らす。６は、大きく屈曲する口縁部で、波頂部に沈線で渦巻文を施す。７は、沈線で渦巻文を施す。８は、２条の沈線を横位に施し、その横に沈線で楕円を描いている。９は、縦位に平行する沈線を施し、その下にも横位の沈線を施す。５～９は、中期末の北白川Ｃ式であろう。

106・107は、埋土から出土した磨石・敲石である。106は粘板岩製で、局部的に敲打痕がみられる。107は硬質砂岩製である。

出土土器から、遺構の時期は中期末であると考えられる。

SH02（図11）　調査区北東部に位置する。東西２m、南北1.7m、平面積3.4㎡である。柱穴は４箇所であるとみられ、焼土は確認されなかったが、柱穴以外の掘り方は炉穴である可能性がある。

10、11は埋土から出土した深鉢の口縁部である。10の外面には横位の沈線が施され、その下には縄文が施される。11は、横位に沈線が施され、その下には沈線を縦位の連弧状に巡らす。10、11は中期末の北白川Ｃ式であろう。

108は、SH02内のSP50から出土した湖東流紋岩製の磨石・敲石である。

出土土器から、遺構の時期は中期末であると考えられる。

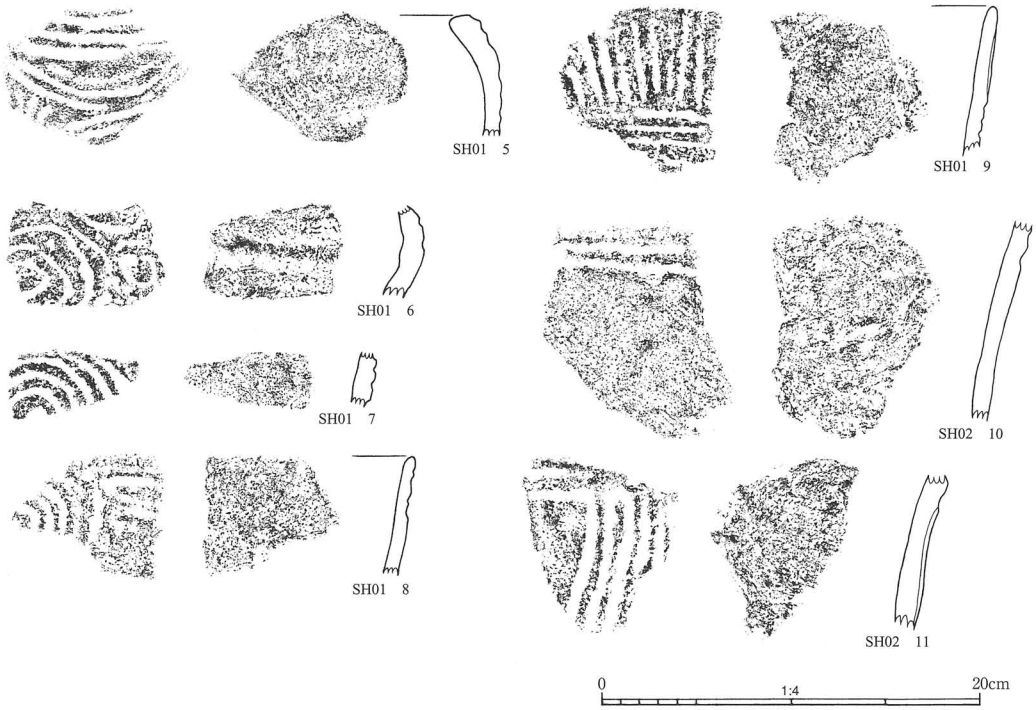


図12　SH01・SH02出土遺物

（3）土　坑

土坑は6基存在する。

SK01（図11）　調査区南端部に位置する。楕円形を呈し、東西1.1m、南北1.4mである。底面の深さは0.32mである。

12～20は、SK01から出土した。12～16は、深鉢の口縁部である。12は波状を呈し、2種類の把手がつけられる。沈線で縦のS字文を描いた把手部分は中空ではないが、もう一方の弧状の沈線の施された把手は中実である。いずれの沈線も幅が広く、浅いもので、装飾が立体的である。胴部にかけては、垂下沈線が施される。在地の土器とは異なる特徴をもち、東海地方西部に主に分布する神明式に位置づけられる可能性がある。13には多重区画文と横位の沈線による区画文が施され、その横には連弧状の沈線も施される。北白川C式で、深鉢A1類である。14の口縁の外面上部には指頭による刺突があり、その刺突の上下には横ナデ調整が施される。その下には縄文が施されている。15は、外面と口縁端部に櫛歯状工具による条線で斜格子を描く。後期初頭の中津式であろう。16は、沈線を横位に施し、その下にも綾杉状に沈線を施す。胎土が密である。北白川C式の深鉢A5類で、中期末であろう。17は深鉢の胴部で、指頭による刺突があり、その周囲に沈線を巡らし、多重区画文を描く。中期末で

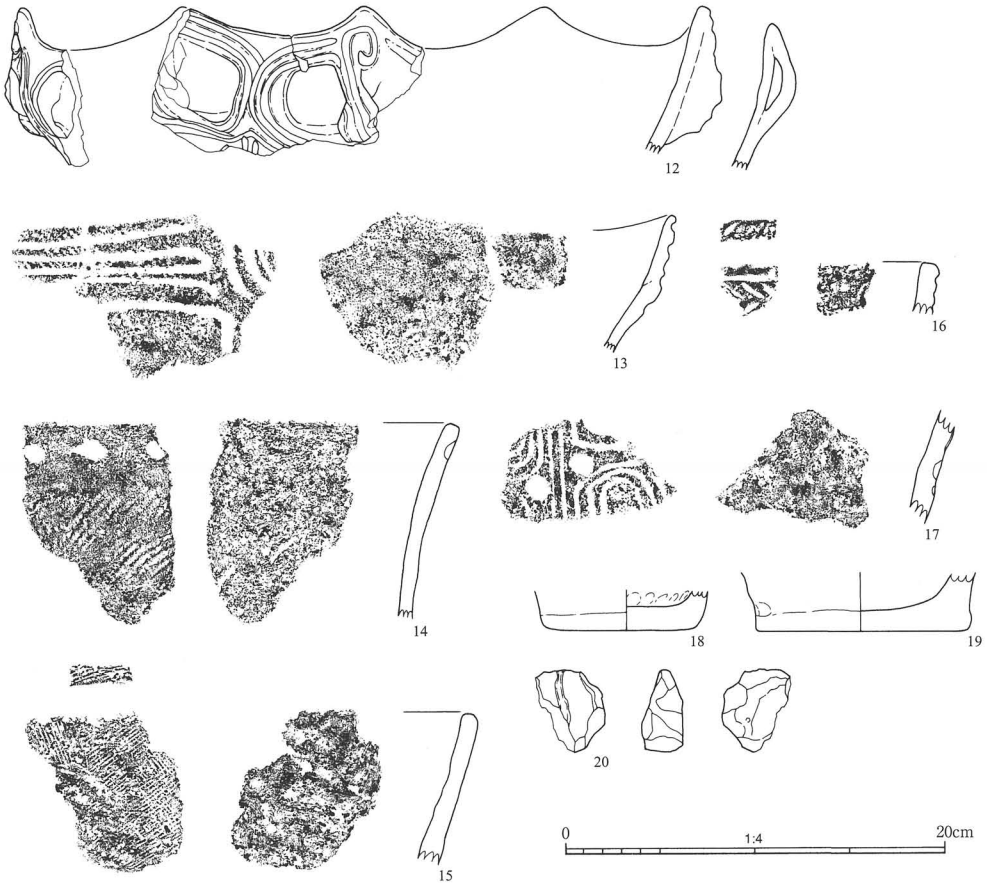


図13　SK01出土遺物

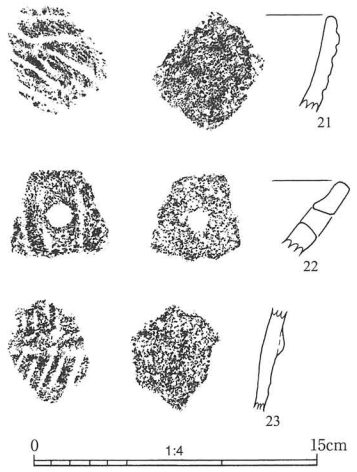


図14　SK02出土遺物

あろう。18、19は底部である。18は底面から直線的に立ち上がる土器で、19は底面直上でくびれ、後期の底部に近い。20は、焼成粘土塊で、一方の面に筋状のくぼみをもつ。

出土遺物の時期は、中期末～後期初頭にわたり、大半が中期末のものである。出土遺物から、遺構の時期は、中期末～後期初頭であると判断される。

SK02（図11）　長楕円形を呈し、東西３m、南北0.9～1.1mである。南側が深くなっており、最深部で深さ0.44mである。

21、22はSK02から出土した深鉢の口縁部である。21は、横位に２条の沈線を施し、その下に斜位の沈線をめぐらす。22の外面には、縦位の沈線と隆帯があり、その間を外側から穿孔している。浅鉢Ｃ３類に比定できる可能性がある。23は、深鉢の胴部である。横位の隆帯があり、その上下には沈線を施す。深鉢Ｂ１類であろう。

出土遺物の時期は、中期末であると考えられる。出土遺物が示すように、遺構の時期は中期末であろう。

SK03（図11）　調査区北端部に位置し、SK04と切り合うが、両者の前後関係は不明である。楕円形を呈し、東西1.36m、南北15.5mである。柱穴状の掘り方であるが、周辺ではSK03とともに建物を構成する可能性のある遺構は検出されなかった。遺物は出土していないが、埋土の特徴から、縄文時代の遺構であると推定される。

SK04（図11）　楕円形を呈し、東西1.16m、南北1.05mである。24～26は、SK04から出土した深鉢の口縁部である。24は、深鉢Ａ４類である可能性がある。24～26は、口縁上部には横位の沈線が施され、厚さと断面形が近似し、浅黄橙色の粗い胎土である点が共通しており、同一個体である可能性がある。出土遺物の時期は中期末で、遺構の時期を示していると考えられる。

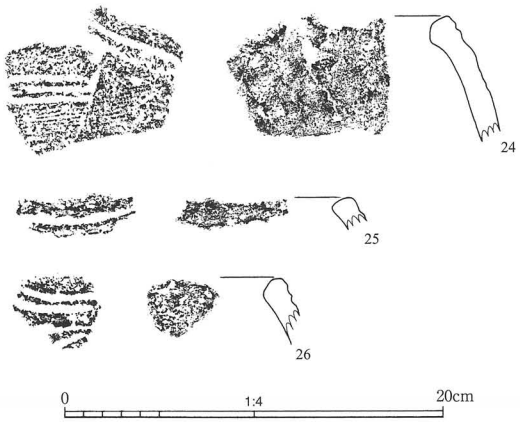


図15　SK04出土遺物

SK07（図11）　SK08とともにSH01の近くに位置する。長楕円形を呈し、東西0.46～0.66m、南北1.76mである。最深部で深さ0.28mである。

27～31は、SK07から出土した。27～31は深鉢の口縁部である。27の口縁上部には縄文が施され、その下には連弧状の沈線を巡らす。北白川Ｃ式のＡ１類で、中期末である。28は、内外面にナデ調整を施す朝顔形深鉢の口縁部である。29、30は横位の沈線が施される。31には、沈線と刺突が施されている。29～31は、円筒形深鉢の口

縁部である可能性がある。また、28～31には、北陸地方西部に分布する大杉谷式の要素がみられ、外来系土器とみられる。

109、110は、SK07から出土した石器である。109は、チャート製の敲石である。円形で、全体に敲打痕が顕著にみられる。石器製作におけるハードハンマーとして用いられた可能性がある。110は、湖東流紋岩製の磨石・敲石で、部分的に敲打痕がみられる。

出土遺物の時期は中期末で、遺構の時期を示していると考えられる。

SK08（図11） 楕円形を呈し、東西1.0m、南北1.14mである。埋土に炭化物を少し含み、2層には炭が含まれていた。底面の深さは、0.3mである。

32～43、111は、SK08から出土した。32は、深鉢の口縁部で、波状を呈する。上端部に沿って1条の沈線が施され、その下に連弧状の沈線をめぐらす。北白川C式の深鉢C 3類で、中期末であろう。33は沈線で渦巻文を描き、その横には縄文を施し、区画文を描く。北白川C式の深鉢A 3類である。34は、内外面にナデ調整を施し、屈曲部には隆帯の剥離痕がみられる。35は、口縁端部から外面にかけて粘土紐が貼り付けられ、横位の沈線が施される。朝顔形の深鉢の口縁部であろう。大杉谷式あるいは神明式と関わる外来系土器であると推定される。36は、横位の沈線が2条施される深鉢の口縁部である。37は、外面に幅広く、浅い沈線による楕円形区画文が描かれ、その中に刺突列点文が施される深鉢の橋状把手部である。楕円形区画文の中に刺突文を施しており、外来系土器であろう。大杉谷式との関係が推定される。38は、外面に連弧状の沈線を施す深鉢の胴部である。北白川C式の深鉢C 2類に比定できる可能性がある。39は深鉢の口縁部で、横位の隆帯と沈線が施される。外来系土器であろう。40は深鉢の口縁部で、横位の隆帯と沈線、その下に縄文を施す。41は、刺突列点文、横位の2条の沈線、隆帯をもつ。39～41は、破片のため、断定はできないが、外来系土器である可能性がある。42は、底部直上でくびれ、縦位の幅1cm程度の隆帯が全周に間隔をもって巡るものである。43は、底部直上でくびれる底部である。内面には煤の付着が認められる。

111は、硬質砂岩製の磨石・敲石であると推定される。

出土土器は北白川C式が主で、北陸地方西部や東海地方西部から搬入された可能性のある土器も含まれる。出土遺物から、遺構の時期は中期末であると考えられる。

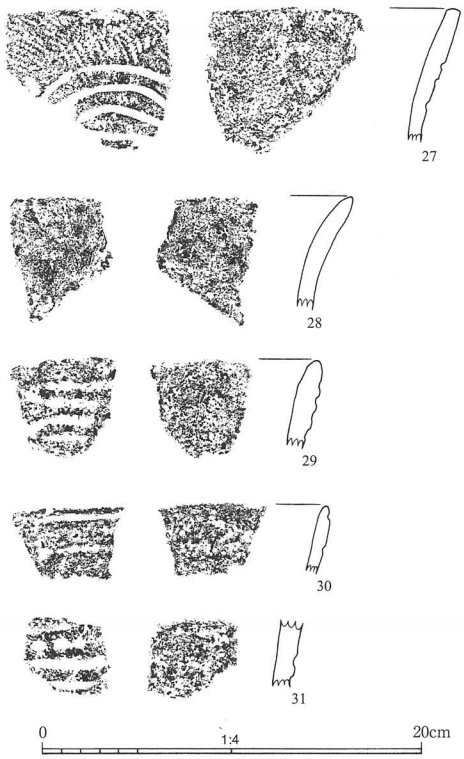


図16　SK07出土遺物

（4）埋設土器

埋設土器は2基存在する。

SX01（図18）　調査区西端部に位置する屋外埋設土器で、周辺では他の縄文時代の遺構は検出されなかった。土坑のなかに深鉢1個体が横位の姿勢で据えられていた。埋設土器は、土坑の長軸に対して直行し、土坑の南側に寄って埋設されていた。土坑は東西0.73m、南北1.13mの楕円形で、底面は東西0.4m、南北0.64mを測る。土器と北側上端との空間の長さは、0.33mである。一方、土器と南側上端との空間の長さは、0.23mである。西側の空間の長さはほぼ0.2mである。底面と土器の間隔は、1.5～2.0cmである。

削平のために、埋設土器の口縁部側はなく、胴部の1/4程度が残存していた。土坑の大きさから、埋設された土器は複数ではなく、もともと1個体であった可能性が高い。ただし、土器が完形であったかどうかは、不明である。土器が完形であったとして、仮に復元してみると、約40cm削平されていることが想定される。

埋設土器の内面東寄りの位置からは、大珠1点（45）が斜位の状態で出土した。土器と大珠との間隔は2.0cm程度である。埋設土器と大珠の他に遺物は出土しなかった。埋設土器の中には、土が流入しているものとみられ、大珠は原位置からわずかに動いている可能性が十分考えられる。しかし、大珠と埋設土器との平面的な位置関係及び両者のレベルの近さを考

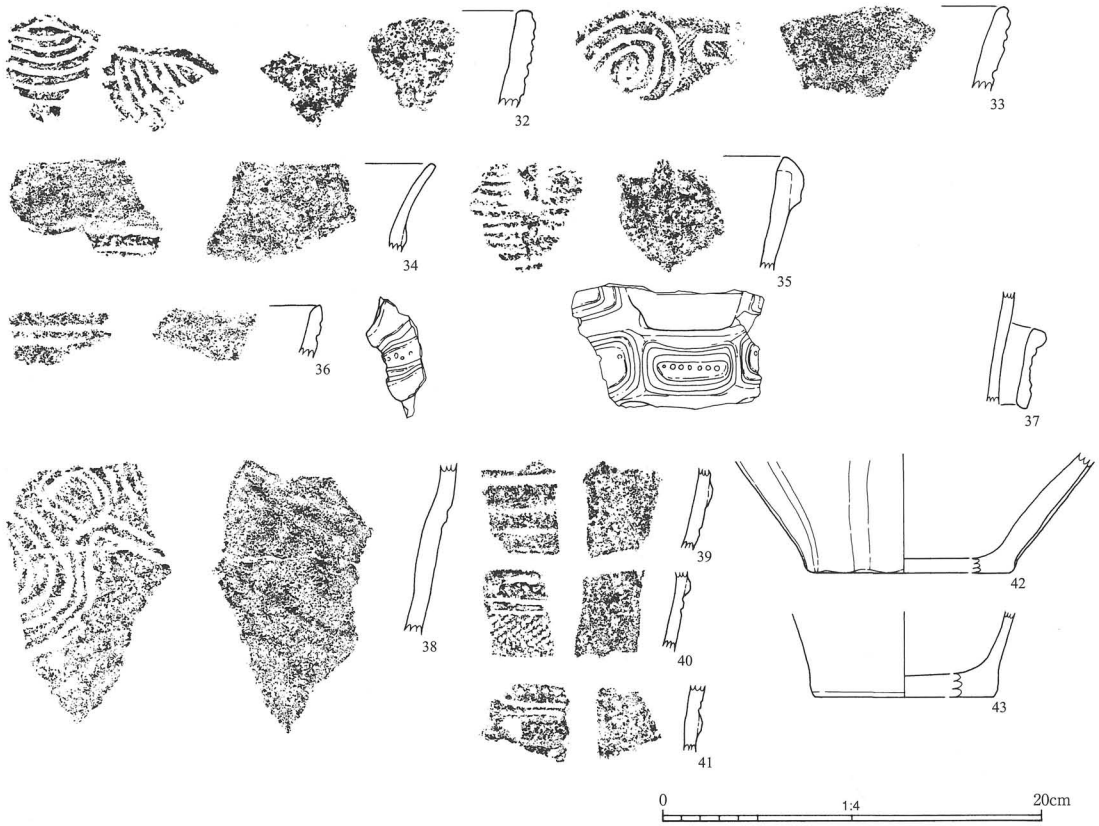


図17　SK08出土遺物

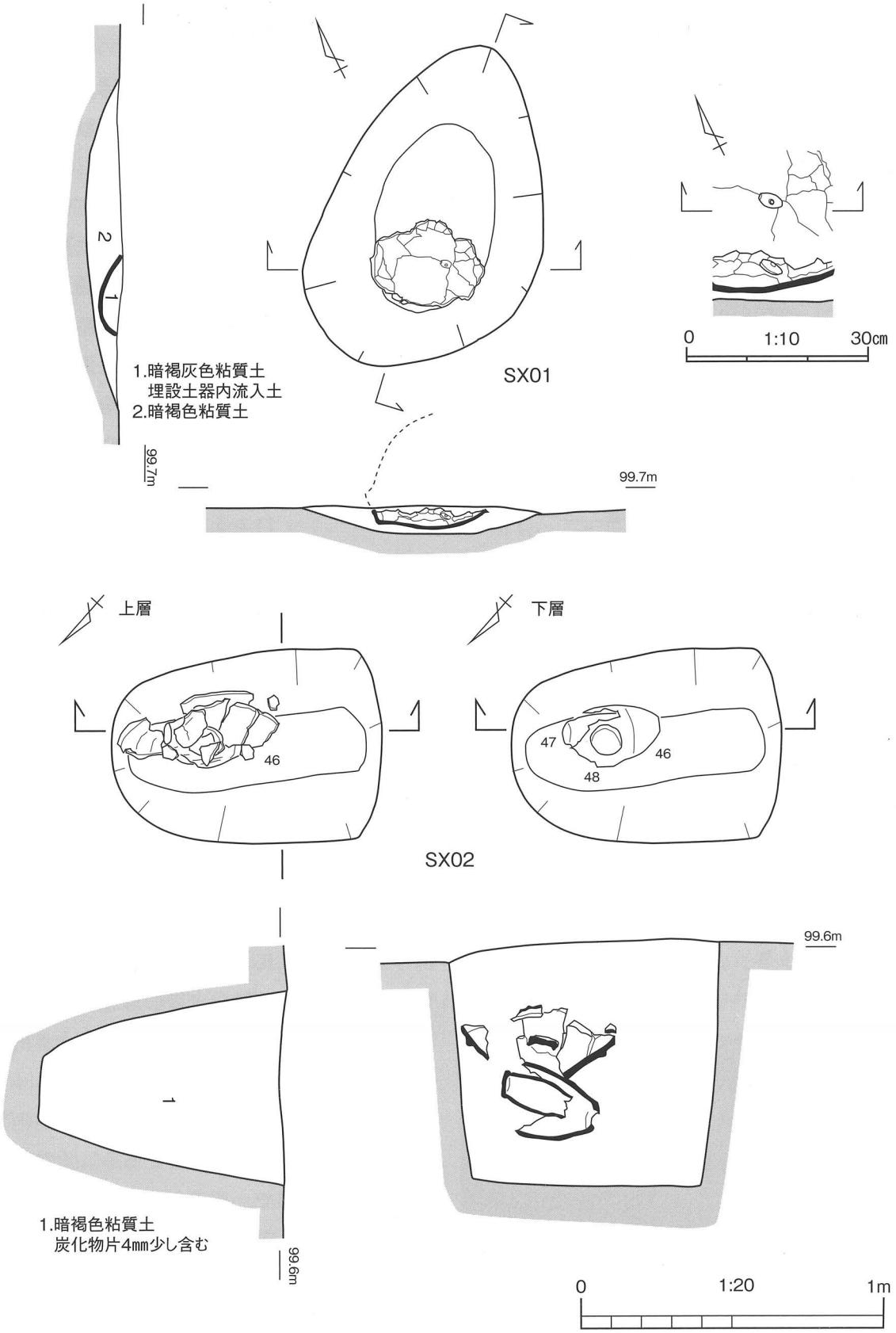

1.暗褐灰色粘質土
埋設土器内流入土
2.暗褐色粘質土
SX01
99.7m
99.7m
0
1:10
30cm
上層
下層
46
47
46
48
SX02
99.6m
1.暗褐色粘質土
炭化物片4mm少し含む
99.6m
0
1:20
1m

図18　埋設土器

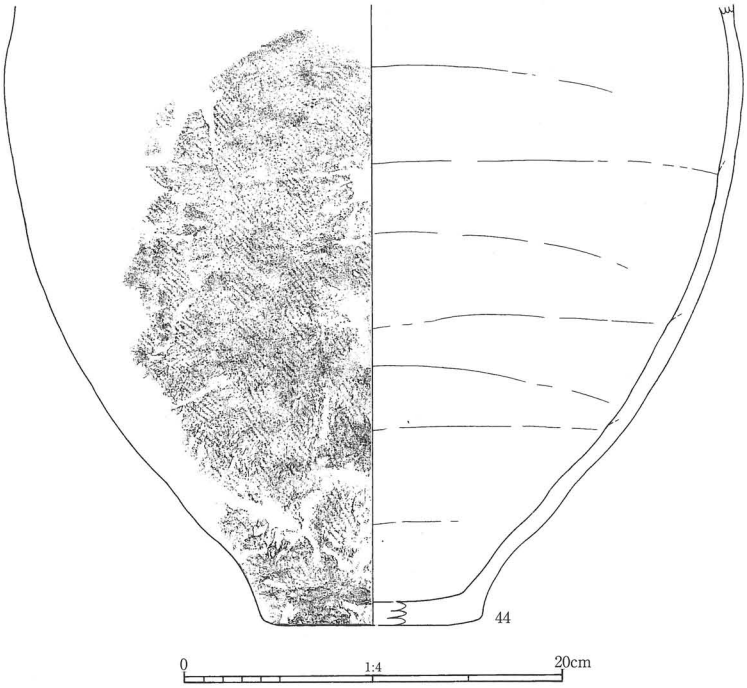


図19　SX01埋設土器

慮すると、もともと大珠が埋設土器の中に納められていた可能性は高いと考えられる。埋設土器の中からは、人骨や歯は確認されなかった。

44は、埋設されていた深鉢である。ほぼ全面に縦位に間隔をあけて縄文が施され、内面にはナデ調整が施される。外面には部分的に煤が付着している。底部は全径の半分が残存し、底部が穿孔されている可能性は低い。底径推定11.7cmである。深鉢D類で、中期末である。

大珠（45）は、硬質で、白色と黄褐色がわずかに混じる淡緑色を呈し、鰹節形と呼称される長楕円形のものである。肉眼による観察では、糸魚川産の翡翠製であるとみられる。中央よりわずかに片側に寄った部分に穿孔されている。長さ4.05cm、幅2.17cm、最大厚1.28cm、重量21.5gを測る。両面の外孔径は片面が0.69cm、0.85cm、一方の面が0.74cm、0.79cmである。内孔径は、0.43cm、0.45cmを測る。孔の断面形は算盤玉形を呈し、両面穿孔されている。両面には研磨された際の調整面をとどめる。断面形では、一方の面が膨らみをもつのに対し、片方の面は平坦ぎみであり、表裏の区別があったのかもしれない。両端部は少し窪むが、角に丸みをもち、製作当初の形態なのか、欠損後に摩滅したのかは不明である。全体的に入念に研磨がなされている。

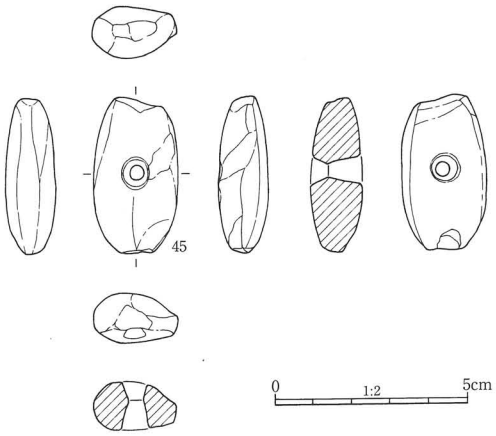


図20　SX01出土翡翠大珠

SX02（図18）　調査区北東部のSH02南西側に近接した屋外の埋設土器である。土坑の平面形は、楕円形で、東西0.64m、南北0.9mである。断面は、底面が狭く平坦な台形で、深さは0.8mである。中層から下層にかけて、3個体の土器が埋設されていた。中層の上部において正位の有文の深鉢の口縁部片（46）と、

これとは別個体の底部片（48）を検出した。底部片（48）は、底部外面を上にし、内面側を下にした状態であった。48を除去すると、口縁部とは同一個体の斜位になった深鉢の胴部片（46）が検出され、この中には、口縁部の全周が打ち欠かれた無文の深鉢（47）が、同様に斜位の姿勢で、倒立して口縁部側を下にし、入れ子状に挿入されていた。しかし、こうした出土状態を理解するうえで、46の口縁部片が正位であるのに対し、46の胴部片と中に挿入された47が斜位である点が問題となる。46の有文の深鉢は斜位で埋設されたとみることもできるが、上部の口縁部片に注意する必要がある。46の口縁部片と胴部片との位置関係をみると、長年月の土中環境において、もともと斜位に据えられていた土器の口縁部のみが、正位へ姿勢を変えて上部へ移動したと理解するのは難しいからである。

図21　SX02　底部片（48）検出状態　（西から）

一方、正位の46の口縁部片が、ほぼ原位置であるとして考えてみると、46の胴部片とそれに挿入された47は、内容物があることも相まって口縁部に比べるときわめて重いことから、土中において自重で下方へ移動し、この際に口縁部と分離し、姿勢を正位から斜位へ変えたことも想定できる。後者の場合の方が無理なく説明することができ、埋設土器は、本来正位置に埋設されていた可能性が高いものと考えられる。このように考えると、上部にあった逆位の底部片（48）は、46と47の真上に位置していたと想定することができ、蓋のように置かれていた可能性がある。

また、土壌化しているために内容物は不明であるが、47の無文土器の中には、暗灰色の粘土が詰まっていた。土坑の埋土は、最大で厚さ4cmの炭化物を含む暗褐色粘質土であり、土器の中の粘土と土坑の埋土とは明らかに異なり、粘土が土器の外から流れ込んだものとは考えにくい。土器を埋設した際、何らかの内容物が土器の中に納められたと考えられる。土器の容量は、高さ23cm、最大幅14cm程度である。土坑の埋土や埋設土器の中から人骨や歯は出土しなかった。

46は、無文土器（47）が挿入されていた有文の深鉢である。胴部と底部の一部を欠くが、残存状況は良好である。口縁部は全周残存し、打ち欠かれてはいない。一方、底部については、底部中央部を欠き、穿孔あるいは打ち欠かれた可能性がある。しかし、欠損により、打ち欠かれた面を確認することはできない。

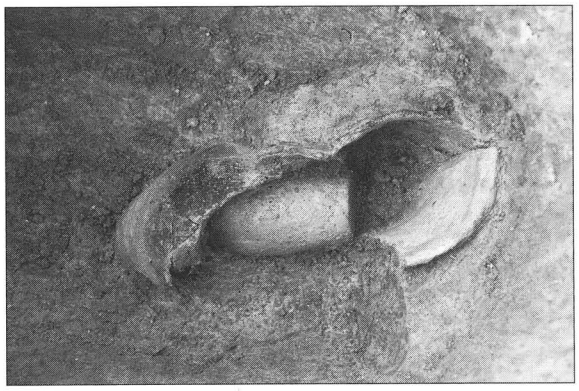


図22　SX02　埋設土器　（東から）

楕円形区画と把手がそれぞれ8つ認められ、

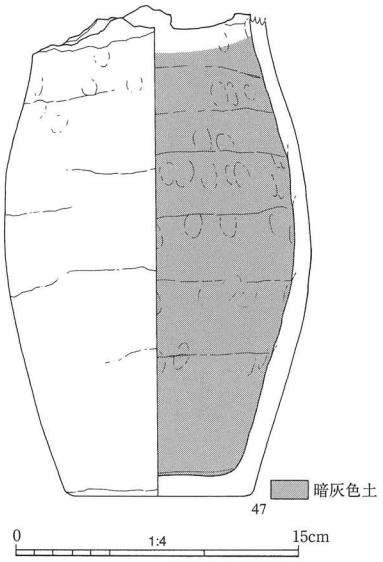


図23　SX02埋設土器粘土遺存状態

把手には空間がなく、中実である。把手の上下には指頭による刺突があり、その間の楕円形区画内には、綾杉状沈線文が充填される。綾杉状沈線文の方向は、どの区画もすべて同じである。楕円形区画の下から胴部中程にかけては、数本で１単位をなす垂下沈線が、３～3.5cm の間隔を空けて縦位に施される。摩滅のため、不明瞭だが、垂下沈線の間には縄文が縦位に施されている。胴部下方はゆるやかに膨らみ、垂下沈線がなく、粘土紐の積み上げ痕と指頭圧痕をとどめる。焼成時の黒斑の範囲は大きく２箇所確認できる。胴部中程の外面には、煤が少量付着する。深鉢Ｂ２類で、中期末である。器高49.2cm、

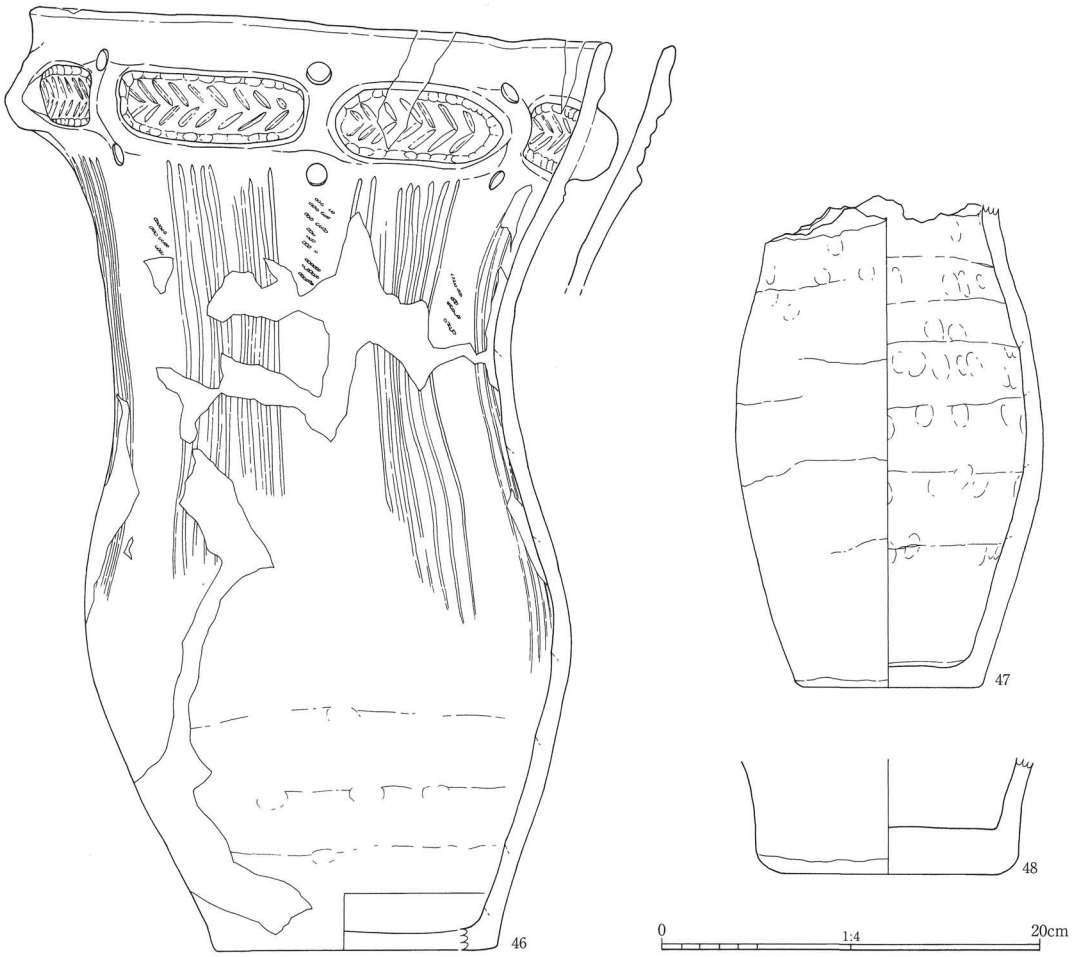


図24　SX02埋設土器

口径30.3cm、胴径推定25.7cm、底径推定15.0cm を測る。

47は、46の中に挿入されていた無文の深鉢である。長胴形を呈し、小型である。打ち欠かれた口縁部を除き、ほぼ完形である。文様はなく、内外面には、指頭圧痕と粘土紐の積み上げ痕をとどめ、器面の凹凸が著しい。内外面に煤の付着はみられない。残存高26.1cm、胴径15.5～16.3cm、底径10.0cm を測る。

48は、深鉢の底部片である。内面には煤が付着している。中期末であると推定される。底径推定13.9cm である。

埋土中からは、49～61、112が出土した。49～52は上層から出土した。49は浅鉢の可能性があるものの、判然としない。50は、指頭による刺突と縦位の沈線が施される。深鉢Ｂ２類であろう。51は、刻みを有する横位の隆帯のある深鉢片である。52は、横位の沈線と刻みを有する隆帯のある深鉢片である。51、52は、胴部上端の隆帯部分の破片であると考えられ、北陸地方西部に分布圏をもつ大杉谷式であろう。53～61は、下層から出土した。53は深鉢の口縁部で、沈線で渦巻文が描かれる。深鉢Ａ１類で、中期末である。54も深鉢Ａ１類の口縁部であろう。区画文の下には垂下沈線が施され、区画文の沈線の中には刺突が施されている。中期末である。55は、深鉢の口縁部である。外面は粗いナデ調整で、波状の垂下沈線が施され、凹凸が著しい。56は、深鉢の口縁部で、外面に櫛歯状工具による条線で斜格子を描く。55、56は、褐灰色の密な胎土で、丁田遺跡の多くの縄文土器が該当する北白川Ｃ式土器の胎土とは異なる。後期初頭の中津式であろう。57は、深鉢の胴部である。縦位の垂下沈線とその間に縄文が施される。深鉢Ｂ類で、中期末である。58は、深鉢の底部である。底径6.0cm を測り、上げ底で、指頭による切り込みが４箇所つくられ、内面には煤が付着する。東海地方西部からの搬入品の可能性がある。59～61は焼成粘土塊である。いずれも胎土が密で、両面もしくは一方の面が平らである。

112は、埋土の最下層から出土した。硬質砂岩製の磨石・敲石の可能性がある。

埋土からは、中期末～後期初頭の土器が出土したが、一部の土器は流れ込んだ可能性があり、遺構の時期としては、埋設された土器の時期を重視し、中期末であると考えられる。

（５）小穴・包含層

SP01（図11） SH01の北側に位置する小穴である。東西0.37m、南北0.55m を測る。底面の深さは８cm で、削平を受けている可能性が高い。底面から５cm 上の位置で、小珠（62）が出土した。削平を考慮すると、小珠は、遺構の底面近くに位置していたものと想定できる。63の深鉢口縁部が共伴して出土した。２条の横位の沈線が施され、大杉谷式に比定できる可能性がある。

小珠（62）は、淡緑色を呈し、長さ2.85cm、幅1.9cm、最大厚0.55cm、重量5.0g である。石材の表面は滑らかでなく、蛇文岩の質感に近いが、不明である。平面形は半月形、断面形は扁平で、研磨された際の調整面をとどめる。中央には穿孔され、外孔径0.6cm、0.52cm で、内孔径0.3cm を測る。孔の断面形は算盤玉形で、両面から穿孔されている。

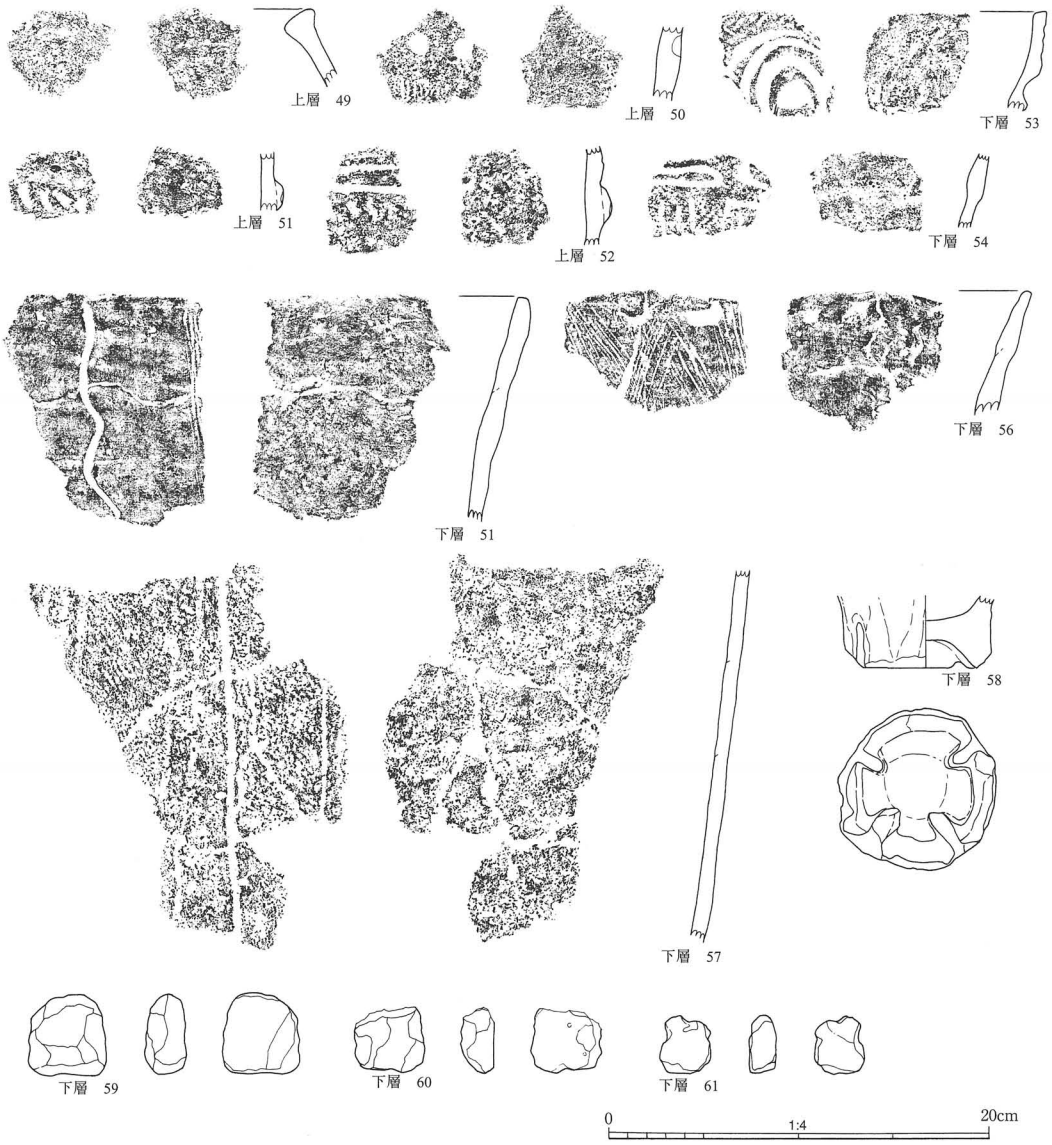


図25　SX02出土遺物

その他に、114は、SP38から出土した湖東流紋岩製の石皿片である。図示していないが、縄文土器の小片と共伴した。時期は中期末である可能性が高い。

64～72は、SP44から出土した。64は、深鉢の口縁波頂部で、上部外面には縄文が、その下には沈線が施される。深鉢Ａ１類で、中期末である。65は、深鉢口縁部で、摩滅が著しいが、上部に刺突が施され、不明瞭ながら下方にも刺突がみられる。大杉谷式であろう。66は、沈線により渦巻文が描かれる。深鉢Ａ１類で、中期末である。67は、深鉢の口縁部で、深鉢Ａ４類であろう。68は、深鉢の口縁部で、大杉谷式の可能性がある。69は、横位の隆帯と刻みが施される深鉢の胴部である。深鉢Ｂ１類の可能性がある。70は、刻みを有する隆帯部分の破片で、大杉谷式であろう。71は、深鉢の底部で、底部から直上でわずかにくびれ、立ち上がる。底部外面には、網代の可能性のある圧痕がみられ、内面には煤が付着している。72は、

深鉢の底部で、底部直上で少しくびれて立ち上がる。底部外面には網代痕がみられる。115、116はSP44から出土した石器である。115は、花崗斑岩製の磨石・敲石である。116は、硬質砂岩製で、石皿である可能性がある。出土遺物から、SP44の時期は、中期末であると考えられる。また、北白川C式を主体とし、大杉谷式も若干含まれる。

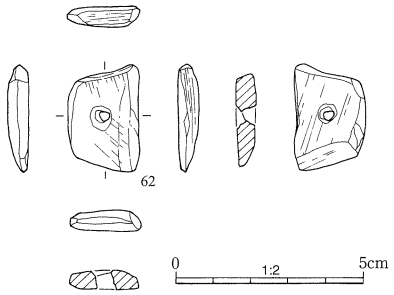


図26　SP01出土小珠

73～77は、SP58から出土した。73は、深鉢の口縁部で、深鉢A 5類であろう。74、75は、深鉢の口縁波頂部で、上部外面には縄文が、その下には沈線が施される。深鉢A 1類で、中期末である。76は、深鉢の口縁部で、把手は中実である。深鉢B 2類である。楕円形区画がつくられ、その中には綾杉状沈線が施される。その上には縄文がわずかに確認できる。77は、深鉢の底部で、底部直上から少しくびれて立ち上がる。117は、SP58から出土した硬質砂岩製の砥石あるいは磨石・敲石である。118は、SP58から出土した凝灰岩製の不明石器である。出土遺物から、SP58の時期は、中期末であると考えられる。

119は、SP60から出土した湖東流紋岩製の磨石・敲石である。図示していないが、縄文土器小片と共伴した。時期は中期末である可能性が高い。

78は、SP61から出土した深鉢の底部で、底部直上からまっすぐ立ち上がるものである。SP61の時期は、中期末であろう。

79～81は、SP65から出土した。79は、内湾した口縁部で、2条の沈線が施される。深鉢C類の可能性がある。80は、深鉢の口縁部で、指頭による刺突が施される。81は、沈線で渦巻文が描かれた深鉢である。80、81は深鉢A 3類であろう。出土遺物から、SP65の時期は、中期末であると考えられる。

82は、SP70から出土した。垂下沈線の施された深鉢の胴部である。中期末で、遺構の時期を示していると考えられる。

83は、SP81から出土した。深鉢の胴部で、沈線により重画文と連弧状の文様が描かれる。中期末で、遺構の時期を示していると考えられる。

120は、SP83から出土したサヌカイト製の縦形石匙である。剥離により刃部を作り出している。図示していないが、縄文土器小片と共伴した。時期は中期末である可能性が高い。

84は、SP102から出土した。深鉢の口縁部で、外面には指頭による刺突と縄文が施される。刺突された部分の内面が押し出されている。深鉢A 3類である。121は、SP102から出土したチャートの縦長剥片である。出土遺物の時期は中期末で、遺構の時期を示していると考えられる。

85は、SP151から出土した。幅が広く、浅い沈線を有する把手が付けられた深鉢頸部のくびれ部である。東海地方西部の神明式であろう。中期末で、遺構の時期を示していると考え

られる。

その他、113は、SX03に混入した湖東流紋岩製の石皿片である。二次的な被熱により、黒変している。

また、図示していないが、SP100からは、方柱状を呈し、加工面のあるチャートの原石が１点出土している。SP41からは、サヌカイトの剥片が、SP90、SP161からは、チャートの剥片がそれぞれ１点ずつ出土している。縄文土器の小片を伴ったSP41出土剥片を除き、これらは、古代の遺構に混入したものや縄文土器と共伴しなかったものであるが、周辺の遺構の時期を考慮すると、ほぼ中期末～後期初頭の時期におさまるものであろう。

包含層　調査区北西部の落ち込み及び南東部の落ち込みとその周辺には、縄文時代の包含層（４層）が存在し、厚い部分で約35cmを測る。コンテナ約２箱分の縄文土器が出土し、大半は南東部の包含層から出土したものである。縄文土器は、中期末に限定され、包含層はこの時期に堆積したものであると考えられる。

以下、４層出土遺物について記す。

86、87、90～98、99～101、104、105は、SX12付近の４層から出土した。

86は、深鉢口縁部の波頂部である。口縁端部の内外面に縄文が、外面には波頂部に沿った沈線、縄文、刻みのある隆帯が施される。隆帯に刻みを施しており、大杉谷式との関係が推定される。87は、深鉢の口縁部である。把手は中実で、それを挟んで上には指頭による圧痕が、下には刻みが施される。把手の左右には、楕円形区画がつくられ、その中にさらに沈線が施され、中央には刺突文を有する。楕円形区画内に刺突が施されていることから、大杉谷式の可能性がある。90は、深鉢口縁の波頂部である。外面には、波頂に沿って刺突が、その下には沈線で渦巻文が描かれる。深鉢Ａ１類であろう。91は、深鉢の口縁部である。沈線により渦巻文が描かれる。92は、深鉢の口縁部で、２条の沈線が施される。93は、刺突文のある深鉢の口縁部である。94は、深鉢の口縁部で、口縁端部がつまみ上げられて、肥厚する。北陸地方西部の大杉谷式の特徴をもつ。95は、深鉢の口縁部で、沈線により渦巻文が描かれる。上端部には縄文が施されている。96は、刺突のある断面三角形の隆帯部で、胴部のくびれ部であろう。大杉谷式であると推定される。97は、刺突文が不規則に施された隆帯を有し、斜めの沈線が施された胴部である。大杉谷式であると推定される。98は、浅鉢の把手部である。把手は中空で、内外面には丁寧なナデ調整が施される。口縁部が湾曲して張り出した部分には、横位の沈線が施される。99は、浅鉢の把手部であろう。100は、底面から真っ直ぐ立ち上がる底部である。101は、底面からわずかにくびれて立ち上がる底部で、内外面には部分的に煤が付着する。104、105は、焼成粘土塊である。胎土は密で、105には筋状のくぼみがある。

88、89、102は、SX15付近の４層から出土した。88、89は、無文の深鉢の口縁部である。

102は、底面から少しくびれて立ち上がる底部である。

４層出土石器として、SX12付近の４層からは、122、123、124、126、127、128が、調査区南東部の４層からは、129、130が出土した。125は、出土地点を記録していない。これらの石

SP01 63
SP44 64
SP44 65
SP44 66
SP44 67
SP44 68
SP44 69
SP44 70
SP58 73
SP44 71
SP44 72
SP58 74
SP58 75
SP58 76
SP58 77
SP61 78
SP65 79
SP65 80
SP65 81
SP70 82
SP81 83
SP151 85
SP102 84
0
1:4
20cm

図27　小穴出土遺物

器は、縄文時代中期末の土器と共伴し、当該期に位置するものと考えられる。

122は、湖東流紋岩製の石皿である。上面は使用により、わずかに窪む。123は、花崗斑岩製の磨石・敲石である。124は、花崗斑岩製の磨石・敲石である。125は、硬質砂岩製の磨石・敲石である。中央に敲打痕がみられる。126は、定角式の磨製石斧である。完形で、左右両方の主面には使用による擦痕が、刃部には刃こぼれがみられる。緑灰色を呈するが、石材は不

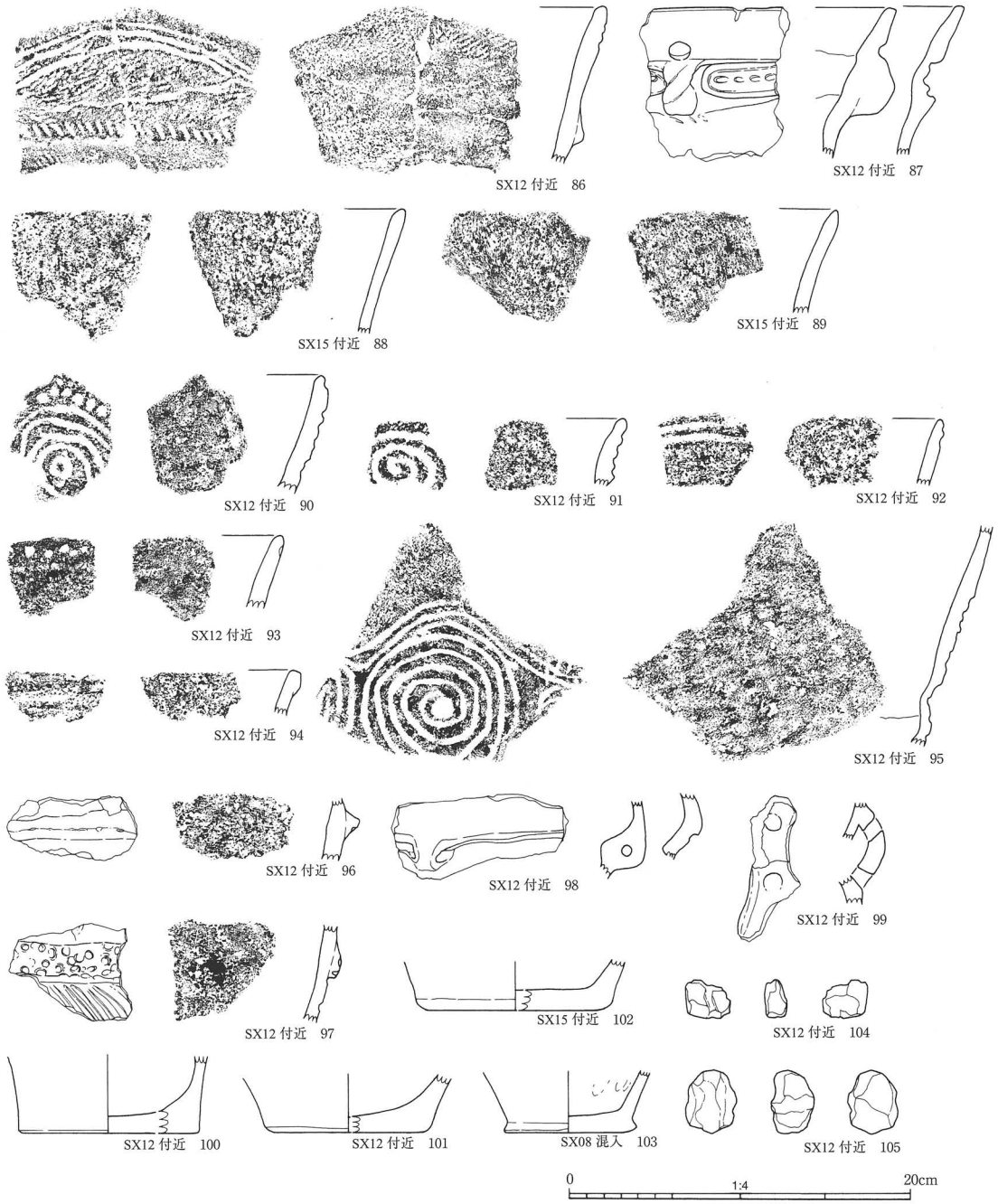


図28　包含層他出土遺物

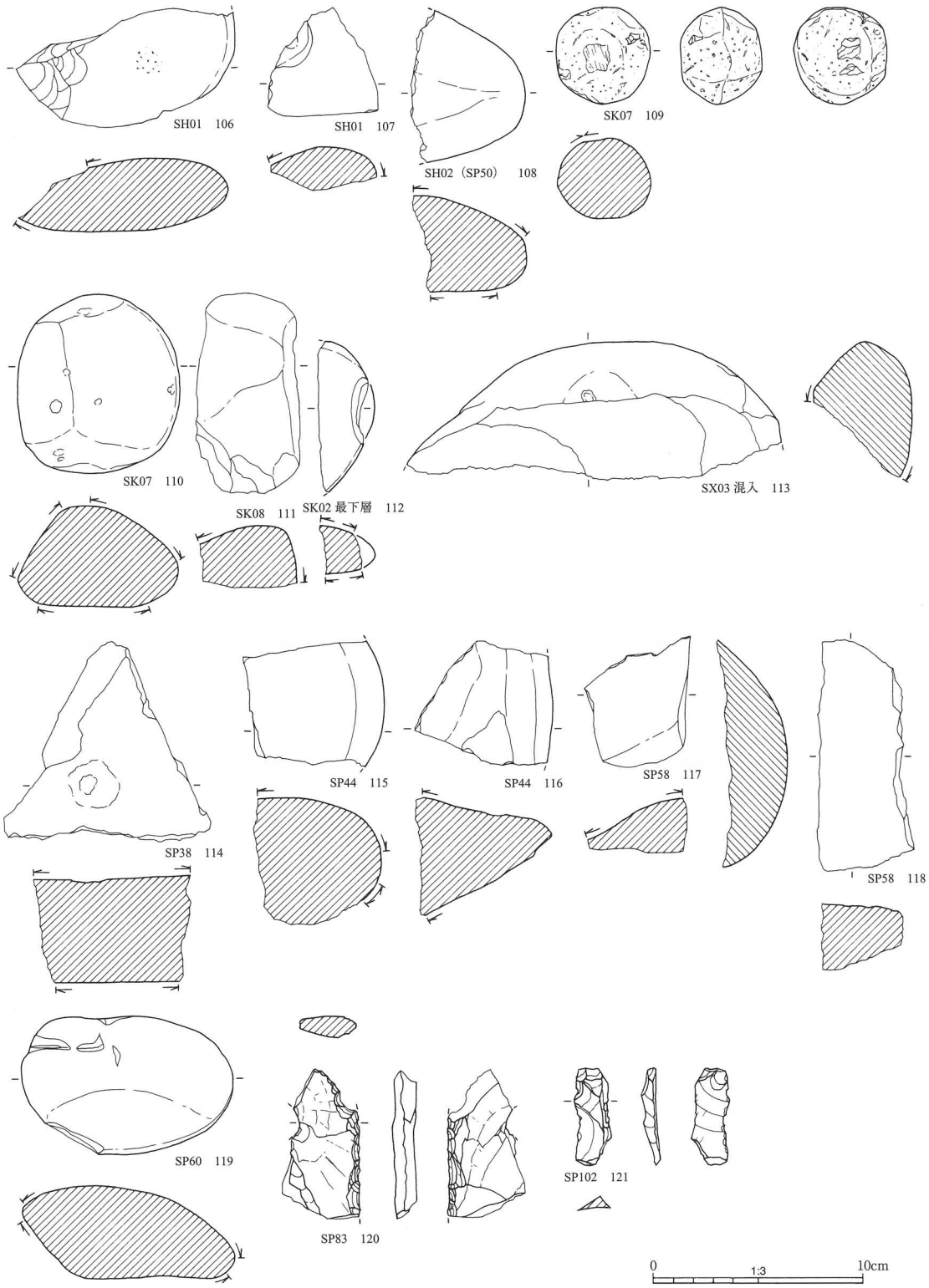

SH01 106
SH01 107
SH02（SP50） 108
SK07 109
SK07 110
SK08 111
SK02 最下層 112
SX03 混入 113
SP38 114
SP44 115
SP44 116
SP58 117
SP58 118
SP60 119
SP83 120
SP102 121
0
1:3
10cm

図29　遺構出土石器

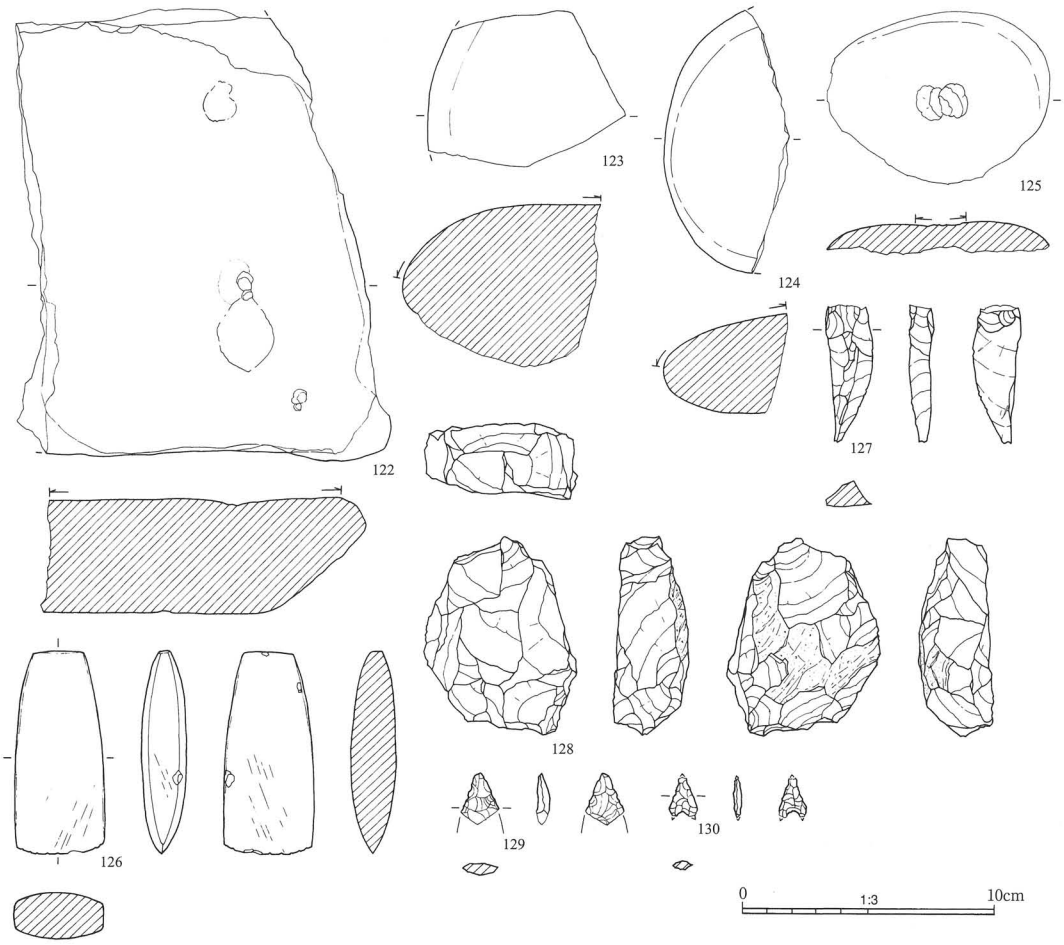


図30　包含層出土石器

明である。127は、チャートの縦長剥片である。128は、チャートの石核で、原礫面をとどめる。ハードハンマーの直接打撃で剥離されている。129と130は、打製石鏃である。両方とも凹基式である。

また、南東部の4層からは、図示していないが、角柱状を呈するチャートの原石1点とチャートの剥片1点が出土した。

その他に、103はSX08に混入して出土した。底面から強くくびれて立ち上がる底部である。底径7.8cmを測る。

（6）小　結

丁田遺跡の集落は、竪穴建物とその他の遺構で構成される基本的な居住単位の集合であるとみられる。SH01にはSK07、SK08、SP01が、SH02にはSX02がそれぞれ伴い、竪穴建物に土坑あるいは埋設土器が伴う居住の単位があり、それぞれ一定の空間を有している。南東部には、相当数の縄文土器を含む包含層が形成されている。

検出された竪穴建物は2軒で、調査区周辺の状況は不明であるが、建物構造や空間領域に

は顕著な差を見出せず、小規模な等質的集落であるとみられる。ただし、縄文社会においてきわめて特殊な装身具である翡翠大珠を納めた埋設土器１基が、調査区西端部に設定されている。埋設土器の周辺には同時代の遺構が見当たらず、竪穴建物との間には一定の空間があり、隔絶した感が強い。集落内の限られた重要な目的によって、埋設されたものと考えられる。

縄文時代後期初頭の土器がわずかに出土しているが、遺構と包含層の時期は、縄文時代中期末（北白川Ｃ式期）にほぼ限定される。福井県から石川県西部を中心とした北陸地方西部の大杉谷式や岐阜県、愛知県を中心とした東海地方西部の神明式に比定できる可能性のある土器も散見される。

石器の組成としては、出土総数は少ないものの、磨石・敲石、石皿が主体で、石鏃や磨製石斧が少ない。磨石・敲石、石皿が主体であることは、堅果類の加工が行われていたことを示しているのであろう。また、石核、原石、剥片が出土し、石器製作を行っていた可能性が高い。

以上の諸点をふまえると、丁田遺跡における縄文集落には、ある程度の定住性を認めることができよう。縄文時代中期末は、中期後葉から後期前葉に至る変革期にあたる。丁田遺跡の縄文集落は、時代の変革期において犬上川流域の氾濫平野に営まれた集落であると考えられる。

参考文献

泉　拓良　1985「中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ―北白川追分町縄文遺跡の調査―』 京都大学埋蔵文化財研究センター

泉　拓良　1988「咲畑・醍醐式土器様式」『縄文土器大観　中期Ⅱ』 講談社

泉　拓良　1988「船元・里木式土器様式」『縄文土器大観　中期Ⅱ』 講談社

狩野　睦　2008「串田新式・大杉谷式」『総覧　縄文土器』 アム・プロモーション

纐纈　茂・高橋健太郎　2008「中富式・神明式」『総覧　縄文土器』 アム・プロモーション

小島孝修　2006「総括」『竜ヶ崎Ａ遺跡』 滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会

白川　綾　1997「常安王神の森遺跡出土縄文時代中期後葉～後期初頭土器群の検討」『常安王神の森遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第35集

3 奈良時代～平安時代初頭

（1）概　要

奈良時代～平安時代初頭の集落は、調査区のほぼ東半分に広がっている。検出した主な遺構には、竪穴建物10軒、掘立柱建物６棟、柵列５条、土坑３基がある。

竪穴建物は、平面方形あるいは長方形をなし、柱穴は、４箇所を基本とする。隣接する掘立柱建物と柵列には、規模や建物方向に共通性がみられ、何らかの規格に基づいて築造・配置されたものと考えられる。一部の竪穴建物は、掘立柱建物に切られており、竪穴建物どうしの切り合いもみられることから、これらの遺構には時期差があると考えられる。ただし、掘立柱建物には顕著な建て替えや建物の重複がみられず、奈良時代～平安時代初頭の集落の存続した期間は短いものと考えられる。

（2）竪穴建物

SX03　（図32）　SX04に切られている。SX03は、平面形が不整方形で、東側の辺が西側より長い。東西3.0m、南北3.8m である。柱穴は不揃いであるが、４箇所以上であろう。西端中央において焼土の集中部が検出され、炉跡であると考えられる。

埋土からは、131～136が出土した。131は須恵器坏蓋、132は須恵器坏身、133は須恵器長頸壺、134は須恵器坏身、135は土師器皿、136は長胴甕の胴部片である。136の外面には、焼成剥離痕がみられる。これらは、７世紀後半～８世紀前半に比定できる。

SX04　（図32）　SX03の上から掘り込まれている。隅丸方形で、東西1.8m、南北1.7m と小

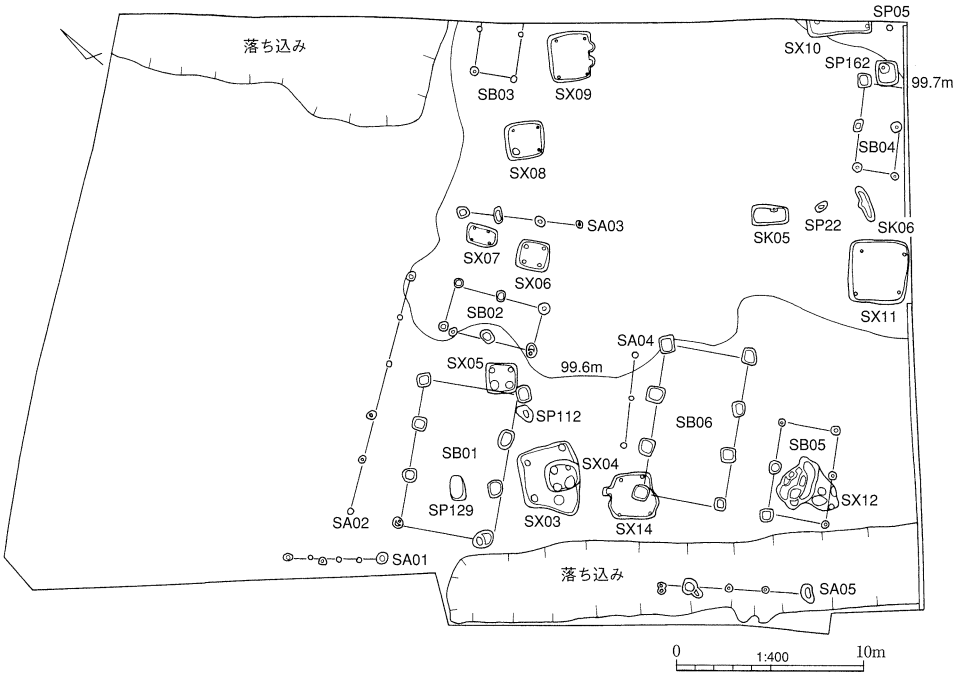


図31　奈良時代～平安時代初頭の主な遺構

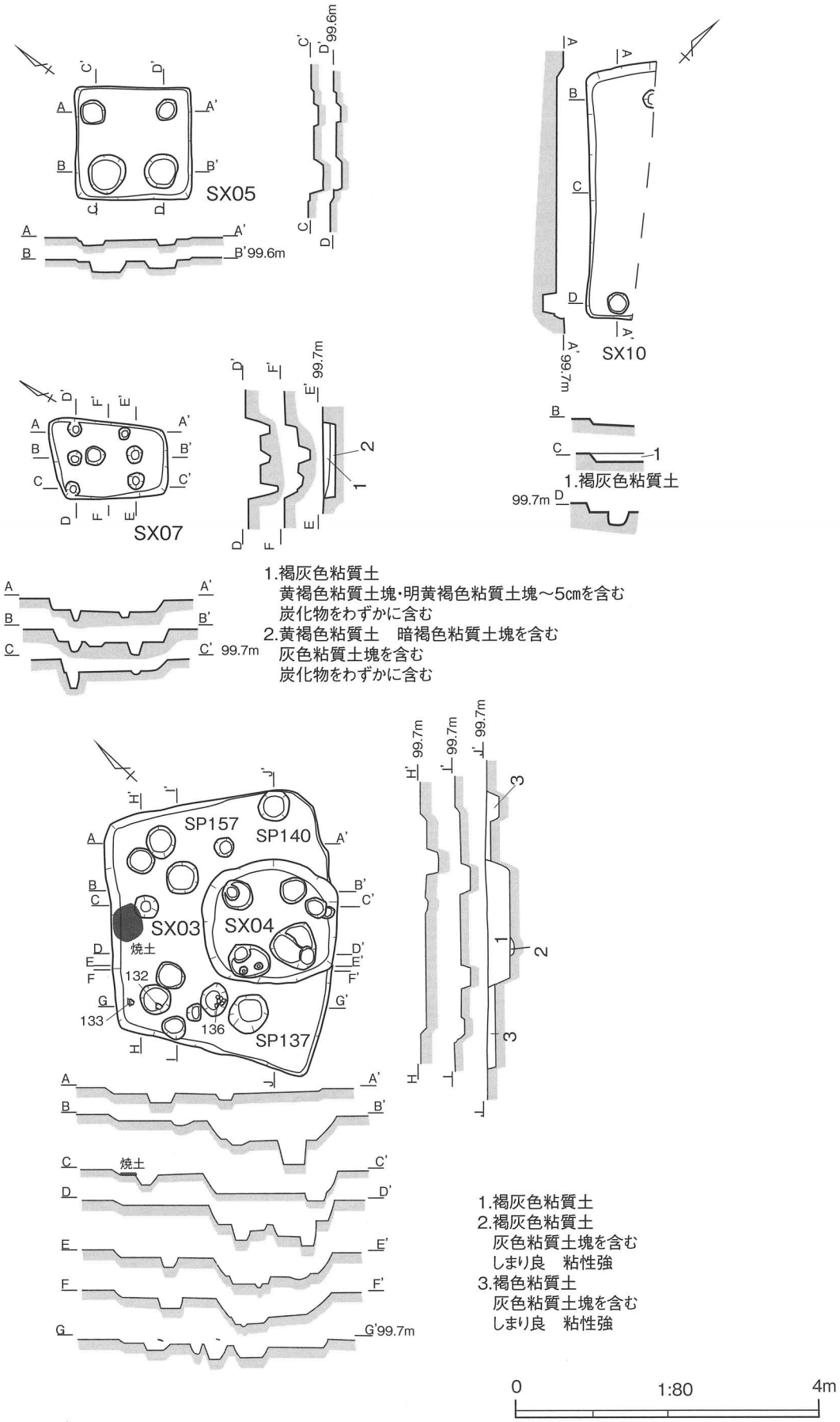

SX05
SX07
SX10
SX03
SX04
SP157
SP140
SP137
焼土
132
133
136
99.6m
99.7m
1.褐灰色粘質土
1.褐灰色粘質土
黄褐色粘質土塊・明黄褐色粘質土塊～5cmを含む
炭化物をわずかに含む
2.黄褐色粘質土　暗褐色粘質土塊を含む
灰色粘質土塊を含む
炭化物をわずかに含む
1.褐灰色粘質土
2.褐灰色粘質土
灰色粘質土塊を含む
しまり良　粘性強
3.褐色粘質土
灰色粘質土塊を含む
しまり良　粘性強
0
1:80
4m

図32　竪穴建物（1）

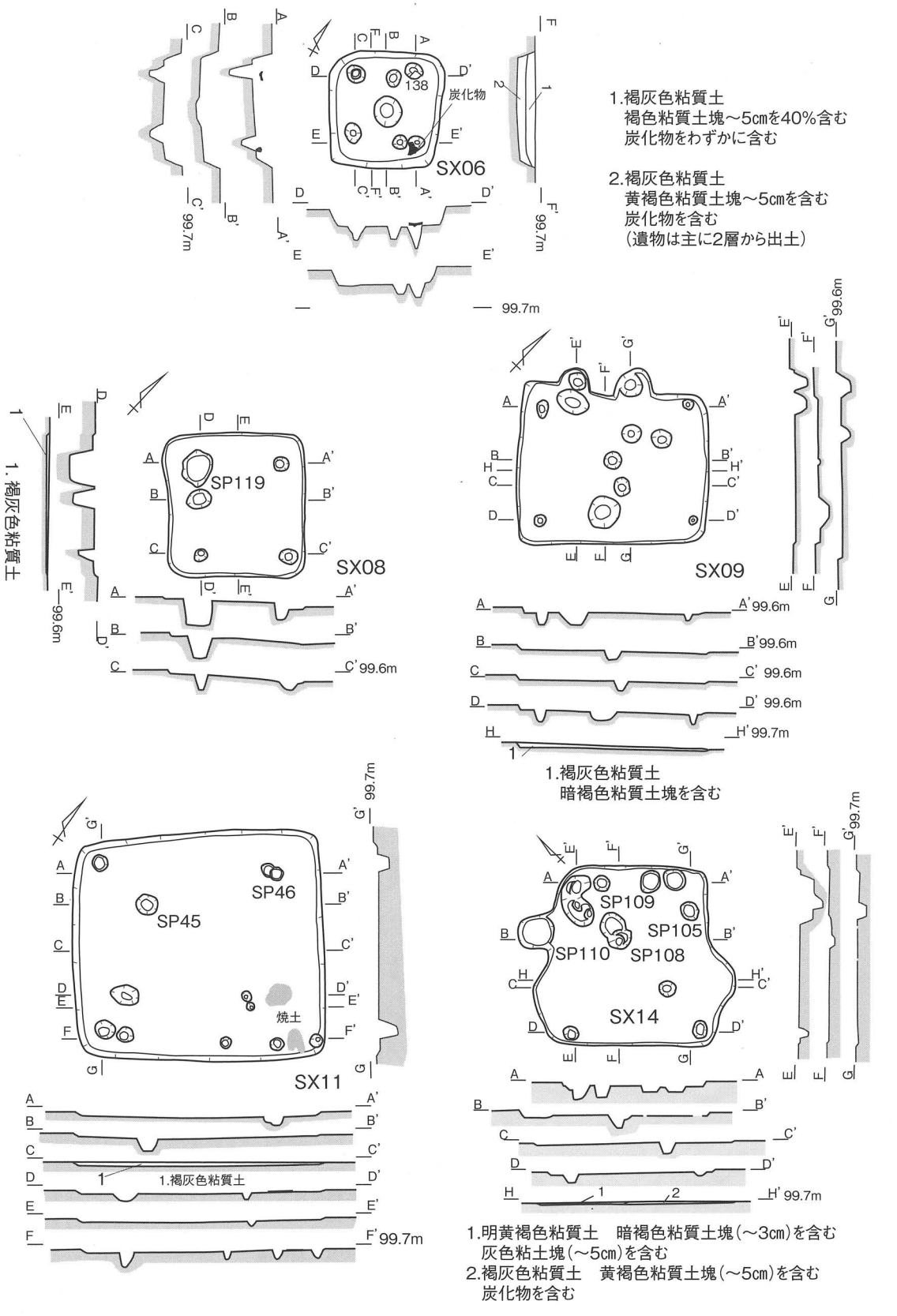

SX06
138
炭化物
1.褐灰色粘質土
褐色粘質土塊～5cmを40%含む
炭化物をわずかに含む
2.褐灰色粘質土
黄褐色粘質土塊～5cmを含む
炭化物を含む
(遺物は主に2層から出土)
99.7m
SX08
SP119
1.褐灰色粘質土
99.6m
SX09
99.6m
1.褐灰色粘質土
暗褐色粘質土塊を含む
SX11
SP45
SP46
焼土
1.褐灰色粘質土
99.7m
SX14
SP109
SP105
SP110
SP108
1.明黄褐色粘質土　暗褐色粘質土塊(～3cm)を含む
灰色粘土塊(～5cm)を含む
2.褐灰色粘質土　黄褐色粘質土塊(～5cm)を含む
炭化物を含む
0
1:80
4m

図33　竪穴建物（2）

規模である。柱穴を4箇所確認できる。7世紀後半～8世紀前半に位置する長胴甕口縁部片（137）が出土した。

SX05（図32） SB01とSB02の間に挟まれた位置にある。方形で、東西1.5m、南北1.5mと小規模である。削平を受けており、詳細な点は不明である。図示していないが、奈良～平安時代の土師器小片が出土した。

SX06（図33） SX07に隣接する。方形で、東西1.6m、南北1.6mと小規模である。柱穴は4箇所であるとみられる。埋土には炭化物が少し含まれ、大きいもので厚さ7cmほどの塊も検出された。遺物は主に埋土の下層から出土し、138～143を図示した。138は、7世紀後半～8世紀前半の須恵器坏蓋である。139は、土師器坏身、140～142は、土師器皿である。139、140、141、142は、8世紀後半～9世紀初頭のものである。143は、9世紀の灰釉陶器碗の底部片である。

表2　竪穴建物

遺構番号	規模（m）		面積（㎡）
	東西	南北	
SX03	3	3.8	11.4
SX04	1.8	1.7	3.1
SX05	1.5	1.5	2.3
SX06	1.6	1.6	2.6
SX07	1.1	1.6	1.8
SX08	1.9	1.9	3.6
SX09	2.6	2.2	5.7
SX10	3.4	—	—
SX11	3.4	3.1	10.5
SX14	2.7	2.4	6.5

SX07（図32） 長方形で、東西1.1m、南北1.6mと小規模である。柱穴は4箇所以上である。埋土には、炭化物が少し含まれていた。図示していないが、奈良～平安時代の土師器小片が出土した。

SX08（図33） 方形で、東西1.9m、南北1.9mである。柱穴は4箇所確認できる。著しく

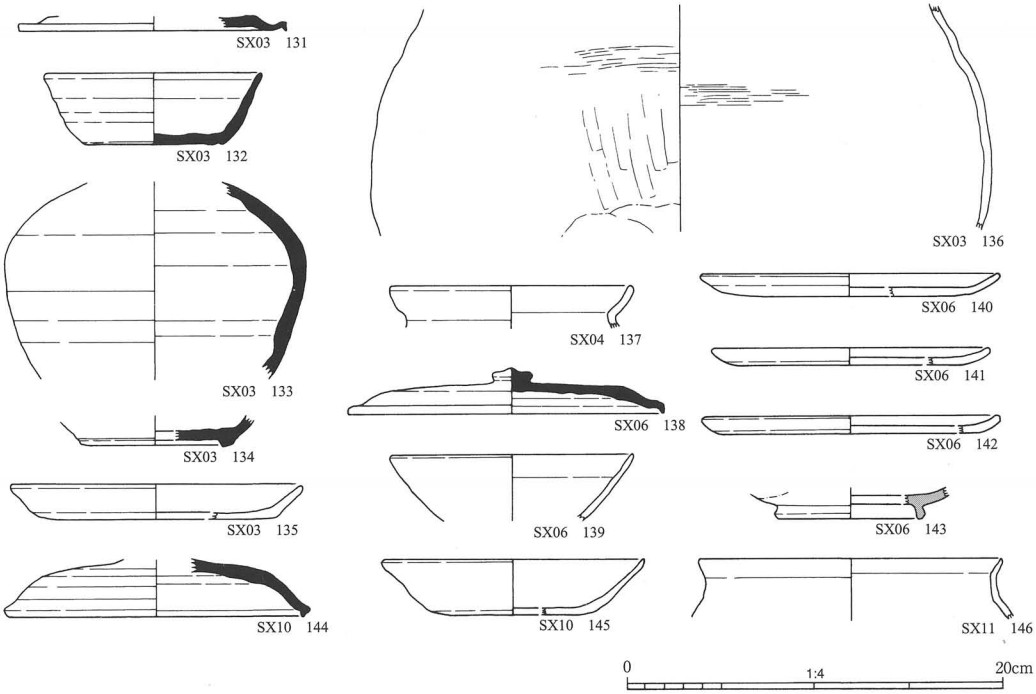


図34　竪穴建物出土遺物

削平され、詳細は不明である。奈良～平安時代の遺物は出土しなかったが、埋土と平面形から、当該期の遺構であると判断した。

SX09（図33） 方形で、北側に2箇所の張り出し部分をもち、東西2.6m、南北2.2mである。柱穴は各隅の4箇所であるとみられる。張り出し部や中央部には、カマドや炉跡があった可能性があるものの、焼土は検出されず、判然としない。図示していないが、奈良～平安時代の土師器小片が出土した。

SX10（図32） 大半の部分が調査区外へわたっており、南端部のみ検出した。東西3.4mで、ほぼ方形であると推定される。柱穴は南端の隅2箇所で確認されており、4箇所である可能性がある。7世紀後半～8世紀前半に位置する土師器坏（145）が出土した。

SX11（図33） 方形で、東西3.4m、南北3.1mである。柱穴は不揃いであるが、4箇所である可能性が高い。南東部の隅において、焼土の集中する範囲が2箇所検出され、炉跡の位置をほぼ示しているとみられる。7世紀後半～8世紀前半に位置する長胴甕口縁部片（146）が出土した。

SX14（図33） 不整方形で、東西2.7m、南北2.4mである。柱穴は不揃いであるが、4箇所である可能性が高い。西側の辺に張り出し部分が1箇所あり、カマドが存在したかもしれないが、削平を受けており、不明である。図示していないが、奈良～平安時代の土師器小片が出土した。

（3）掘立柱建物

SB01（図35） 最も西側に位置する掘立柱建物で、最大規模である。3×1間の構造で、規模は東西4.7m、南北7.6m、平面積35.7㎡を測り、柱穴間隔は桁行1.45～2.7m、梁行4.32～5.0mである。柱穴の直径は、最大で1.08mと大きなものである。掘り方は方形を基本とする。北側に隣接するSB02、西側と南側に隣接するSA01、SA02の柵列とは規模、構造、建物方向に密接な関係性が想定され、同時に存在していた可能性が高い。柱穴SP114からは、須恵器坏身（147）、土師器坏（148）、土師器皿（149）が出土した。いずれも8世紀後半～9世紀初頭に比定できると考えられる。

SB02（図35） 南側にはSB01が隣接する。北側と西側には、SA02、SA03の柵列が隣接する。3×1間の構造で、規模は東西2.4m、南北4.7m、平面積11.3㎡を測り、柱穴間隔は桁行2.26～2.46m、梁行2.4mである。柱穴の直径は、最大で80cmである。南側に隣接するSB01とは密接な関係性が想定され、SA01、SA02、SA03とともに同時に存在していた可能性が高い。柱穴SP118、SP120、SP136、SP146からは、図示していないが、奈良～平安時代の土師器と須恵器の小片が出土した。

SB03（図35） 2×1間の構造と推定されるが、南半部のみ検出し、北半部は未確認である。規模は東西2.1m、南北推定4.8m、平面積推定10.1㎡を測り、柱穴間隔は桁行2.16～2.4m、梁行2.1mである。柱穴の直径は、最大で48cmである。柱穴SP149からは、7世紀後半～8世紀前半に位置する須恵器坏身底部片（150）が出土した。

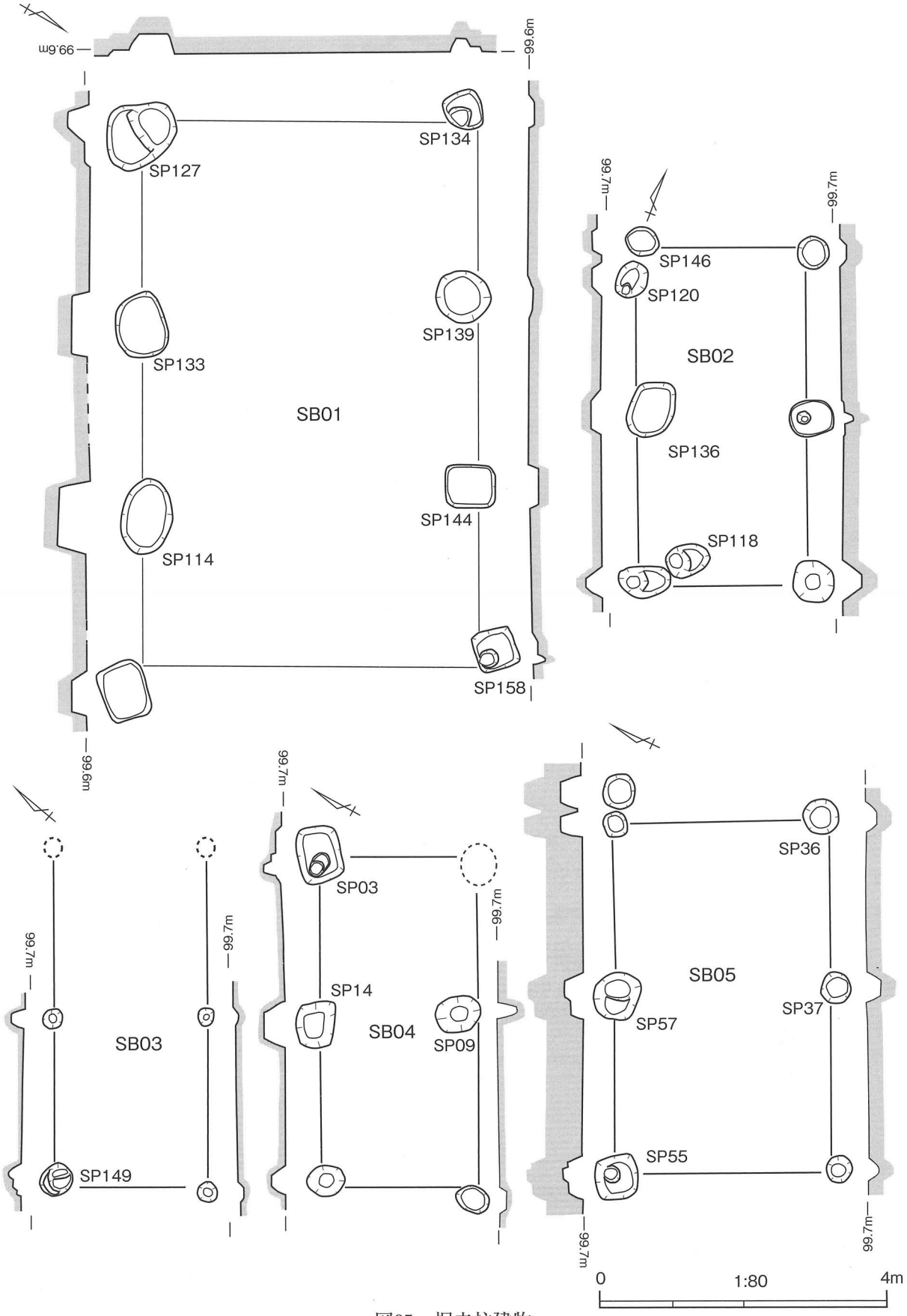

99.6m
99.6m
SP127
SP134
SP133
SP139
SB01
SP144
SP114
SP158
99.7m
99.7m
SP146
SP120
SB02
SP136
SP118
99.6m
99.7m
99.7m
SP03
SP14
SB03
SB04
SP09
SP149
SP36
SB05
SP57
SP37
SP55
99.7m
99.7m
0
1:80
4m

図35　掘立柱建物

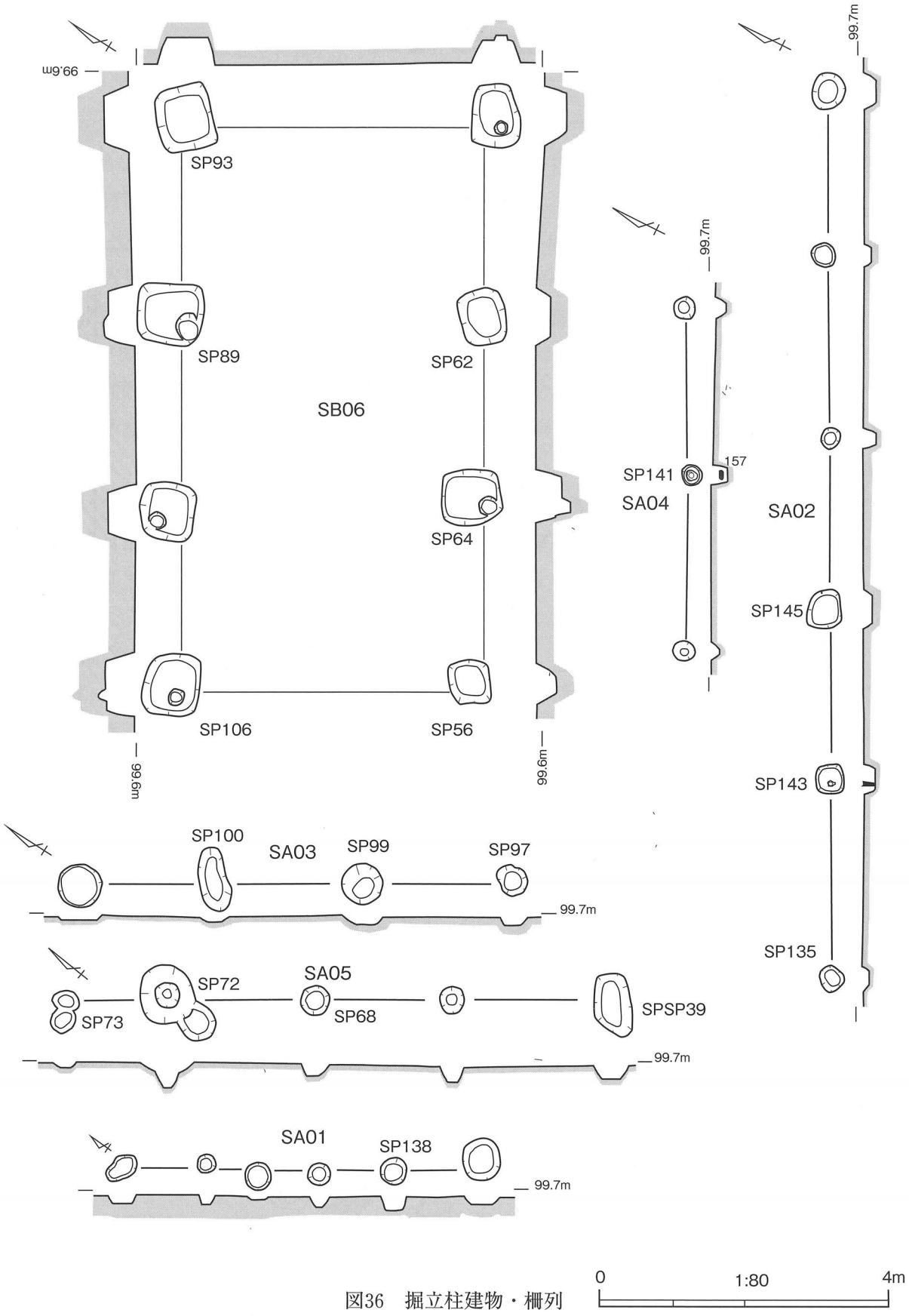

SP93
SP89
SP62
SB06
SP64
SP106
SP56
99.6m
99.6m
99.7m
SP141
157
SA04
SA02
SP145
SP143
SP135
SP100
SA03
SP99
SP97
99.7m
SP72
SA05
SP73
SP68
SPSP39
99.7m
SA01
SP138
99.7m
0
1:80
4m

図36　掘立柱建物・柵列

SB04（図35） 調査区北東部に位置する。2×1間の構造であろう。北東部の柱穴は、調査区外に位置しているものと想定される。規模は東西2.2m、南北4.6m、平面積10.1㎡を測り、柱穴間隔は桁行2.2～2.6m、梁行2.2mである。柱穴の直径は、最大で80cmである。掘り方は方形を基本とする。SB04と建物の向きがほぼ平行し、規模も同様である。柱穴SP09からは、9世紀前半の灰釉陶器碗（151）が出土した。SP14からは、土錘（152）が出土した。

表3　掘立柱建物

遺構番号	桁間×梁間	規模（m）	面積（㎡）
SB01	3×1	7.6×4.7	35.7
SB02	3×1	4.7×2.4	11.3
SB03	2×1	4.8×2.1	10.1
SB04	2×1	4.6×2.2	10.1
SB05	2×1	5.0×3.0	15
SB06	3×1	7.9×4.2	33.2

SB05（図35） SX12と重複する。2×1間の構造で、規模は東西3.0m、南北5.0m、平面積15㎡を測る。柱穴間隔は桁行3.1m、梁行2.34～2.6mである。柱穴の直径は、最大で66cmで、掘り方には方形のものがある。SP36、SP37、SP55、SP57からは、図示していないが、奈良～平安時代の土師器と須恵器の小片が出土した。

SB06（図36） SX14を切って建てられている。SB01に次いで大きい規模である。3×1間の構造で、規模は東西4.2m、南北7.9m、平面積33.2㎡を測る。柱穴間隔は桁行2.44～2.84m、梁行4.2～4.26mである。柱穴の直径は、最大で94cmと大きいものである。掘り方は方形を基本とする。東側に隣接するSB05と建物方向が共通する。西側に隣接するSA04、南側に隣接するSA05も含め、関係性が想定される。柱穴SP56からは、7世紀後半～8世紀前半の土師器坏（153）が出土した。

（4）柵　列

SA01（図36） 調査区南端で検出された柵列で、SB01の南側に位置する。長さ5.5mである。柱穴は直径26～60cmで、柱穴間隔は不揃いである。柱穴から遺物は出土していないが、埋土の特徴から奈良～平安時代の遺構であると判断した。

SA02（図36） SB01、SB02の西側に位置する。長さ12.8mである。SP143には直径6 cm程度の柱根が残存していた。柱穴間隔は、ほぼ均一である。柱穴SP135、SP143、SP145からは、図示していないが、奈良～平安時代の土師器と須恵器の小片が出土した。

SA03（図36） 南側にSX06、SX07が隣接する。長さ6.56mである。柱穴間隔は、ほぼ均一である。柱穴SP97からは、須恵器坏身（154）が出土した。8世紀後半～9世紀前半のものである。

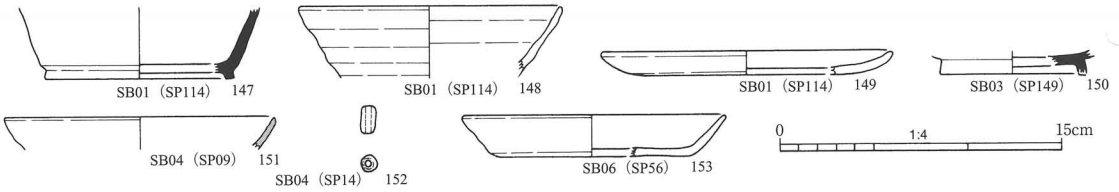


図37　掘立柱建物出土遺物

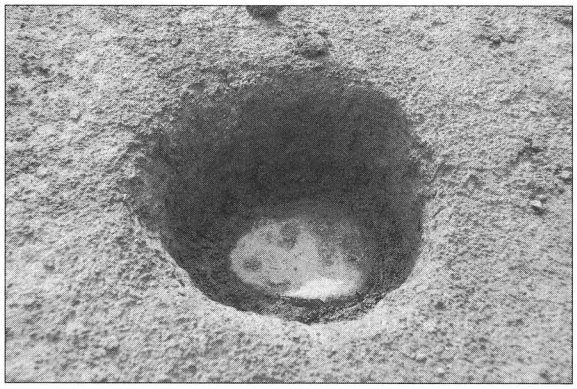


図38　SA04（SP141）礎板石

SA04　（図36）　SB06の西側にあり、長さ5.1mである。柱穴間隔は、ほぼ均一である。柱穴SP141の底面から約5 cm上の位置には、礎板石（157）が据えられていた。被熱し、全体的に黒く変色している。上面には直径8 cm程度の範囲で柱の痕跡をとどめる。また、図示していないが、奈良～平安時代の須恵器小片が出土した。

SA05　（図36）　SB05、SB06の南側に隣接する。長さは8.1mである。柱穴SP68からは、緑釉陶器碗（155）が出土した。釉は剥落が著しく、わずかに残る程度である。SP72からは、9世紀前半の灰釉陶器碗（156）が出土した。

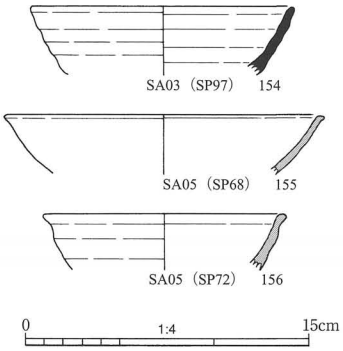


図39　柵列出土遺物

（5）土　坑

SK05　（図41）　長方形で、東西1.0m、南北1.9mを測る。図示していないが、奈良～平安時代の土師器小片が出土した。性格は不明である。

SK06　（図41）　長楕円形で、東西0.54m、南北2.0mを測る。深さ0.3mである。7世紀前半の須恵器坏身（158）が出土した。性格は不明である。

SX12　（図41）　不定形土坑である。東西2.3m、南北3.2mを測る。南側はテラス状を呈し、北側がより深い。最深部で深さ0.56mを測る。埋土には炭が少し含まれ、上層では、少数の礫が検出された。164～178の土師器と須恵器が出土した。167、168、170は上層から、166と175は床面で出土した。廃棄土坑の可能性がある。164と165は、7世紀後半～8世紀前半の須恵器坏蓋である。166、167、168、169は、須恵器坏身である。器高の高い166と167は7世紀後半～8世紀前半、一方、器高の低い168と169は、8世紀後半～9世紀初頭のものであろう。170、171、172は、土師器坏で、8世紀後半～9世紀初頭に比定できよう。173は、8世紀後半～9世紀初頭の土師器皿である。174と175は、須恵器長頸壺の底部である。7世紀後半～8世紀前半のものであろう。176、177は、長胴甕である。176は小型で口縁部が内湾するもので、7世紀後半～8世紀前半に位置する。177は、頸部の屈曲が弱く、8世紀後半～9世紀初頭のものである。178は

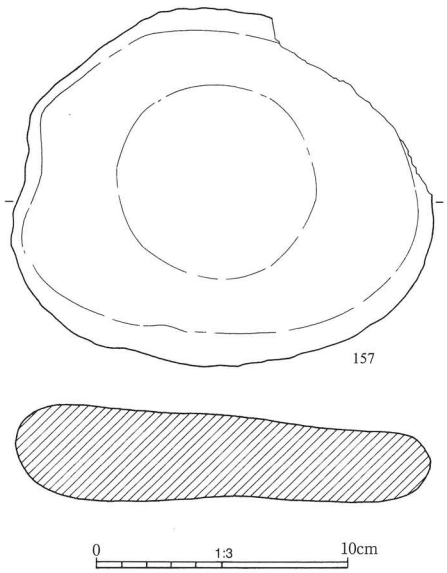


図40　SA04（SP141）礎板石

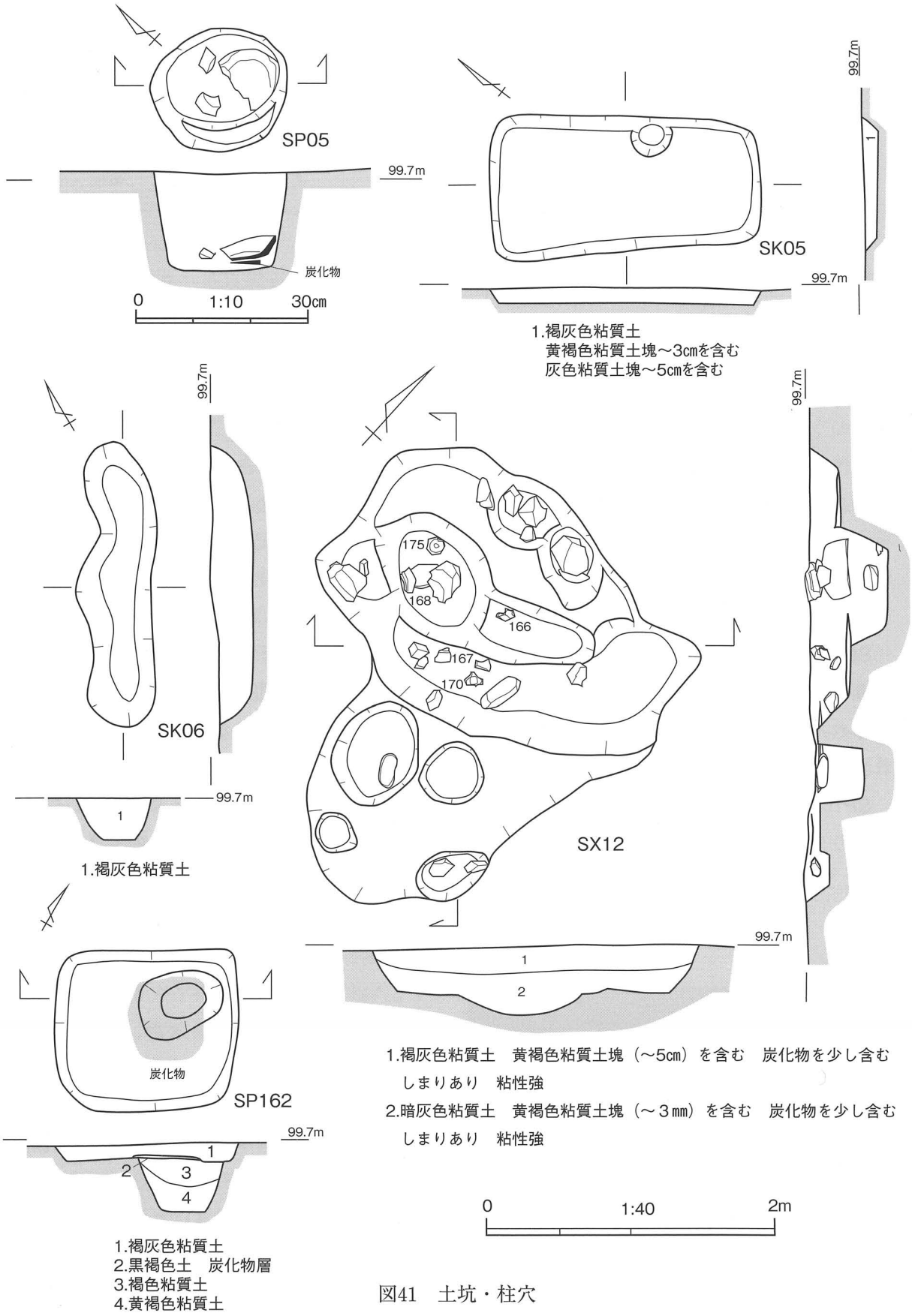

SP05
99.7m
炭化物
0
1:10
30cm
SK05
99.7m
1
1.褐灰色粘質土
黄褐色粘質土塊～3cmを含む
灰色粘質土塊～5cmを含む
SK06
99.7m
1
1.褐灰色粘質土
SX12
175
168
166
167
170
99.7m
1
2
1.褐灰色粘質土　黄褐色粘質土塊（～5cm）を含む　炭化物を少し含む
しまりあり　粘性強
2.暗灰色粘質土　黄褐色粘質土塊（～3mm）を含む　炭化物を少し含む
しまりあり　粘性強
SP162
炭化物
99.7m
1
2
3
4
1.褐灰色粘質土
2.黒褐色土　炭化物層
3.褐色粘質土
4.黄褐色粘質土
0
1:40
2m

図41　土坑・柱穴

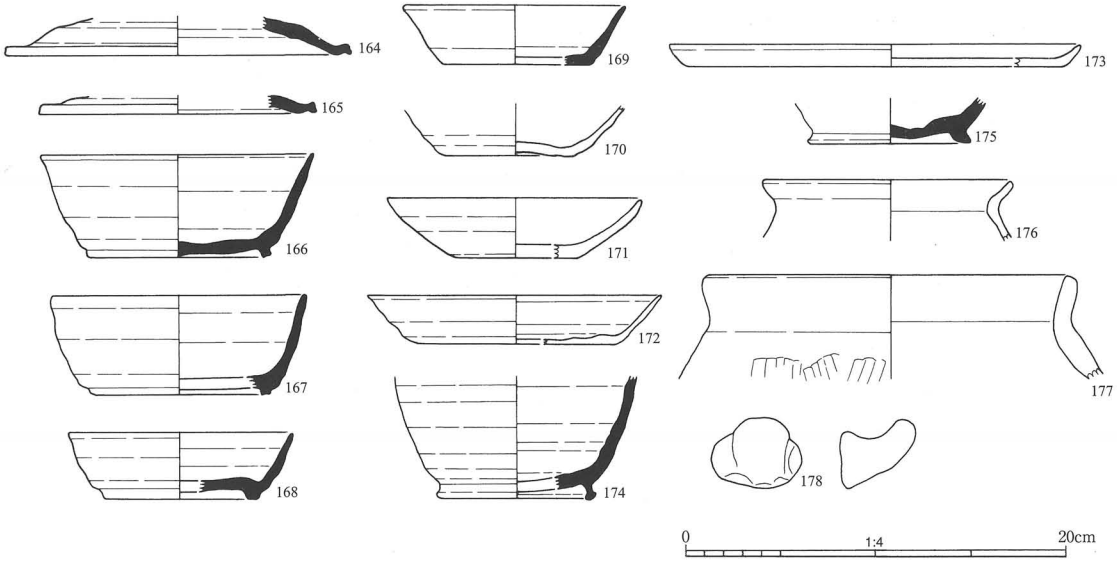


図42　SX12出土遺物

甑の把手である。床面から7世紀後半～8世紀前半の遺物が出土し、上層からは8世紀後半～9世紀初頭の遺物も出土していることから、7世紀後半～9世紀初頭にわたって存続していたと推定される。

（6）小　穴

SP05　（図41）　調査区北東部において検出された。直径0.48m、深さ0.34m程度の小穴で、底面からは完形の8世紀代に位置する土師器坏（161）が正位の状態で出土した。人為的に埋納された可能性が高く、土器の下には微量の炭化物があった。地鎮にかかわる祭祀に用いられた可能性がある。

SP162　（図41）　SB04の北側で検出され、掘立柱建物の柱穴であると考えられる。

掘り方は方形で、直径東西1.28m、南北1.14m、深さ0.48mと規模の大きなものである。ただし、SP162と組み合わさる柱穴は付近に見当たらず、調査区外へ展開している可能性が考えられる。遺物は出土していない。その他、SP06からは土師器鉢（160）が、SP112からは、8世紀後半～9世紀初頭の土師器皿（162･163）が、SP129からは7世紀後半～8世紀前半の長胴甕（159）が出土した。また、遺構検出面において、181、182、183が出土した。181は須恵器坏蓋、182は須恵器坏身で、いずれも7世紀後半～8世紀前半に比定できる。183は、9世紀後半の灰釉陶器碗である。SP22から出土した円盤状の鉄製品（179）は、鉄製紡錘車の紡輪部の可能性がある。SP22からは、図示していないが、土師器と須恵器の小片が出

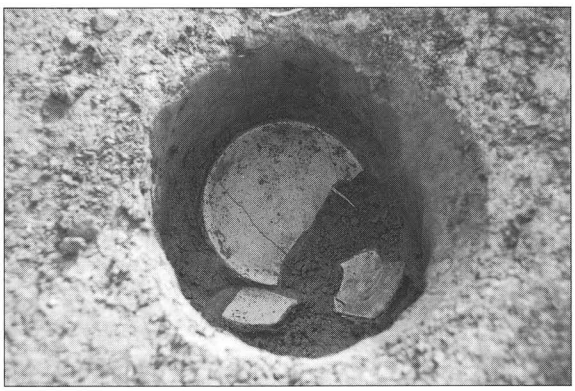


図43　SP05　土師器坏出土状態　（南から）

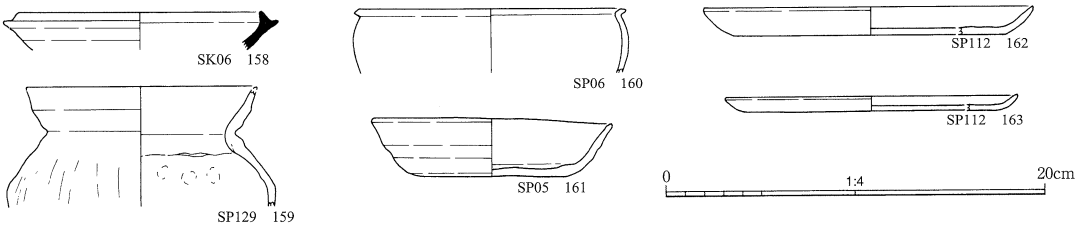


図44　土坑・小穴出土遺物

土し、7世紀後半～8世紀頃のものと考えられる。なお、遺構検出面において釘状鉄製品(180)が出土した。

（7）小　結

10軒の竪穴建物には、一辺2ｍ以下の小型のものと、一辺2ｍ以上の大型のものがある。建物の重複は少なく、その存続期間は短かったものと推定され、出土遺物から、多くは7世紀後半～8世紀前半のものであると考えられる。ただし、小型建物SX06からは、9世紀初頭に下る遺物が出土し、小型建物SX04が大型建物SX03を切っているため、小型建物は大型建物より新しく建てられている可能性がある。

掘立柱建物は、6棟検出され、2×1間もしくは3×1間に限られる。平面積30㎡以上のSB01、SB06と10～15㎡のSB02、SB03、SB04、SB05があり、平面形と規模の類似する建物がまとまっている。出土遺物には、8世紀後半～9世紀前半の時期幅がある。柵列は、SB01、SB02、SB05、SB06に隣接し、柵列からは、掘立柱建物と同じ時期の遺物が出土していることから、掘立柱建物と柵列は、同時に存在していたものと考えられる。土坑SX12からは、7世紀後半～9世紀初頭までの遺物が出土し、SB05に切られていることから、掘立柱建物と柵列は、9世紀前半に機能していたことが推定できる。

出土遺物については、墨書土器などの特殊な遺物はなく、須恵器と土師器を中心とする食膳具が主体である。

調査区東半部に広がる竪穴建物は、年代がほぼ7世紀後半～8世紀前半に位置づけられ、これらは集落に関係する遺構と考えられる。一方、掘立柱建物と柵列は、8世紀後半～9世紀前半に位置し、竪穴建物や土坑を切って建てられているものもある。当初営まれていた一般集落の後に、規格性をもった掘立柱建物群が建てられたものとみられる。掘立柱建物には柵列が伴い、一般集落というよりも、むしろ官衙に関わる建物群であると推定できる。また、掘立柱建物に隣接する小型建物には、9世紀初頭まで下る遺物が出土したものもあり、これらの小型建物では、生活の痕跡が乏しく、炉も検出されず、規模が小さく、居住には適さないものと考えられる。これらの小型建物は、掘

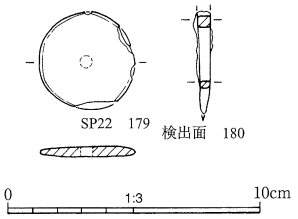


図45　出土鉄製品

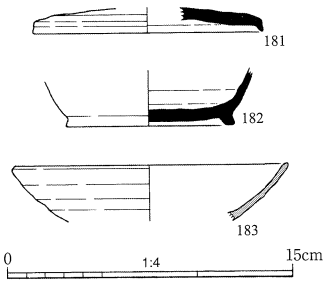


図46　検出面出土遺物

立柱建物と同時に存在していた可能性が考えられ、居住用ではなく、主に倉庫などの貯蔵機能をもっていたと推定できる。

一般集落が短期間で廃絶し、掘立柱建物群が出現した要因については、周辺遺跡の様相も含めて検討する必要がある。

参考文献

葛野泰樹・吉田秀則　1993「松原内湖遺跡出土の古墳時代後期以降の須恵器と土師器」『松原内湖遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会

田辺昭三　1981『須恵器大成』 角川書店

4 平安時代以降

(1) 概　要

平安時代以降の遺構として、畦畔とこれに伴うと考えられる畝状遺構を検出した。畦畔は、調査区中央部と東側に位置し、畝状遺構は、調査区西半部に集中している。なお、これらの遺構からは、混入したものと考えられる縄文土器片がわずかに出土したのみで、遺構の時期

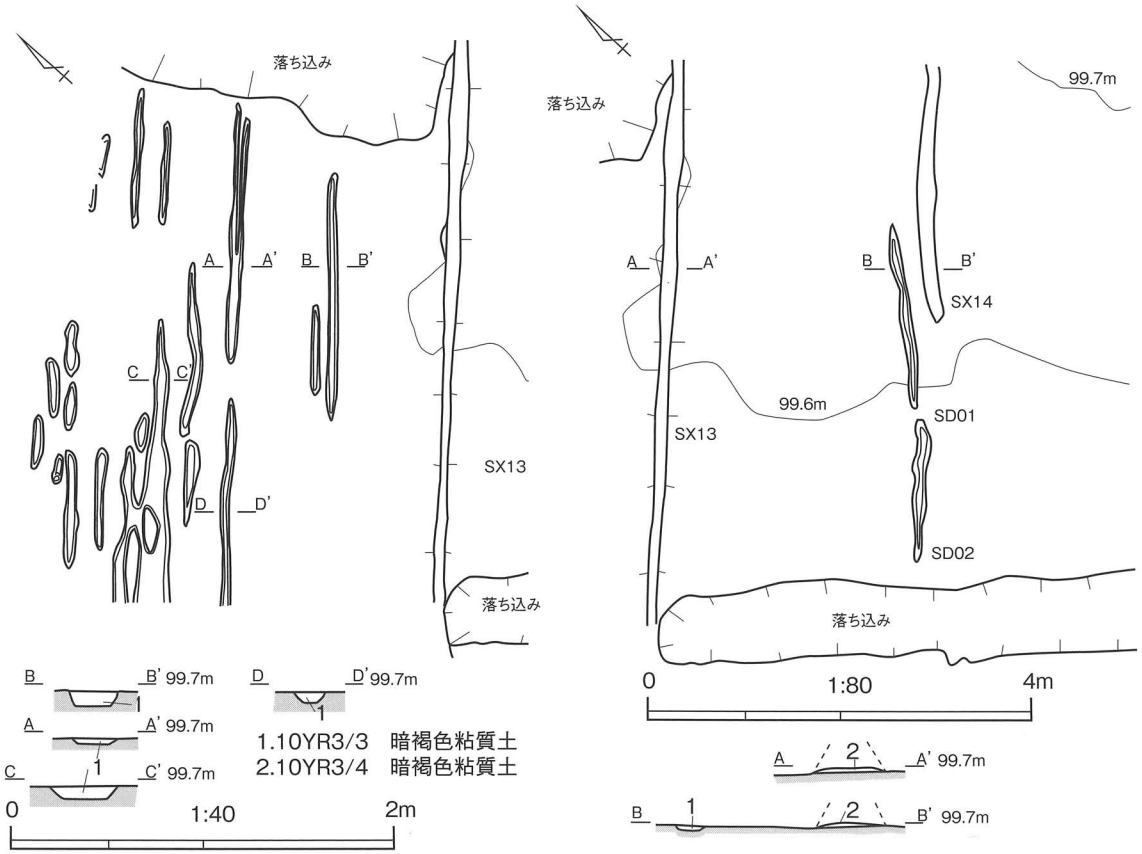


図47　畦畔・畝状遺構

を明確に示す遺物はない。

（2）畦畔・畝状遺構

SX13　（図47）　調査区中央部を南北に貫く畦畔である。幅0.4～1.0m で、盛土によって造成されている。西側には並走し、密集する多数の畝状遺構があり、SX13に伴うものと考えられる。

SX14　（図47）　SX13から東側へ約12m 離れた位置にある。幅0.6～0.96m、盛土によって造成されている。

SD01・SD02　（図47）　SX14に隣接して南北に伸び、溝状に掘りこまれている。SD01、SD02、SX14は、一連の遺構である可能性が高い。

（3）小　結

丁田遺跡で検出された平安時代以降の遺構は、畦畔とこれに伴う畝状遺構である。これらの遺構は、方向が一致するなど、一連の遺構と考えられ、耕作地が展開していたと考えられる。調査では 9 世紀後半までの遺物が出土していることから、遺構群の形成は、平安時代以降であると推定できる。実年代では、 9 世紀後半～10世紀頃であろう。

このように、平安時代以降の丁田遺跡は、主に畑地として利用され、調査区の周辺には中世集落の存在が示唆される。畦畔の方向は、明治期の地籍図に描かれた区画とほぼ一致し（彦根市史編集委員会2002）、畑地を分ける区画は、中世から踏襲されていると考えられる。

参考文献

彦根市史編集委員会　2002『彦根　明治の古地図 2 』 彦根市

Ⅲ　総　括

1 丁田遺跡における縄文時代の集落

（1）縄文土器の型式編年的位置

丁田遺跡における縄文時代の集落の存続時期について考えるために、まずは出土土器の編年的な位置づけについて検討しておく必要がある。近畿地方における型式編年（泉1985）に従い、出土土器に関する若干の検討を行いたい。

丁田遺跡においては、主に縄文時代中期末（北白川Ｃ式期）の土器が出土し、わずかに後期初頭（中津式期）の土器が出土した。当該期の土器の良好なものは、SX02から出土した完形に近い有文の深鉢（46）と無文の深鉢（47）である。その他では、口縁部片などの破片資料が多く、器形や文様の判明する資料は限られている。

まずは在地系の北白川Ｃ式土器について記述する。

深鉢Ａ類　Ａ１類としては、13、27、53、54、64、66、74、75、90が出土している。波状口縁で、沈線で渦巻文を描き、口縁外面上端には縄文が施される。Ａ３類としては、33、80、81、84が出土した。口縁部外面には指頭による刺突が施され、刺突部の内面が押し出されているものがある。Ａ４類には24、67が相当する可能性がある。Ａ５類には、沈線で横線と綾杉文を施す16、73がある。

深鉢Ｂ類　Ｂ１類としては、23、69が相当すると考えられる。隆帯と斜めの刺突が施されている。Ｂ２類としては、46、50、76がある。46には、楕円形区画と把手がそれぞれ８つ認められ、把手には空間がなく、中実である。把手の上下には指頭による刺突があり、その間の楕円形区画内には、綾杉状沈線文が充填される。57もＢ２類である可能性がある。

深鉢Ｃ類　Ｃ２類には38が、Ｃ３類には32がそれぞれ相当する可能性がある。79もＣ類に比定できよう。

深鉢Ｄ類　Ｄ類としては、SX01から出土した44が相当する。口縁部の形態は不明だが、外面には縦位の縄文が間隔を空けて施されている。

浅鉢　22がＣ３類に比定できる可能性がある。98、99は把手部である。49も浅鉢の可能性がある。

以上のように、深鉢Ａ類と深鉢Ｂ類が多く、深鉢Ｃ類はやや少なく、深鉢Ｄ類はわずかである。浅鉢も少し出土している。

外来系土器としては、北陸地方西部の大杉谷式や東海地方西部の神明式と推定される土器が出土している。

大杉谷式　28～31、37、51、52、63、65、68、70、87、94、96、97は大杉谷式に比定でき

る可能性のある土器である。28は朝顔形深鉢の口縁部、29、30、31は円筒形深鉢の口縁部であると推定される。37、87は区画のなかに刺突が施されている。51、52は胴部上端の隆帯部分である可能性がある。70は刻みを施す隆帯部である。96も断面三角形の隆帯である。朝顔形や円筒形の深鉢があり、区画の中に刺突を施すものがある。刺突や刻みを施す隆帯や断面三角形の隆帯の部分の破片がみられるなど、大杉谷式と関係すると考えられる要素（白川1997）がみられる。また、これらの土器の胎土には、浅黄橙色やにぶい黄褐色のものが含まれ、黄橙色や橙色の胎土を基本とする在地の土器とは異なる点も指摘できる。

神明式　神明式としては、12、58、85が比定される可能性がある。沈線で縦のＳ字文を描いた把手をもち、沈線の幅が広く、浅いなど、神明式に関わる土器と推定される。

このように、在地の土器である北白川Ｃ式土器が主体で、新段階まで認められ、縄文時代中期末に比定できるものと考えられる。また、大杉谷式と神明式に比定できる可能性のある土器が、各遺構において北白川Ｃ式土器と共伴しており、同様に中期末に位置する可能性が高いものと考えられる。

後期初頭　後期初頭（中津式期）としては、15、55、56が相当する。櫛歯状工具による条線で斜格子が描かれるものがある。

（２）各遺構の時期

上述の編年観をもとに、集落の存続時期を示しておく。竪穴建物SH01、SH02は、出土遺物から中期末に位置する。SK01、SK02、SK04、SK07、SK08も同様に出土遺物から中期末に比定できる。土器は出土していないが、SK03も同時期の可能性が高い。SX01、SX02もやはり中期末であると考えられる。その他の小穴もほぼ同時期であろう。中期末（北白川Ｃ式期）を中心とした時期に営まれ、後期初頭まで存続した集落であると考えられる。

（３）竪穴建物の構造

竪穴建物には、東西２ｍ、南北2.3m、平面積4.6㎡のSH01と東西２ｍ、南北1.7m、平面積3.4㎡のSH02の２軒がある。両者に規模の大きな違いはなく、ともに平面形が方形である。柱穴は４箇所が基本構造で、排水溝を有しない。こうした平面方形の竪穴建物は、旧山東町番の面遺跡（小江1956）、多賀町敏満寺遺跡（滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会2004）において中期後葉のものが検出されている。平面方形の竪穴建物は、中期後葉～末に存在しているとみてよいであろう（中村1998）。一方で、守山市下長遺跡では中期後半、旧五個荘町新堂遺跡（五個荘町教育委員会1993）では、中期後葉～後期前葉の円形の竪穴建物が検出され、方形と円形の竪穴建物が併行する時期がある。中期後葉～末にかけては、湖東地域に方形の竪穴建物が多い点を指摘することができ、西濃地域との関係が推定される。

（４）集落構造

竪穴建物の付近には、土坑、小穴、埋設土器が位置する。SH01の周囲にはSK07、SK08、小珠の出土したSP01が、SH02の南西にはSX02が隣接している。これらの遺構には、重複や切り合いがなく、竪穴建物と時期がほぼ同じであり、同時に存在していたものであろう。竪

穴建物１軒に、土坑、小穴、埋設土器が伴い、一つの居住域を形成しているものと考えられる。こうした居住単位は、「単位集団」（近藤1959）、あるいは「世帯共同体」（都出1989）という概念で説明されてきたものに相当すると考えられる。大阪府和泉市仏並遺跡においても、中期後葉のこうした単位が検出され（（財）大阪府埋蔵文化財協会1986）、貯蔵遺構や埋葬遺構が伴う集落の出現が指摘されている（瀬口2009）。中期後葉には、近畿地方各地で遺跡が多くなる現象が認められており、集落の分村化が進んだ可能性も考えられている。なお、丁田遺跡で検出された土坑や小穴については、明確な痕跡は乏しいが、土壙墓が含まれている可能性がある。小珠の出土したSP01については、さらにその可能性が強い。建物構造や空間領域においては、明らかな差は見出せず、ほぼ等質的な居住単位が集まっているものと推定できる。

（５）埋設土器の性格

埋設土器は２基検出された。SX01からは翡翠大珠が出土しており、注目できる。埋設土器の姿勢は、正位や逆位ではなく横位で、土器は縄文のみが施された深鉢１個体である可能性が高い。翡翠大珠の出土とあわせ、特殊な状態を示す。土坑は、削平を考慮しても深さ40～50cmであると推定できる。また、周辺に同時期の遺構は存在せず、竪穴建物などの生活に関わる遺構との間には20m以上の空間が存在している。

一方、竪穴建物SH02に隣接するSX02は、姿勢は正位と推定され、底部が打ち欠かれた可能性のある有文精製の深鉢の中には、口縁部を打ち欠いた無文土器が入れ子状に挿入されており、これらとは別個体の土器の底部片が上に置かれたような状態であった。土坑はSX01

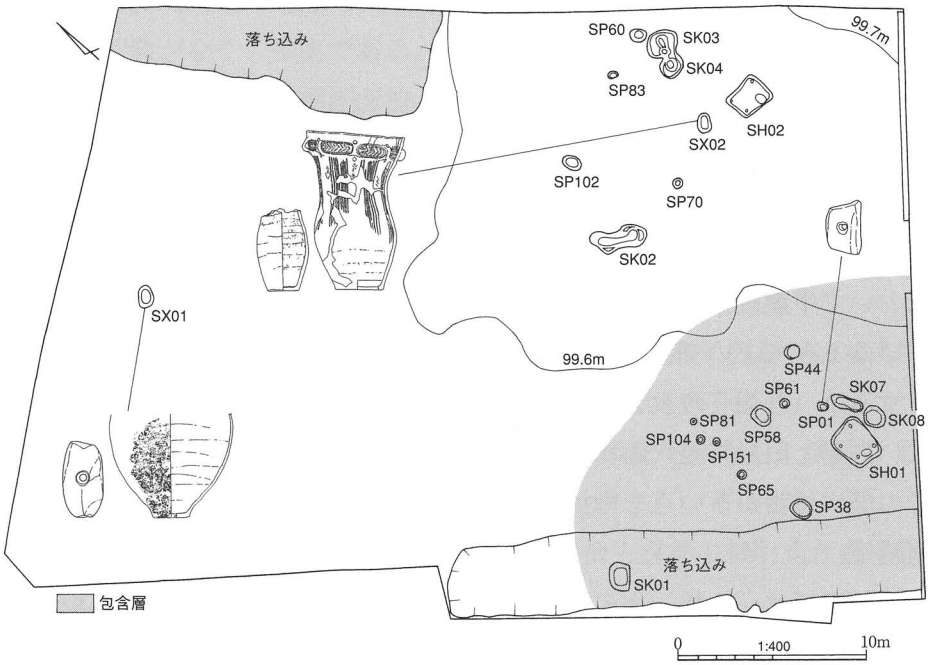


図48　縄文時代中期末の丁田遺跡

と比べ、断面が台形を呈する深いものである。このように、両者の埋設土器には相違点が多く、性格が異なるものと考えられる。

中期後半に関東地方で出現した埋設土器は、中期末～後期初頭にかけて西日本に流入することが明らかになっているが、丁田遺跡の埋設土器の時期は中期末であり、近畿地方においては古い段階に位置する。また、中期末以降においては、屋内の埋設土器が衰退し、後期前葉頃から屋外埋設土器が増加することから、集落における祭祀の場や縄文社会に変革が起きたものと考えられている。こうした埋設土器の分布は、従来から指摘されているように、東日本からの展開を示している（植田1990）。

近畿地方及びその周辺の様相と比較しつつ、埋設土器の性格について検討しておく。近畿地方においては、中期末あるいは後期初頭の段階では、大阪府岸和田市山ノ内遺跡（（財）大阪府埋蔵文化財協会1988）を除き正位か逆位に埋設され、有文精製の土器を多く用い、埋甕的要素が強い（中村2010）。北白川上層１式期以前では、屋外、屋内に関わらず、竪穴建物などの生活の痕跡に密接した状況である。後期後半の京都府京都市北白川植物園遺跡の例は、横位に埋設する点や粗製土器を多く用いる点で、埋甕的要素から分かれ、土器棺墓が墓として定着した様相を示している（泉1977）。ただし、再葬かどうかは不明である。また、山ノ内遺跡では、前述したように、後期初頭の中津式期に位置する横位の屋外埋設土器１基が検出されている。当該期の埋設土器の多くが正位であるのに対し、横位であるという点で区別され、注目できる。なお、中部地方の当該期においては、正位と逆位がみられ、逆位が多い。後期以降になると、以前の時期と同様に居住域に位置する埋甕的なものと、明確に居住空間から分離し、墓地として明らかに分離されているものの両方があることを指摘できる。

丁田遺跡のSX02には、精製の有文土器と粗製の無文土器が用いられ、竪穴建物に近接する。また土器の姿勢は、正位であると推定される。入れ子状を呈する点は特異で、類例として、直接の関係性は不明だが、長野県塩尻市小丸山遺跡の中期末の例が知られる（山本2010）。底部を欠く大型の深鉢の内部に小型の胴部下半を欠く深鉢と深鉢の胴下半部が納められたものである。一方、SX01には粗製の縄文のみが施された深鉢が用いられている。埋設土器は横位で、翡翠大珠を伴い、周辺に同時期の遺構はなく、居住域から離れている。

このように両者を比較すると、SX02には、北白川上層１式以前の埋甕的な要素が強くうかがわれ、乳幼児が埋葬された可能性が考えられる。これに対し、SX01は、後期以降に形成される土器棺墓と近い要素をもつことを指摘でき、後期初頭に位置する山ノ内遺跡の横位に埋設されたものと同様に、土器棺墓の初現的な遺構であると考えることもできるかもしれない。中村大による土壙墓の認定基準（中村2000）に照らせば、土器の周囲に遺体を安置する空間はなく、土器を棺として用いている可能性も考えられる。墓であるとすると、居住域と空間を隔てて存在しており、集落内において特別な場として広く認められ、象徴的な意味をもっていたと考えられる。翡翠大珠は副葬品とみなされ、埋葬された人物像としては、集落の統合や運営に関わった重要人物であると想定できよう。北側と西側の集落の状況が不明であり、

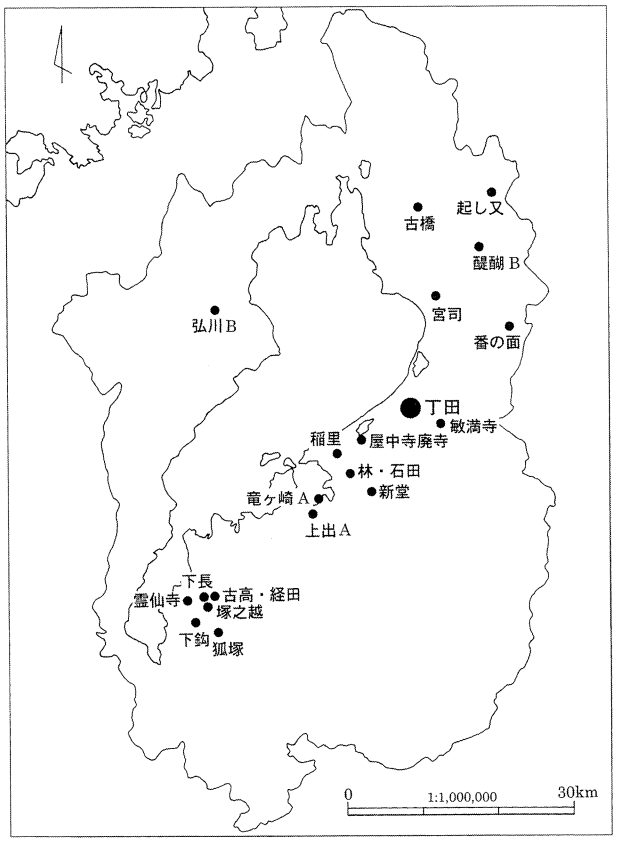


図49　滋賀県における縄文時代中期末の遺跡

SX01の集落全体における位置などは今後の課題である。ただし、墓である場合には、大人あるいは幼児のどちらが埋葬されたのか、再葬かどうかは不明である。

一方、供献のデポである可能性もあるが、周辺には供献の対象となる遺構や墓域を見出し難い。したがって、墓である可能性の方が高いと考えられる。

（6）石器について

磨石・敲石、石皿が主体で、石鏃2点、磨製石斧1点、加工面のある角柱状を呈したチャートの原石や石核も出土している。

石器の組成としては、出土総数は少ないものの、磨石・敲石、石皿が主体で、石鏃や磨製石斧が少ない傾向を示す。磨石・敲石、石皿が主体であることは、堅果類の加工が行われていたことを示しているのであろう。また、チャートの石核と原石、サヌカイトとチャートの剥片、チャートの敲石が出土している点に注目できる。原石を入手し、石器製作を行っていた可能性が高い。東日本からもたらされたと考えられる翡翠大珠や外来系土器も出土しており、他地域との交易を行っていた様子がうかがわれる。磨石・敲石と石皿が出土し、交易も行っていることから、定住性の高さを指摘できよう。

（7）湖東地域における縄文時代中期末の集落

湖東地域をはじめとして、県内における縄文時代中期末の集落についてみておきたい。湖東地域における縄文時代中期末の遺跡には、近江八幡市白王遺跡、安土町上出A遺跡、竜ヶ崎A遺跡、東近江市の旧能登川町林・石田遺跡、彦根市屋中寺廃寺遺跡、東近江市の旧五個荘町新堂遺跡がある。

湖北地域の伊吹山地を中心とした地域にも遺跡が集中する。長浜市の旧木ノ本町古橋遺跡、浅井町醍醐B遺跡、米原市の旧山東町番の面遺跡、同市の旧伊吹町起し又遺跡などが知られる。湖南地域では、守山市塚之越遺跡、下長遺跡、古高・経田遺跡、栗東市狐塚遺跡、霊仙寺遺跡など、守山市や栗東市を中心とした氾濫平野に遺跡が集中する。湖西地域では、高島市今津町弘川B遺跡があげられる。このように、県内における縄文時代中期末の遺跡は、湖東南部地域、湖北伊吹山地地域、湖南守山市域・栗東市域に集中している（小島1999）。

丁田遺跡の位置する湖東地域の犬上川流域においては、中流域の台地上に存在する多賀町

敏満寺遺跡が知られる。犬上川流域を含めた湖東地域では、中期末において遺跡が増加し、石囲炉をもつ竪穴建物、配石遺構、埋設土器、浅鉢など、東日本から流入した様々な文化が顕著となる（泉・丸山1992）。こうした様相は、敏満寺遺跡でもみられ、石囲炉を有する竪穴建物が検出されている。番の面遺跡や配石遺構の検出された起し又遺跡、醍醐Ｂ遺跡とともに東日本縄文文化を直接的に受け入れた痕跡として考えられている（中村2006）。また、竜ヶ崎Ａ遺跡では、東海地方からの搬入品と考えられる土器が出土し、東海地方からの集団の移動も想定されている（小島2006）。土器だけでなく、遺構においても変化が顕著であることから、人間が移動してきた可能性も十分考えられる。こうした中期末における東日本縄文文化の流入により、後・晩期に低地部や扇状地で遺跡が増加する現象をもたらしたのであろう。丁田遺跡は、食料資源の季節的変化を緩和し、新たな環境で本格的に定住し始めた段階に相当すると考えられ（瀬口2001・2009）、台地を主な集落域にしていた縄文人が、低地へ進出した先駆的な集落として評価できる。また、丁田遺跡では、北陸地方西部や東海地方西部から搬入されたと推定される土器や北陸地方からもたらされたと考えられる翡翠大珠が出土している点も示唆的で、近畿地方外縁部における東日本との交流の窓口としての役割を担っていたと考えられる。

（8）結　語

丁田遺跡における集落の検討からは、縄文時代中期末～後期初頭にかけての時代の変革期に営まれた集落の姿がうかがえる。犬上川流域における縄文時代集落の氾濫平野への進出や東日本との交流の様相を考えるうえで重要な遺跡であるといえる。近畿地方へ中期末に流入した文化は、後期へと引き継がれ、集団の統合が強化された結果、後期前葉には愛知川を挟んで位置する旧能登川町正楽寺遺跡（能登川町教育委員会1996）に代表される大規模な集落の出現を導いたものと考えられる。こうした意味において、丁田遺跡の西側に位置し、後・晩期を主体とする福満遺跡との関係にも留意しておく必要があろう。

参考文献

泉　拓良　1977「京都大学植物園遺跡」『佛教芸術』115号　毎日新聞社

泉　拓良　1982「西日本縄文土器再考―近畿地方縄文中期後半を中心に―」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集　小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会

泉　拓良　1985「中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ―北白川追分町縄文遺跡の調査―』 京都大学埋蔵文化財研究センター

泉　拓良　1988「咲畑・醍醐式土器様式」『縄文土器大観　中期Ⅱ』 講談社

泉　拓良　1988「船元・里木式土器様式」『縄文土器大観　中期Ⅱ』 講談社

泉　拓良・丸山雄二　1992「近江の黎明」『近江の古代を考える』 吉川弘文館

植田文雄　1991「拡張、あるいは展開する縄文文化―西日本における埋甕の出現とその変容をめぐって―」『滋賀考古』第５号　滋賀考古学研究会

小江慶雄　1956「滋賀県番の面縄文式住居」『京都学芸大学　学報Ａ』No.9
狩野　睦　1998「串田新・大杉谷式土器様式」『縄文土器大観３　中期Ⅱ』 講談社
関西縄文文化研究会　2000『関西の縄文墓地』
関西縄文文化研究会　2008『関西の縄文中期末土器―北白川Ｃ式とその周辺―』
京都大学埋蔵文化財研究センター　1985『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ―北白川追分町縄文遺跡の調査―』
纐纈　茂・高橋健太郎　2008「中富式・神明式」『総覧　縄文土器』 アム・プロモーション
五個荘町教育委員会　1993『新堂遺跡』五個荘町文化財調査報告第25集
小島孝修　1998「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き―地域の検討２　湖東南部地域―」『紀要』第11号　財団法人滋賀県文化財保護協会
小島孝修　1999「縄文時代中期末の変革期―近江の事例から―」『同志社大学考古学シリーズⅦ』 同志社大学考古学シリーズ刊行会
小島孝修　2005「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き―遺跡集成補遺編１―」『紀要』第18号　財団法人滋賀県文化財保護協会
小島孝修　2006「総括」『竜ヶ崎Ａ遺跡』 滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会
近藤義郎　1959「共同体と単位集団」『考古学研究』第６巻第１巻　考古学研究会
（財）大阪府埋蔵文化財協会　1986『仏並遺跡発掘調査報告書』
（財）大阪府埋蔵文化財協会　1988『山ノ内遺跡Ｂ地区・山直北遺跡』
滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会　2004『敏満寺遺跡』
滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会　2006『竜ヶ崎Ａ遺跡』
白川　綾　1997「常安王神の森遺跡出土縄文時代中期後葉～後期初頭土器群の検討」『常安王神の森遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第35集
白川　綾　2010「越前市五分市町出土の縄文土器」『福井県教育庁埋蔵文化財センター年報24』
瀬口眞司　1998「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き―地域の検討３―湖東北部地域」『紀要』第12号　財団法人滋賀県文化財保護協会
瀬口眞司　2001「適応地の拡大過程と地域的差異―琵琶湖東岸における縄文時代早期～弥生前期の遺跡立地―」『紀要』第14号　財団法人滋賀県文化財保護協会
瀬口眞司　2005「石器構成からみた関西縄文社会における通年定住戦略の拡散過程」『紀要』第18号　財団法人滋賀県文化財保護協会
瀬口眞司　2009「関西地方の縄文集落と縄文社会」『縄文集落の多様性Ⅰ　集落の変遷と地域性』 雄山閣
田中英司　2001『日本先史時代におけるデポの研究』千葉大学考古学研究叢書１　平電子印刷所
千葉　豊　1989「近畿地方出土の埋設土器について」『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財報告Ⅰ』 三重県教育委員会
都出比呂志　1989『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店

中村　大　2000「土器の出土状態からみた土壙墓の認定について―縄文時代の北日本を中心として―」『國學院大學考古学資料館紀要』第16輯　國學院大學考古学資料館
中村健二　1994「近畿地方縄文文化のお墓―縄文早期から後期にかけて時間的変遷の素描―」『紀要』第２号　滋賀県立安土城考古博物館
中村健二　1996「縄文晩期土器棺墓の調査方法について―近畿地方の場合―」『紀要』第９号　財団法人滋賀県文化財保護協会
中村健二　1998「滋賀県における縄文住居の変遷について」『人間文化』１号　滋賀県立大学人間文化学部
中村健二　2006「犬上川扇状地と小川原遺跡」『扇状地の考古学―愛知・犬上の古代文化―』　滋賀県立安土城考古博物館
中村健二　2010「近畿地方の縄文集落の葬墓制」『縄文集落の多様性Ⅱ　葬墓制』　雄山閣
能登川町教育委員会　1996『正楽寺遺跡』能登川町埋蔵文化財調査報告書第40集
山本暉久　2010「中部地方の縄文集落の葬墓制」『縄文集落の多様性Ⅱ　葬墓制』　雄山閣

2 丁田遺跡出土翡翠大珠をめぐる問題

（1）はじめに

丁田遺跡における発掘調査による重要な成果の一つとして、SX01埋設土器から翡翠大珠[1]が出土したことを挙げることができる。ここでは、丁田遺跡出土例の型式学的検討をふまえ、本例が提起する問題点について整理検討してみたい。

（2）翡翠大珠の広がり

翡翠大珠は、縄文時代前期後葉に出現し、中期に最盛期を迎え、後期中葉には終焉を迎える。翡翠の原産地のある新潟県･富山県境を中心に東日本に分布し、北海道や九州にも及ぶ。ただし、その大半は、関東・中部・東北北部で出土している（寺村1995、鈴木2004a・2004b）。

富山県東部から新潟県西部の海岸部に位置する新潟県糸魚川市長者ヶ原遺跡、富山県朝日町境Ａ遺跡、新潟県青海町寺地遺跡などからは、翡翠の原石や剥片、敲石、未製品、研磨用の砥石が多量に出土しており、中期において翡翠大珠がこれら特定の遺跡で製作されていたことが判明している（木島2004）。また、蛍光Ｘ線分析の行われた翡翠大珠のほとんどが、新潟県糸魚川市姫川流域で産出する翡翠を用いていることも判明している（藁科2004）。長さ５cm程度が標準であるが、10cmを越える例もある。墓から出土した例が多く、福岡県山鹿貝塚、静岡県蜆塚遺跡では、人骨とともに出土し、胸飾として身につけられていたと推定できる例も知られる。翡翠大珠が発見される遺跡は少なく、１遺跡で１点程度にとどまるのが通例であり、集落としてもほぼ例外なく地域の中心となる拠点集落である。これらのことから、翡翠大珠は、縄文社会のきわめて貴重な装身具で、身分差を示すものと考えられている。

（3）丁田遺跡出土例の型式学的位置

丁田遺跡出土例は、長さ4.05cm、幅2.17cm、最大厚1.28cm、重量21.5gを測り、完形品である。両面の外孔径は片面が0.69cm、0.85cm、一方の面が0.74cm、0.79cmである。内孔径は、0.43cm、0.45cmを測る。一般的に、一方向から直線的に貫通する孔が空けられた例が多いが、本例は、孔の断面形が算盤玉形を呈し、両面穿孔されている。両面には研磨された際の調整面を明瞭にとどめる。断面形では、一方の面が膨らみをもつのに対し、片方の面は平坦ぎみである。両端部は少し窪むが、角に丸みをもち、製作当初の形態なのか、欠損後に摩滅したのかは判然としない。全体的に入念に研磨がなされている。

長楕円形を呈し、大きくは鰹節形に含まれる。SX01において、縄文中期末（北白川C式期）の埋設された粗製の深鉢の中から出土している。共伴した土器の時期から、中期末（北白川C式期）に比定できる。

（4）近畿地方の大珠

丁田遺跡出土例は、近畿地方においては、数少ない例の内の一つである。近畿地方の類例としては、奈良県天理市布留遺跡（埋蔵文化財天理教調査団1995）、同県天理市別所ツルベ遺跡（天理市教育委員会1998）、京都府相楽郡精華町椋ノ木遺跡（(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2002）の各出土例が知られる。いずれも翡翠製である。

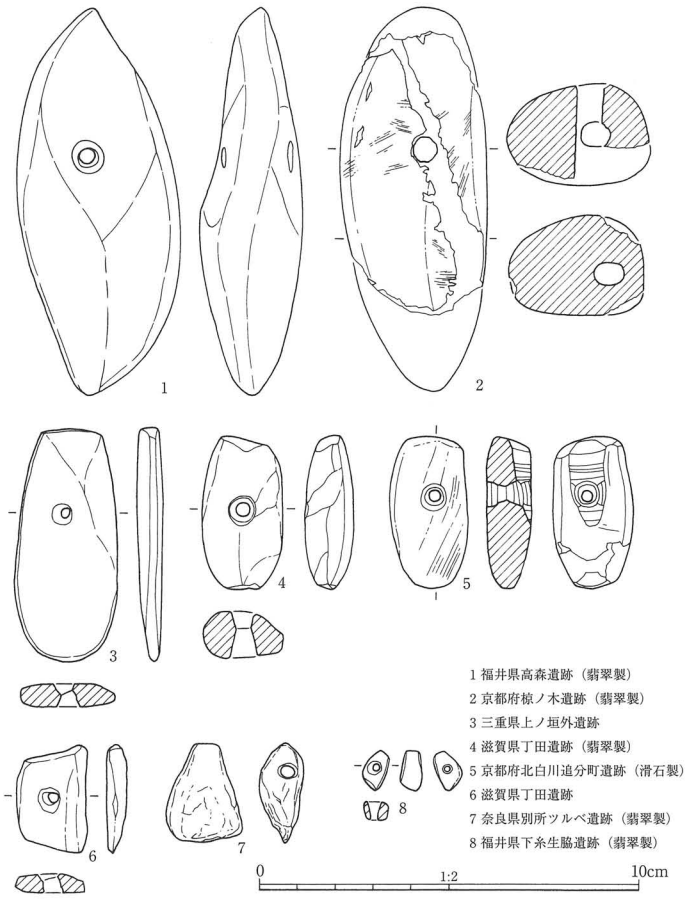


図50　近畿地方とその周辺における大珠・小珠の諸例

布留遺跡では、縄文時代中期末～後期初頭の土坑墓と推定される遺構から、長さ4.9cmの大珠が出土した。微量の骨片も共伴したという。未報告のため、詳細は不明である。

別所ツルベ遺跡では、長さ2.6cmと小型で、側面に穿孔されたものが縄文後期前葉の埋設土器の近くから出土した。小珠の類であろう。本来埋設土器に伴っていた可能性がある。

椋ノ木遺跡では、残存長7.5cmの欠損品が表土層から出土した。鰹節形で、身の中程で交差する2つの孔をもつ。時期は不明である

が、中期末～後期初頭、後期前葉～中葉の遺構が検出されていることから、中期末～後期中葉の間に位置する可能性がある。

また、翡翠製ではない大珠もあり、京都府京都市北白川追分町遺跡では、滑石製大珠が出土している（京都大学埋蔵文化財研究センター1985）。長さ4.0cm で、一孔が貫通し、上端から片面中央まで溝をつけている。中期末～後期初頭頃とされる包含層からの出土である。石材は異なるものの、丁田遺跡出土例と大きさ、形態が近い点を指摘できる。

近畿地方周辺部にも視野を広げてみたい。福井県朝日町下糸生脇遺跡では、長さ1.05cm の小珠で、側面に一方向から穿孔されたものが埋設土器の付近から出土している（福井県教育庁埋蔵文化財センター1999）。翡翠製の可能性があり、本来埋設土器に伴っていたと推測される。時期は不明であるが、遺跡からは後期以降を主体とする土器が出土している。三重県松阪市上ノ垣外遺跡では、包含層から長さ6.13cm の完形品が出土している（三重県埋蔵文化財センター1996）。後期初頭（中津式期）～後期前葉までの土器が主に出土しており、後期に位置する可能性が考えられる。箆状梯形で、翡翠以外の石材が用いられているとみられる。

福井県武生市高森遺跡では、長さ約10cm で、不整形の鰹節形を呈するものが出土している（木下2007）。詳細な時期は不明である。

（5）近畿地方における翡翠大珠出現の背景

近畿地方の出土例をみると、翡翠大珠は、数少ない限られた特殊な装身具であったことがわかる。では、これらの翡翠大珠は、どこからもたらされたものなのだろうか。東日本に偏在する翡翠大珠の分布状況からみて、丁田遺跡出土例をはじめとした近畿地方の翡翠大珠は、東日本から流通したものと考えるのが妥当であろう。

縄文中期末～後期初頭頃の状況をみておきたい。湖東地域から東側の西濃地域では少なく、時期の判明する例は少ないが、飛騨地方と東濃地域に偏在する（三島2009）。太平洋側ではやはり出土数が少なく、主に静岡県以東にみられる（松本2009）。一方、翡翠製品の製作遺跡がある北陸地方では、石川県に少しみられ、富山県以東では濃密な分布をみせる（伊藤・谷口2006）。長さ10cm 以上の優品もみられ、富山県東部から新潟県西部にかけては攻玉圏にあたり、翡翠製品の盛んな製作と交易の様子を示している（木島2004、山本2007）。

このように北陸地方に多く存在し、湖東地域は日本海側と比較的近いという地理的環境にある点を勘案すると、丁田遺跡出土例は、日本海側からの人の往来によってもたらされた可能性が考えられる。従来、北陸地方と畿内の資料は知られていたが、今回、地域間の分布の空白をうめ、両地域の資料をつなぐ好資料が得られたことは、翡翠大珠の流通を知るうえで重要である。畿内から湖東地域へとつながる交易ルートがあり、近畿地方の集団が、湖東地域を窓口として、東日本との交易を行っていたことも想定でき、畿内出土例も北陸地方からもたらされた可能性は高いであろう。湖東から比叡山南西麓を経て、木津川を下る経路が推測できる。翡翠大珠に対する価値観を共有し、大珠が地域社会に根付いていたとみられる北陸地方と、翡翠大珠の分布圏が形成されない近畿地方との交流関係をうかがうことができる。

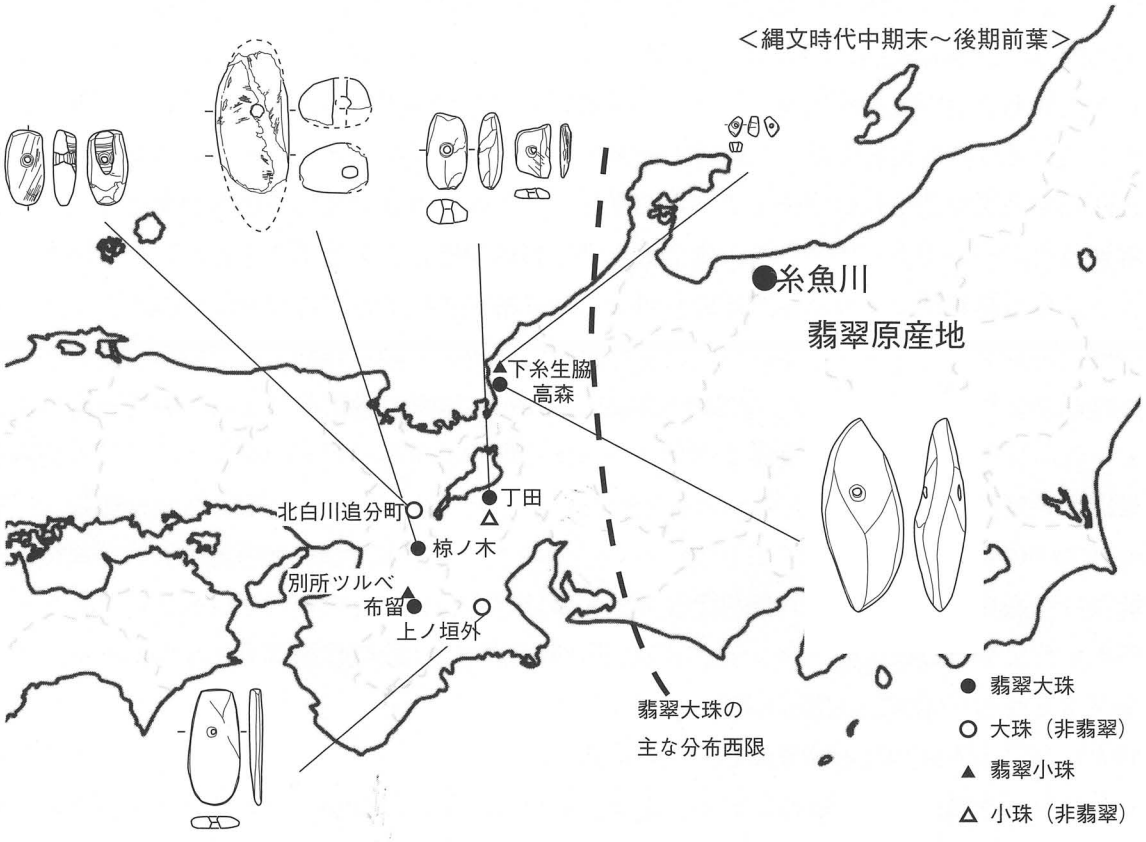


図51　近畿地方とその周辺における大珠・小珠の分布

丁田遺跡をはじめとした湖東地域の遺跡からは、北陸地方西部から搬入されたと推定できる土器も出土しており、恒常的に交易関係があったことが推測できる。また、中期末～後期初頭は、東日本縄文文化が近畿地方へ流入し、遺跡が増加する変革期にあたり（泉・丸山1992）、文化の受け入れとともに集団の移動も想定できることから、密接な関係があったことは想像に難くない。丁田遺跡及び畿内の各出土例がもたらされた経緯については不明であるが、何らかの契機や遠隔地間の婚姻などの特別な事情によりもたらされたと考えられる。

現在のところ、近畿地方において複数の翡翠大珠が出土した遺跡はなく、いったん核となる集落に運ばれてから周辺に再分配されたのか、あるいは、集落ごとに遠隔交易を行っていたのかは今後の検討課題である。ただし、丁田遺跡からは、翡翠大珠の他に、石材不明の小珠１点も出土しており、畿内と北陸地方を結ぶ交易ルートの要である湖東地域という地理的環境も考慮すると、近畿地方の集団の翡翠大珠の入手をはじめとした交易活動において、重要な役割を果たしていた可能性は高いであろう。

また、孔の形態に注目すると、一方穿孔が一般的であるにもかかわらず、丁田遺跡、三重県上ノ垣外遺跡、京都府北白川追分町遺跡の各出土例が両面穿孔であることが注目される。丁田遺跡 SP01出土の小珠も両面穿孔である。近畿地方出土翡翠大珠の大半は、北陸地方で製作されたと考えられるが、攻玉において穿孔技術はきわめて重要な技術要素であり、北陸地

方の攻玉圏外においても攻玉が行われた可能性を視野に入れて今後検討する必要があろう。

（6）結　語

丁田遺跡出土の翡翠大珠は、縄文時代の精神文化、社会構造はもちろん、多様な地域間のネットワークを如実に物語るものといえよう。埋設土器に納められていた状態が明らかになった点でも重要である[(2)]。第１節で検討したように、墓である可能性が考えられる。もしそうであれば、集団の統合にかかわった中心的な人物が埋葬されたと考えられる。翡翠大珠が北陸地方からもたらされ、埋設土器の中に納められた経緯については、今後も検討されるべき課題である。

註

(1) 従来から硬玉製大珠と呼称される場合もあるが（八幡1940）、縄文社会における最高級の貴石である翡翠が用いられていることを重要視し、ここでは翡翠大珠とする。大珠については、大きさが３cm 以上のものを当てる場合（八幡1940）と５cm 以上とする考え（鈴木2004a）がある。丁田遺跡出土例は、長さ4.05cm で、実際には長さ３～４cm ほどのものが相当数存在し、現代人の感覚により、恣意的に大きさの違いで区分することに意味があるのか、現状では不明瞭であると考え、４cm 以上のものについても大珠としておきたい。

(2) 埋設土器内における翡翠大珠出土例としては、中期～後期の富山県旧宇奈月町浦山寺蔵遺跡、後期初頭の岩手県二戸市大向上平遺跡、中期後葉の岩手県田代Ⅳ遺跡の各例が知られる。大向上平遺跡では翡翠大珠２点、アマオブネ貝製の玉70点以上が納められていた（(財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2000)。埋設された土器は高さ約13cm で、人骨を埋葬したとするにはかなり小さく、祭祀的要素が強い。田代Ⅳ遺跡では、横位の深鉢の中から翡翠大珠２点が出土し、土器を棺とした墓であるとみられる（中村2000)。翡翠大珠を納めた埋設土器には、墓と供献や祭祀のデポがあると推測される。

参考文献

伊藤雅文・谷口宗治　2006「石川県出土の縄文時代ヒスイ玉集成」『玉文化』第３号　日本玉文化研究会

岡村道雄　1993「埋葬にかかわる遺物の出土状態からみた縄文時代の墓葬礼」『論苑考古学』 天山舎

木島　勉　2004「北陸地方の玉文化―ヒスイ製玉類の攻玉―」『季刊考古学』第89号　雄山閣

木下哲夫　2007「北陸（福井県）における縄文時代の装身具」『石川県埋蔵文化財情報』第17号　（財）石川県埋蔵文化財センター

京都大学埋蔵文化財研究センター　1985『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ―北白川追分町縄文遺跡の調査―』

栗島義明　1985「硬玉製大珠の広大な分布圏」『季刊考古学』第12号　雄山閣

栗島義明　2004「硬玉製大珠の交易・流通」『季刊考古学』第89号　雄山閣

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2000『大向上平遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　2002『京都府遺跡調査概報』第105冊
鈴木克彦　2004a「硬玉製大珠（ヒスイ大珠）」『季刊考古学』第89号　雄山閣
鈴木克彦　2004b「縄文時代硬玉研究の現況」『日本玉作大観』 吉川弘文館
高倉洋彰　1988「ヒスイの道」『Museum Kyushu』第26号　博物館等建設推進九州会議
寺村光晴　1995『日本の翡翠』 吉川弘文館
天理市教育委員会　1998『天理市埋蔵文化財調査概報　平成６・７年度（1994・1995年）』
中村　大　1999「墓制から読む縄文社会の階層化」『最新縄文学の世界』 朝日新聞社
中村　大　2000「土器の出土状態からみた土壙墓の認定について―縄文時代の北日本を中心として―」『國學院大學考古学資料館紀要』第16輯　國學院大學考古学資料館
福井県教育庁埋蔵文化財センター　1999『下糸生脇遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第47集
埋蔵文化財天理教調査団　1995『布留遺跡三島（里中）地区発掘調査報告書』
松本一男　2009「静岡県内出土の縄文時代ヒスイ玉集成」『玉文化』第６号　日本玉文化研究会
三重県埋蔵文化財センター　1996『上ノ垣外遺跡』三重県埋蔵文化財調査報告123―２
三島　誠　2009「岐阜県出土の縄文ヒスイ玉集成」『玉文化』第６号　日本玉文化研究会
山田康弘　1993「縄文人骨の埋葬属性と土壙長」『筑波大学　先史学・考古学研究』第10号　筑波大学歴史・人類学系
山田康弘　1997「縄文時代の子供の埋葬」『日本考古学』第４号　日本考古学協会
山本正敏　2007「富山県における縄文時代石製装身具」『石川県埋蔵文化財情報』第17号　（財）石川県埋蔵文化財センター
八幡一郎　1940「硬玉製大珠の諸問題」『考古学雑誌』第30巻第５号　日本考古学会
渡辺　仁　1990『縄文式階層化社会』 六興出版
藁科哲男　2004「縄文時代出土玉類産地の科学分析成果」『季刊考古学』第89号　雄山閣

挿図出典

図50　1：木下2007　2：（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター2002　3：三重県埋蔵文化財センター1996　5：京都大学埋蔵文化財研究センター1985　7：天理市教育委員会1998　8：福井県教育庁埋蔵文化財センター1999をそれぞれ改変トレース、図51　各報告を基に作成

3 丁田遺跡における古代の集落

（1）はじめに

丁田遺跡の調査では、多数の竪穴建物、掘立柱建物が検出され、建物の築造時期は、奈良時代～平安時代初頭であることが明らかになった。ここでは、犬上川右岸における集落跡の

調査事例と比較しつつ、当該期の集落像について若干の検討を行いたい。

（2）丁田遺跡の古代集落

個々の建物については、事実記載のとおりであるが、10軒の竪穴建物、6棟の掘立柱建物、5条の柵列を検出した。

竪穴建物には、平面積5㎡以上であるSX03、SX09、SX10、SX11、SX14の大型のものと平面積4㎡以下であるSX04、SX05、SX06、SX07、SX08の小型のものがある。出土遺物から、前者は7世紀後半～8世紀前半の時期に比定できる。一方、後者の小型のものについては、出土遺物と切り合い関係から、8世紀後半～9世紀初頭頃であると考えられる。掘立柱建物と柵列は、詳細な時期認定が困難であるが、出土遺物から8世紀後半～9世紀前半に位置する。小型の竪穴建物は、調査区中央の掘立柱建物群の付近に点在し、大型のものは、調査区東半部において全体的に偏りなく分布している。掘立柱建物には、桁行3間×梁行1間と桁行2×梁行1間のものがあり、SB01、SB02、SB05、SB06が、同じ向きで建てられ、これらには柵列が隣接する。調査区南側に大きくまとまっている。また、北側のSB03、SB04もこれらの建物とほぼ方向が一致し、関連性が高い。

これらのことから、丁田遺跡における古代の集落は、はじめは竪穴建物を基本とする一般集落であったが、後に掘立柱建物群に小型の竪穴建物が付随する構成に変化したと考えられる。顕著な建て替えの痕跡はみられず、集落の存続期間は比較的短かったものと推定される。

（3）犬上川右岸における古代集落

丁田遺跡の古代集落と時期が併行する犬上川右岸の事例を紹介し、比較検討したい。

竹ヶ鼻廃寺遺跡　犬上川下流右岸の微高地上に位置する。白鳳時代創建の犬上郡最古の寺院で、郡を代表する古代寺院である。過去6次にわたって調査が行われている（彦根市教育委員会1985・1993・2010a・2010b）。中枢部の発掘調査では、平安時代以降と推定される整地層から多量の瓦や土器が出土するとともに、奈良時代後半～平安時代と推定される多くの掘立柱建物、柵列、井戸が検出された。これらの遺構は、寺院を廃して建てられたものであると推定され、20棟以上の掘立柱建物が検出されている。2×1間、2×2間、3×1間、3×3間、4×2間など多様な建物で構成され、大規模な建物も存在する。奈良時代の竪穴建物も検出されている。円面硯や銅匙が出土しており、犬上郡衙の有力な比定地である。

品井戸遺跡　竹ヶ鼻廃寺遺跡の北方に位置し、奈良時代～平安時代の掘立柱建物6棟が検出され（彦根市教育委員会1985）、2×1間などの建物がみられる。石帯が出土しており、竹ヶ鼻廃寺遺跡とともに犬上郡において中心的な位置を占めていたと考えられる。

福満遺跡　品井戸遺跡の北方に隣接する。第4次調査では、平安時代と推定される掘立柱建物4棟が検出されている（彦根市教育委員会1987）。2×2間などの建物がみられる。

藤丸遺跡　丁田遺跡からやや東方に位置する。奈良時代の掘立柱建物5棟、柵列1条が検出され（彦根市教育委員会2005）、2×1間をはじめとする建物がみられる。

八反切遺跡　藤丸遺跡の北東、芹川の右岸に位置する。2次にわたって調査され、奈良時

代～平安時代の掘立柱建物が18棟検出されている（彦根市教育委員会2006・2009）。２×２間、３×２間、４×１間などの建物が検出されている。

木曽遺跡　八反切遺跡の東方、芹川の右岸に位置する。奈良時代の竪穴建物５軒以上と掘立柱建物30棟以上が検出されている（滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会1997・2002、多賀町教育委員会1999）。竪穴建物は８世紀のものである。掘立柱建物には３×２間、３×３間、３×４間などがあり、８世紀後半以降に位置する。８世紀後半になると、居住用建物が、竪穴建物から掘立柱建物へ移行したことがうかがわれる。円面硯が出土している。

（４）古代集落の変質

奈良時代～平安時代の集落の特徴として、２×１間、３×１間の建物が多く、集落を構成する基本的な単位である可能性がある。また、竹ヶ鼻廃寺遺跡、丁田遺跡、木曽遺跡では、竪穴建物が存在する。竹ヶ鼻廃寺遺跡における竪穴建物の状況は不明であるが、丁田遺跡では、竪穴建物のみで集落が構成される段階の後、掘立柱建物と、小型で、恒常的な居住用建物とは考えにくい竪穴建物で集落が構成される段階が認められる。竪穴建物は、掘立柱建物を補完する機能が主になる。こうした竪穴建物は、居住用ではなく、掘立柱建物の補助的な役割ないし倉庫などの特別な用途に用いられたものと推定される。木曽遺跡においても、居住用の建物が、竪穴建物から掘立柱建物へ変化したことがわかる。また、竹ヶ鼻廃寺遺跡は、建物の規模、数の多さにおいて、突出し、特殊な遺物が出土するなど、通有の集落とは異なる。丁田遺跡においては、８世紀後半に到り、居住用建物は、それまで主流であった竪穴建物から掘立柱建物へ比重が移ったことが明らかになった。こうした変化は、木曽遺跡においても

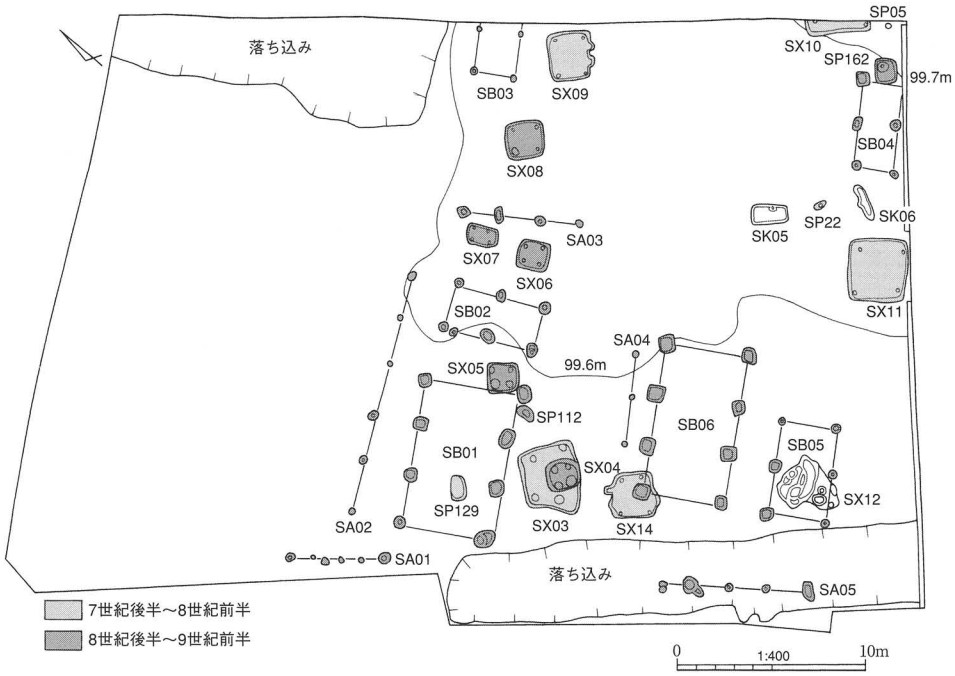


図52　奈良時代～平安時代初頭の丁田遺跡

認められる。竪穴建物は、掘立柱建物を補完する機能が主になる。8世紀後半～9世紀初頭は、居住用建物の主流が竪穴建物から掘立柱建物へ移る転換期であるといえよう。

（5）結　語

丁田遺跡における8世紀後半～9世紀前半の集落は、柵列が伴い、規格性が高いことから、官衙に関わる建物であると推定できる。建物は散発的な展開にとどまり、顕著な立て替えの痕跡はみられない。短い期間に集落が営まれ、やがて廃絶すると、9世紀後半以降には耕作地となり、居住の痕跡はみられなくなる。

奈良時代後半～平安時代初頭の変革期においては、政治情勢の変化により、各地で国衙や郡衙が移動する現象が指摘されており、犬上川流域における集落の再編においても、こうした動きと連動している可能性がある。丁田遺跡の周辺では、北側に高宮廃寺が、西側に竹ヶ鼻廃寺が位置している点に注目され、双方とも犬上郡の中心的な白鳳時代の寺院であり、寺院の造営には有力氏族の意向が大いに関係していると考えられる。これらの寺院や奈良～平安時代の掘立柱建物群の検出された遺跡が、旧東山道沿いとその東側に位置している点も重要であり、主要な幹線道路である旧東山道に沿って、郡の中枢施設が造営されたのであろう。遺構の状況から、中枢部は竹ヶ鼻廃寺遺跡であるとみられ、犬上郡衙に比定できる可能性は高い。丁田遺跡における集落の変質の背景には、一般的な居住空間から変容し、官衙に関連する集落へ転換したことが想定され、竹ヶ鼻廃寺と高宮廃寺の動向が関係しているものと推測される。

参考文献

滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会　1997『木曽遺跡Ⅱ』

滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会　2002『木曽遺跡・土田遺跡・月ノ木遺跡』

多賀町教育委員会　1999『木曽遺跡（第2次～第7次調査)』多賀町埋蔵文化財発掘調査報告書第11集

高橋美久二　2007「律令国家と近江」『新修彦根市史　第1巻通史編古代・中世』 彦根市

彦根市教育委員会　1985『竹ヶ鼻廃寺・品井戸（第4次)』彦根市埋蔵文化財調査報告書第8集

彦根市教育委員会　1987『福満遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告書第13集

彦根市教育委員会　1993『竹ヶ鼻廃寺発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第21集

彦根市教育委員会　2005『藤丸遺跡Ⅱ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第37集

彦根市教育委員会　2006『八反切遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告書第38集

彦根市教育委員会　2009『八反切遺跡Ⅱ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第42集

彦根市教育委員会　2010a『竹ヶ鼻廃寺遺跡第4次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第45集

彦根市教育委員会　2010b『竹ヶ鼻廃寺遺跡第5次・第6次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第46集

出土遺物観察表

表４　出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	細別	残存率（%）	反転図化	器径幅（cm）	器高長さ（cm）	口径厚さ（cm）	色調	その他
1	北西部４層	縄文土器	深鉢	5					橙色	
2	遺構検出面	須恵器	坏身	5	反			12	灰白色	
3	遺構検出面	灰釉陶器	皿	5	反			13	灰白色	
4	遺構検出面	灰釉陶器	碗	5	反				灰白色	底径7.0
5	SH01	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
6	SH01	縄文土器	深鉢	5					灰黄褐色	
7	SH01	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
8	SH01	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
9	SH01	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
10	SH02	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
11	SH02	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
12	SK01	縄文土器	深鉢	10					橙色	
13	SK01	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
14	SK01	縄文土器	深鉢	5					明黄褐色	
15	SK01	縄文土器	深鉢	5					にぶい黄橙色	
16	SK01	縄文土器	深鉢	5					褐灰色	
17	SK01	縄文土器	深鉢	5					にぶい黄橙色	
18	SK01	縄文土器	深鉢	5	反				浅黄橙色	底径8.0
19	SK01	縄文土器	深鉢	5	反				浅黄橙色	底径11.4
20	SK01	土製品	焼成粘土塊	60		3.7	4.3	2.2	にぶい黄橙色	重量20.0g
21	SK02	縄文土器	深鉢	5					灰白色	
22	SK02	縄文土器	浅鉢	5					浅黄橙色	
23	SK02	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
24	SK04	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
25	SK04	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
26	SK04	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
27	SK07	縄文土器	深鉢	5					褐灰色	
28	SK07	縄文土器	深鉢	5					にぶい黄褐色	
29	SK07	縄文土器	深鉢	5					にぶい黄橙色	
30	SK07	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
31	SK07	縄文土器	深鉢	5					にぶい黄橙色	
32	SK08	縄文土器	深鉢	5					灰黄褐色	
33	SK08	縄文土器	深鉢	5					にぶい黄橙色	
34	SK08	縄文土器	深鉢	5					にぶい黄橙色	
35	SK08	縄文土器	深鉢	5					橙色	
36	SK08	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
37	SK08	縄文土器	深鉢	5					にぶい黄橙色	
38	SK08	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
39	SK08	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
40	SK08	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
41	SK08	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
42	SK08	縄文土器	深鉢	10	反				淡黄色	底径11.1
43	SK08	縄文土器	深鉢	5	反				浅黄橙色	底径9.8
44	SX01	縄文土器	深鉢	20	反	39.2			橙色	底径11.7
45	SX01	石製品	大珠	100		2.17	4.05	1.28	淡緑色	重量21.5、翡翠
46	SX02	縄文土器	深鉢	85		25.7	49.2	30.3	浅黄橙色	底径15.0
47	SX02	縄文土器	深鉢	90		16.3			橙色	底径10.0
48	SX02	縄文土器	深鉢	5	反				黄橙色	底径13.9
49	SX02上層	縄文土器	浅鉢	5					にぶい黄橙色	
50	SX02上層	縄文土器	深鉢	5					にぶい黄橙色	
51	SX02上層	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
52	SX02上層	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
53	SX02下層	縄文土器	深鉢	5					にぶい黄橙色	
54	SX02下層	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
55	SX02下層	縄文土器	深鉢	5					褐灰色	
56	SX02下層	縄文土器	深鉢	5					褐灰色	
57	SX02下層	縄文土器	深鉢	10					黄橙色	
58	SX02下層	縄文土器	深鉢	10					橙色	底径6.0
59	SX02下層	土製品	焼成粘土塊	100					橙色	重量30.0g
60	SX02下層	土製品	焼成粘土塊	70					橙色	重量22.0g
61	SX02下層	土製品	焼成粘土塊	100					にぶい黄褐色	重量12.0g
62	SP01	石製品	小珠	100		1.9	2.85	0.55	淡緑色	重量5.0g、石材不明
63	SP01	縄文土器	深鉢	5					黄橙色	
64	SP44	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
65	SP44	縄文土器	深鉢	5					にぶい黄橙色	
66	SP44	縄文土器	深鉢	5					灰黄褐色	
67	SP44	縄文土器	深鉢	5					にぶい黄褐色	
68	SP44	縄文土器	深鉢	5					橙色	
69	SP44	縄文土器	深鉢	5					灰黄褐色	
70	SP44	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
71	SP44	縄文土器	深鉢	5	反				橙色	底径11.2
72	SP44	縄文土器	深鉢	5	反				にぶい黄橙色	底径10.2
73	SP58	縄文土器	深鉢	5					灰黄色	
74	SP58	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
75	SP58	縄文土器	深鉢	5					にぶい黄橙色	
76	SP58	縄文土器	深鉢	5					にぶい黄橙色	
77	SP58	縄文土器	深鉢	5	反				浅黄橙色	底径14.3
78	SP61	縄文土器	深鉢	5	反				にぶい黄橙色	底径16.0
79	SP65	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
80	SP65	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
81	SP65	縄文土器	深鉢	5					にぶい黄橙色	
82	SP70	縄文土器	深鉢	5					橙色	
83	SP81	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
84	SP102	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
85	SP151	縄文土器	深鉢	5					にぶい黄橙色	
86	SX12付近４層	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
87	SX12付近４層	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
88	SX15付近４層	縄文土器	深鉢	5					橙色	
89	SX15付近４層	縄文土器	深鉢	5					明黄褐色	
90	SX12付近４層	縄文土器	深鉢	5					にぶい黄褐色	
91	SX12付近４層	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
92	SX12付近４層	縄文土器	深鉢	5					橙色	
93	SX12付近４層	縄文土器	深鉢	5					にぶい黄橙色	
94	SX12付近４層	縄文土器	深鉢	5					灰白色	

表4　出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	細別	残存率（%）	反転図化	器径 幅（cm）	器高 長さ（cm）	口径 厚さ（cm）	色調	その他
95	SX12付近4層	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
96	SX12付近4層	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
97	SX12付近4層	縄文土器	深鉢	5					にぶい黄橙色	
98	SX12付近4層	縄文土器	浅鉢	5					橙色	
99	SX12付近4層	縄文土器	浅鉢	5					浅黄橙色	
100	SX12付近4層	縄文土器	深鉢	5	反				橙色	底径10.7
101	SX12付近4層	縄文土器	深鉢	5	反				にぶい黄褐色	底径9.6
102	SX15付近4層	縄文土器	深鉢	5	反				浅黄橙色	底径11.5
103	SX08	縄文土器	深鉢	5	反				浅黄橙色	底径7.8
104	SX12付近4層	土製品	焼成粘土塊	100		2.6	2.2	1.3	にぶい黄橙色	重量9.0g
105	SX12付近4層	土製品	焼成粘土塊	100		3	3.7	2.5	橙色	重量19.0g
106	SH01	石器	磨石・敲石	40		5.7	10	3.3	灰色	重量240g、硬質砂岩
107	SH01	石器	磨石・敲石	10		5.2	5	1.98	灰色	重量60g、硬質砂岩
108	SH02（SP50）	石器	磨石・敲石	40		5.4	7.2	4.6	灰白色	重量190g、湖東流紋岩
109	SK07	石器	敲石	100		4.4	4.6	3.8	灰色	重量110g、チャート
110	SK07	石器	磨石・敲石	100		7.55	8.6	4.8	灰色	重量410g、湖東流紋岩
111	SK08	石器	磨石・敲石	30		4.9	9.6	2.9	灰白色	重量210g、砂岩
112	SX02	石器	磨石・敲石	20		2.4	7.1	2.3	灰黄色	重量45g、硬質砂岩
113	SX03	石器	石皿	20		6.5	17.8	4.8	暗灰黄色	重量500g、湖東流紋岩
114	SP38	石器	石皿	10		9.8	9.5	4.97	灰色	重量440g、湖東流紋岩
115	SP44	石器	磨石・敲石	30		6.6	6.7	6	灰色	重量375g、花崗斑岩
116	SP44	石器	石皿	10		6.5	5.9	5.5	灰黄色	重量200g、硬質砂岩
117	SP58	石器	不明	10		5	6.2	2.5	灰色	重量70g、硬質砂岩
118	SP58	石器	不明	20		4.6	10.8	3.1	灰白色	重量140g、凝灰岩
119	SP60	石器	磨石・敲石	100		6.5	10	4.4	灰白色	重量350g、湖東流紋岩
120	SP83	石器	石匙	70		3.7	7.1	1	灰色	重量35g、サヌカイト
121	SP102	石器	剥片	100		1.7	4.06	0.7	灰色	重量5.5g、チャート
122	SX12付近4層	石器	石皿	50		14.8	18	4.5	灰黄色	重量2200g、湖東流紋岩
123	SX12付近4層	石器	磨石・敲石	20		7.85	6.2	6.4	灰色	重量400g、花崗斑岩
124	SX12付近4層	石器	磨石・敲石	40		4.9	10.4	3.9	灰白色	重量250g、花崗斑岩
125	4層	石器	磨石・敲石	10		6.8	8.8	1.1	浅黄色	重量90g、硬質砂岩
126	SX12付近4層	石器	磨製石斧	100		3.6	8	1.78	緑灰色	重量90g、石材不明
127	SX12付近4層	石器	剥片	70		1.9	5.5	0.9	灰色	重量8.5g、チャート
128	SX12付近4層	石器	石核	100		6.1	7.8	2.75	暗赤褐色	重量150g、チャート
129	南東部4層	石器	石鏃	70		1.5	1.95	0.46	黒色	重量1.5g、チャート
130	南東部4層	石器	石鏃	90		1.1	1.5	0.31	灰色	重量0.5g、サヌカイト
131	SX03	須恵器	坏蓋	20	反	14.2			灰色	
132	SX03	須恵器	坏身	40	反		3.8	11.6	灰色	底径7.6
133	SX03	須恵器	長頸壺	10	反	16			灰白色	
134	SX03	須恵器	坏身	10	反				灰色	底径6.9
135	SX03	土師器	皿	10	反		1.9	15.6	橙色	底径12.4
136	SX03	土師器	長胴甕	20	反	31			にぶい黄褐色	
137	SX04	土師器	長胴甕	10	反			13	浅黄橙色	
138	SX06	須恵器	坏蓋	60		16.7	2.5		灰色	
139	SX06	土師器	碗	20	反			12.8	浅黄橙色	
140	SX06	土師器	皿	10	反		1.2	15.7	浅黄橙色	底径11.2
141	SX06	土師器	皿	10	反		0.95	14.7	浅黄橙色	底径11.7
142	SX06	土師器	皿	5	反		1	15.5	浅黄橙色	底径13.5
143	SX06	灰釉陶器	碗	10	反				灰白色	底径7.6
144	SX10	須恵器	坏蓋	20	反	16.2			灰色	
145	SX10	土師器	坏	10	反		3	14.1	浅黄橙色	底径8.5
146	SX11	土師器	長胴甕	10	反			16.2	にぶい赤橙色	
147	SB01（SP114）	須恵器	坏身	10	反				灰色	底径10
148	SB01（SP114）	土師器	坏	10	反			14	浅黄橙色	
149	SB01（SP114）	土師器	皿	10	反		1.2	15.3	灰白色	底径10.5
150	SB03（SP149）	須恵器	坏身	10	反				灰色	底径7.7
151	SB04（SP09）	灰釉陶器	碗	10	反			14.2	灰白色	
152	SB04（SP14）	土製品	土錘	100		0.8	1.5		灰白色	孔径0.3
153	SB06（SP56）	土師器	坏	20	反		2.2	14.1	橙色	底径10
154	SA03（SP97）	須恵器	坏身	10	反			14	灰色	
155	SA05（SP68）	緑釉陶器	碗	10	反			16.5	淡緑色	
156	SA05（SP72）	灰釉陶器	碗	20	反			13	灰色	
157	SA04（SP141）	石製品	礎板石	90		14.2	16.7	3.8	灰色	重量1450g、湖東流紋岩
158	SK06	須恵器	坏身	10	反			12.9	灰色	
159	SP129	土師器	長胴甕	10	反			12.2	浅黄橙色	
160	SP06	土師器	鉢	10	反			14	灰色	
161	SP05	土師器	坏	95			3.1	12.8	淡橙色	底径7.2
162	SP112	土師器	皿	10	反		1.5	17.5	明赤褐色	底径14.5
163	SP112	土師器	皿	10	反		0.8	15.6	浅黄橙色	底径13.8
164	SX09	須恵器	坏蓋	15	反	18.4			灰色	
165	SX09	須恵器	坏蓋	20	反	14.8			灰色	
166	SX09床面	須恵器	坏身	35	反		5.5	14.2	灰白色	底径9.7
167	SX09	須恵器	坏身	10	反		5.3	13.6	灰色	底径9.6
168	SX09	須恵器	坏身	30	反		3.5	12	灰色	底径8.0
169	SX09	須恵器	坏身	15	反		3.2	11.9	灰色	底径7.6
170	SX09	土師器	坏	50					灰白色	底径7.0
171	SX09	土師器	坏	45	反		3.2	13.5	浅黄橙色	底径6.4
172	SX09	土師器	坏	20	反		2.6	15.8	橙色	底径10.5
173	SX09	土師器	皿	20	反		1.2	22	灰白色	底径19.4
174	SX09	須恵器	長頸壺	15	反	12.7			灰色	底径7.7
175	SX09	須恵器	長頸壺	10					灰色	底径8.6
176	SX09	土師器	長胴甕	10	反			13.4	浅黄橙色	
177	SX09	土師器	長胴甕	10	反			19	浅黄橙色	
178	SX09	土師器	甑	5					淡橙色	
179	SP22	鉄製品	紡錘車				3.8	0.4		孔径0.5
180	遺構検出面	鉄製品	不明				4.1	0.45		釘状
181	遺構検出面	須恵器	坏蓋	50	反	10.6			灰白色	
182	遺構検出面	須恵器	坏身	30	反				灰白色	底径8.8
183	遺構検出面	灰釉陶器	碗	10	反			14.2	灰白色	

色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠

図　版

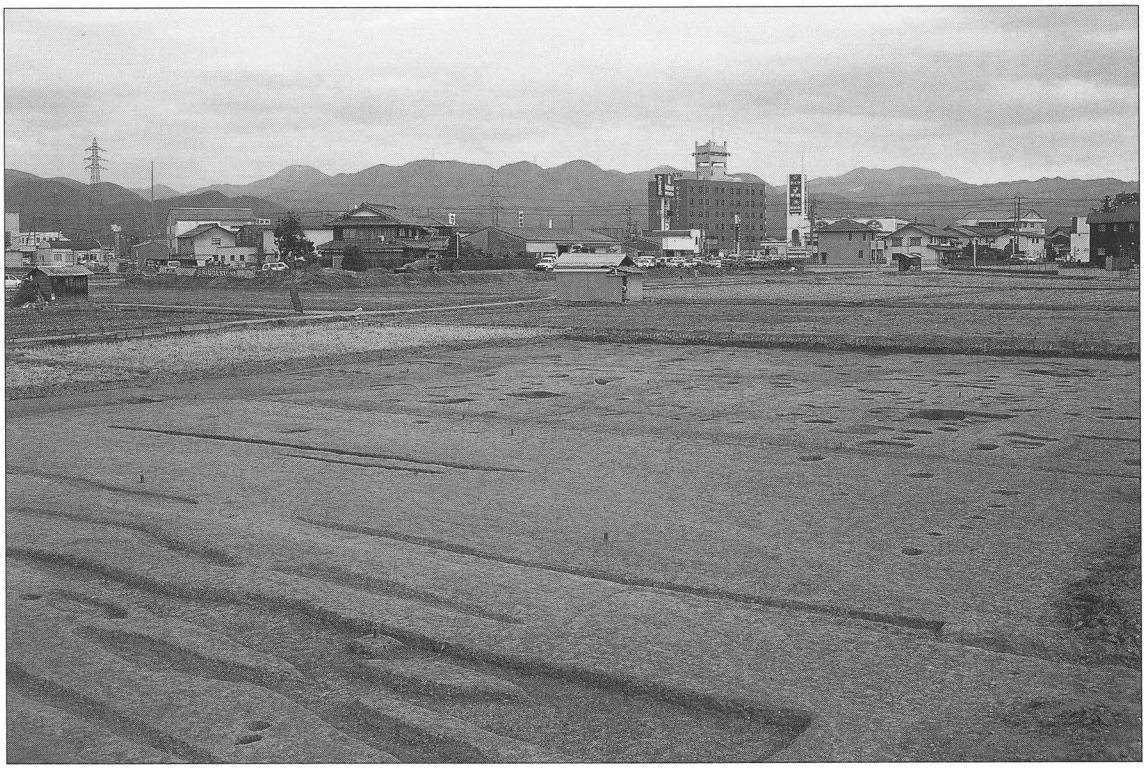
翡翠大珠・小珠

図版 1

1　調査前風景　（南から）

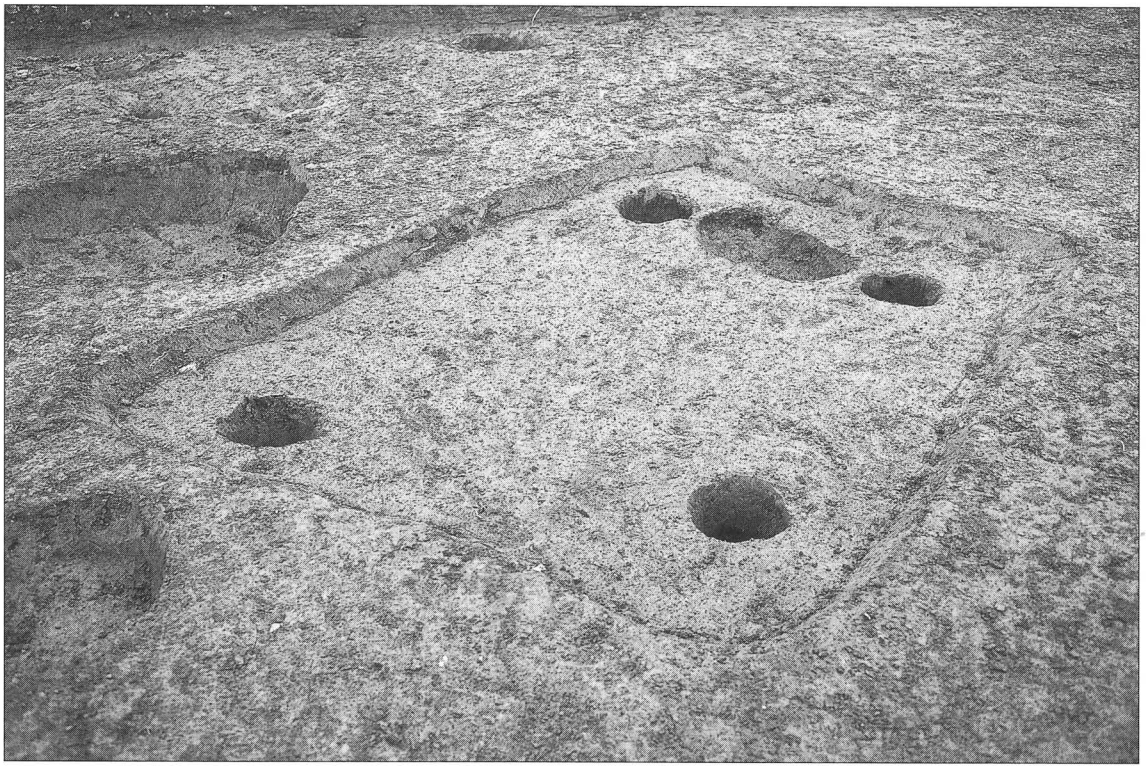
2　調査前風景　（東から）

1　調査区全景　（南から）



2　調査区全景　（西から）

図版 3

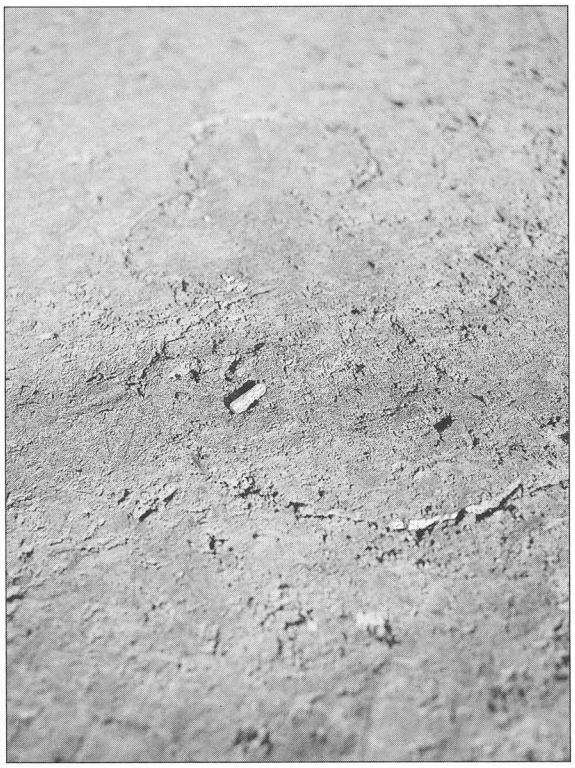


1　SH01　（北西から）

2　SH02　（南から）

1　SX01　（南から）

2　SX02　（北から）

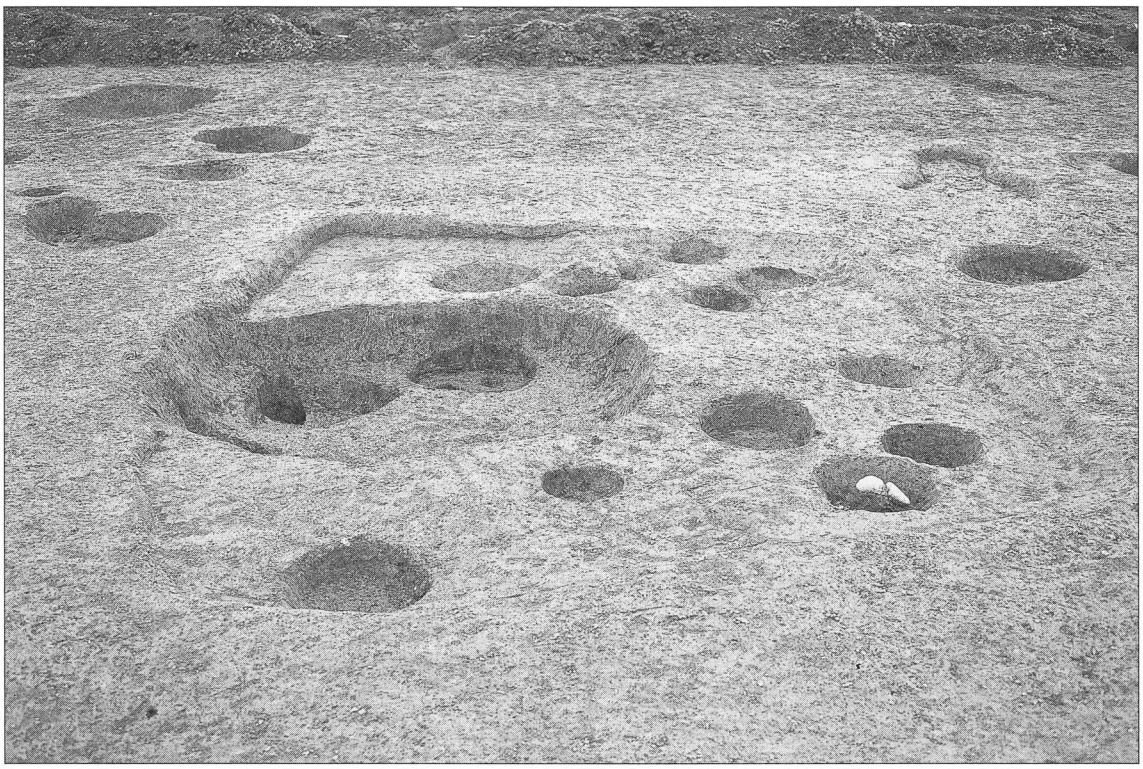


3　SP01小珠出土状態　（南東から）

図版 5

1　東部建物群　（南から）

2　北東部建物群　（北東から）



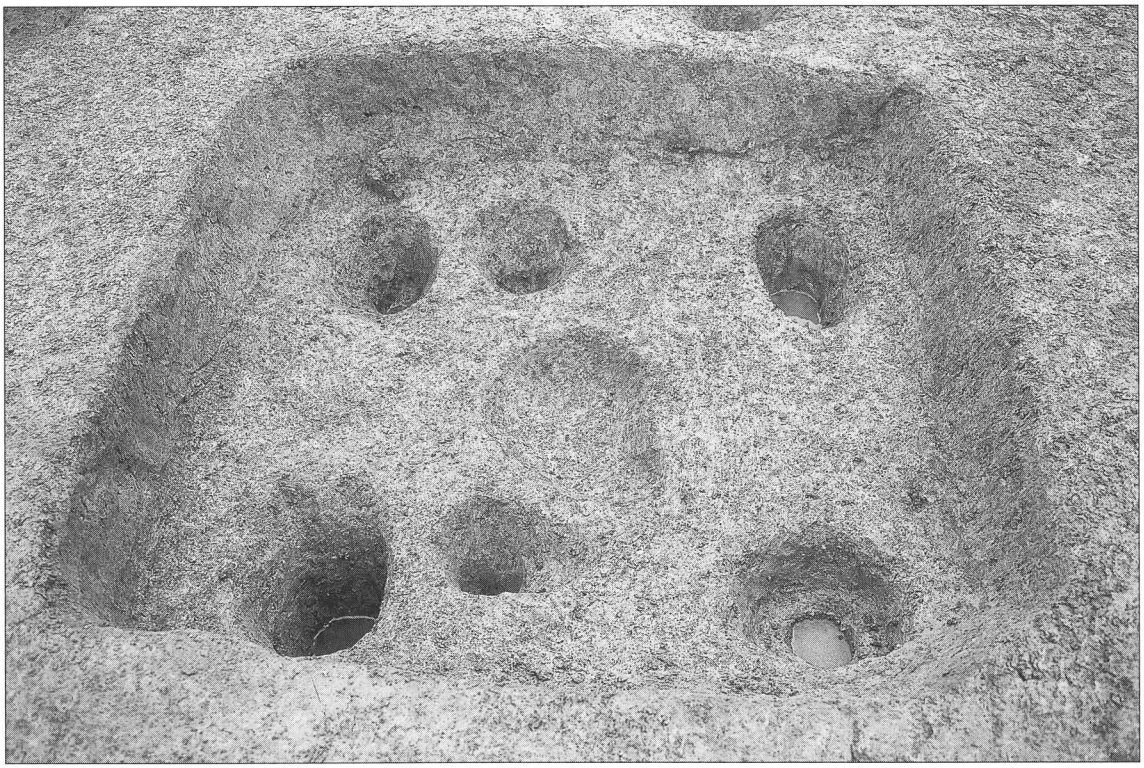
1　SX03・SX04　（北から）

2　SX04　土師器出土状態　（南から）

3　SX04　須恵器出土状態　（南から）

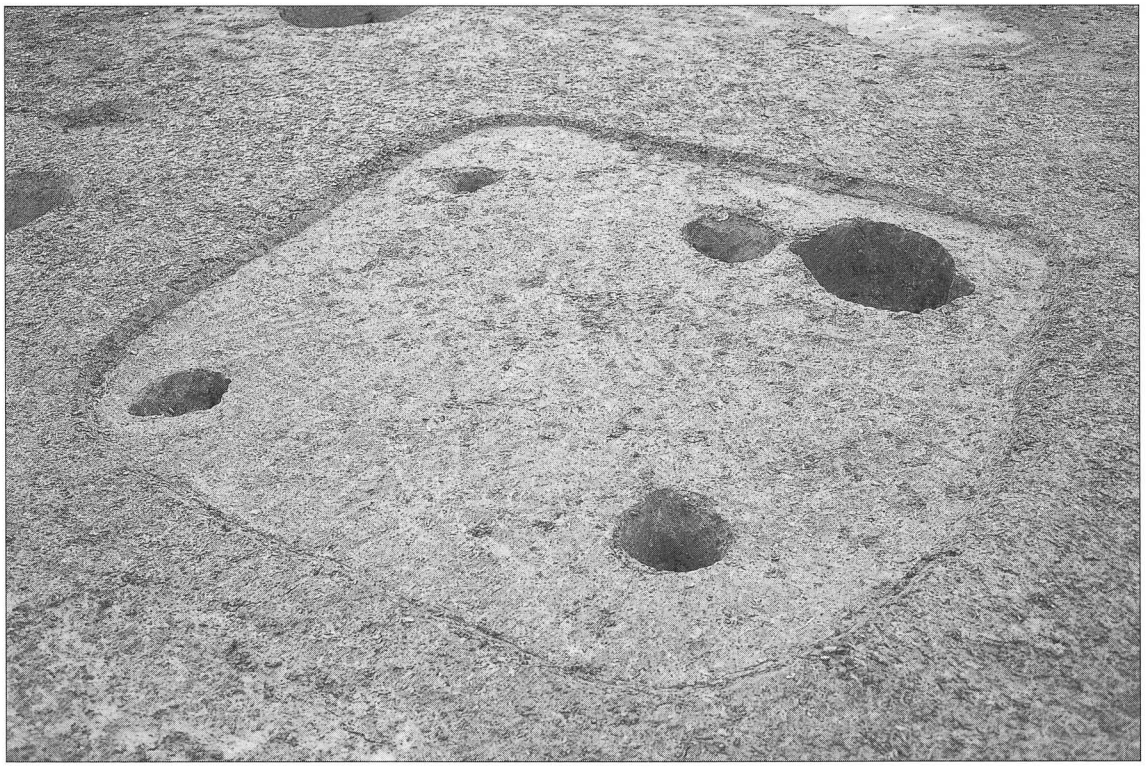
図版 7

1　SX05　（東から）



2　SX06　（西から）

1　SX07　（北から）



2　SX08　（北から）

図版 9

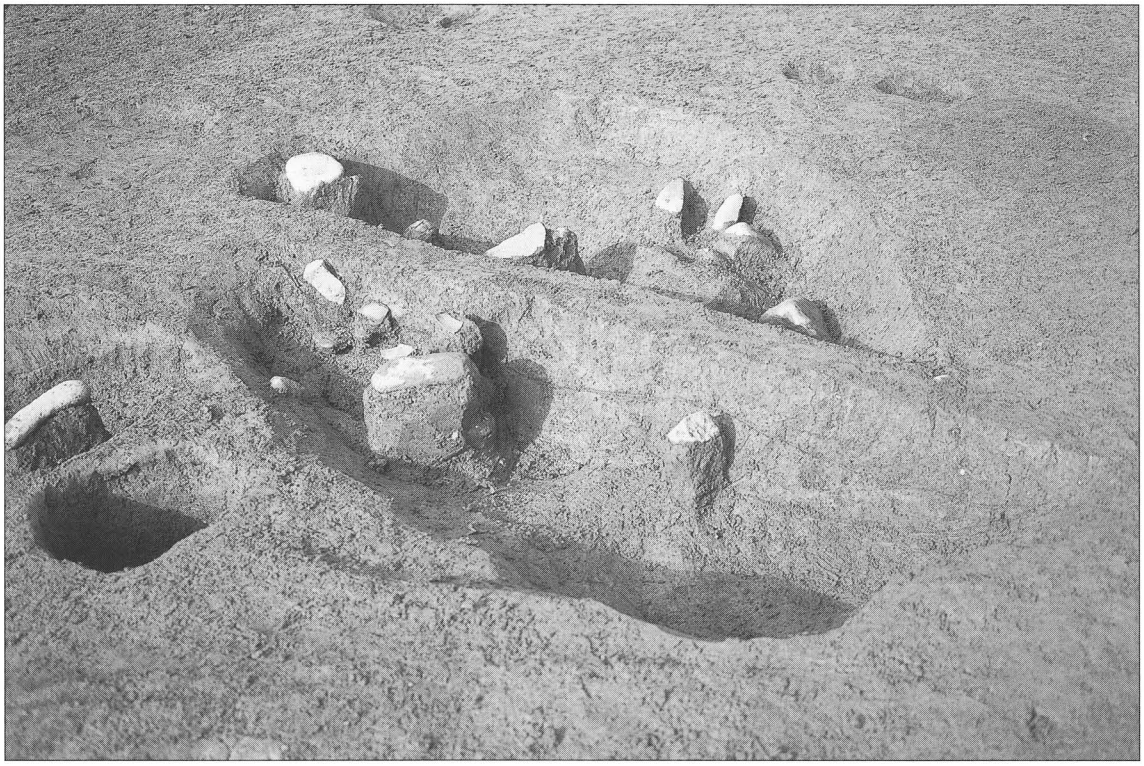
1　SX09　（西から）

2　SX10　（西から）

1　SX11　（西から）

2　SX14　（西から）

図版11



1　SX12遺物出土状態　（東から）

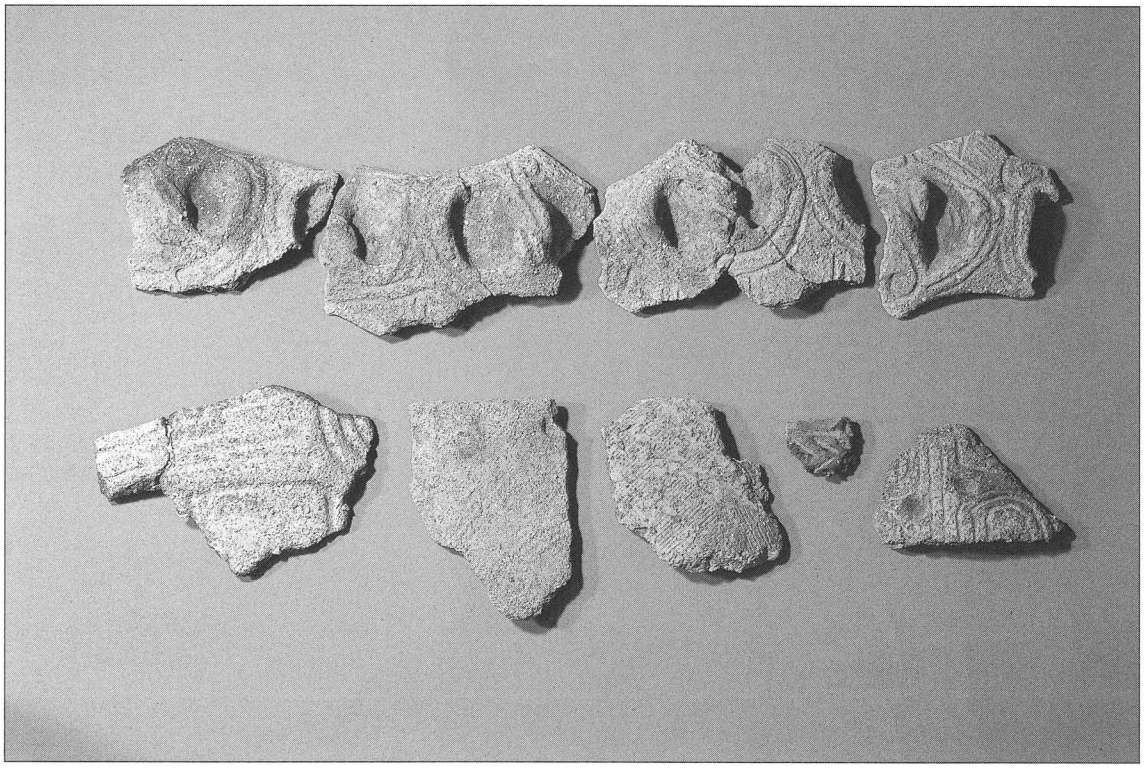
2　SX12　（東から）

1　調査風景　（北東から）

2　調査風景　（南から）

図版13

1　SH01・SH02出土遺物



2　SK01出土遺物

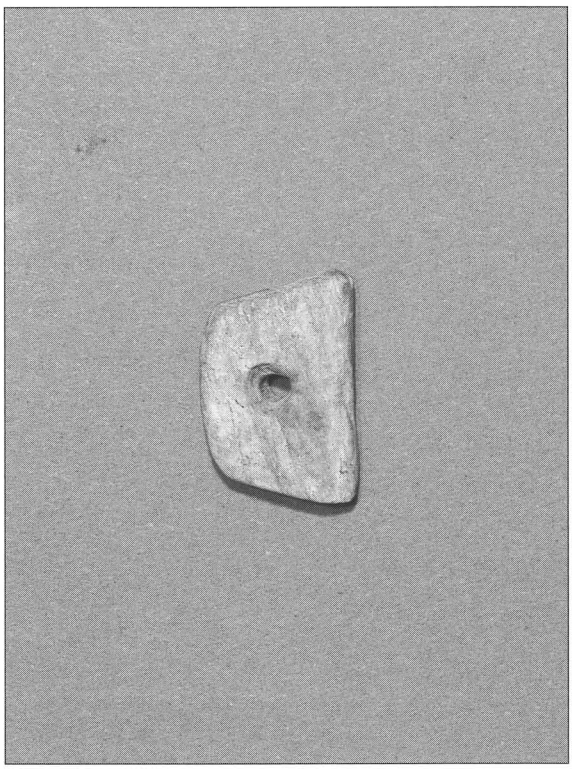
1　SK02・SK04・SK07出土遺物

2　SK08出土遺物

図版15

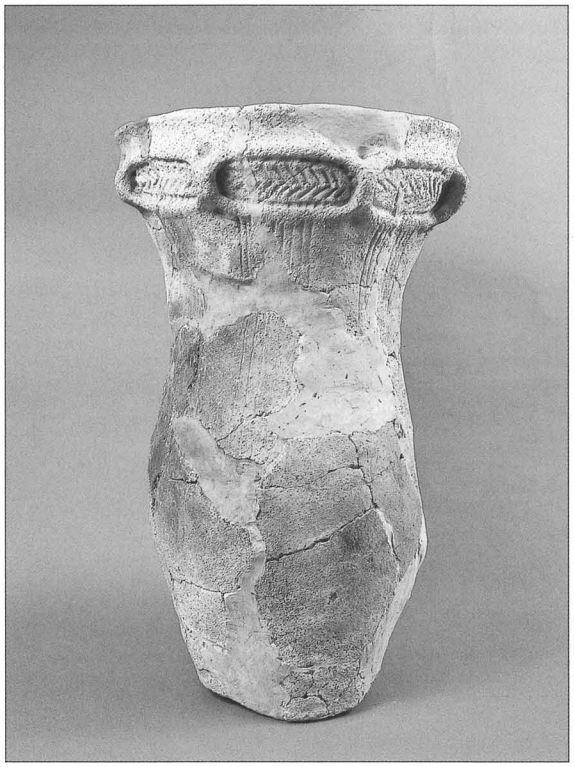
1　SX01出土翡翠大珠　A 面

2　SX01出土翡翠大珠　B 面



3　SP01出土小珠

4　SX01埋設土器



1　SX02埋設土器（1）

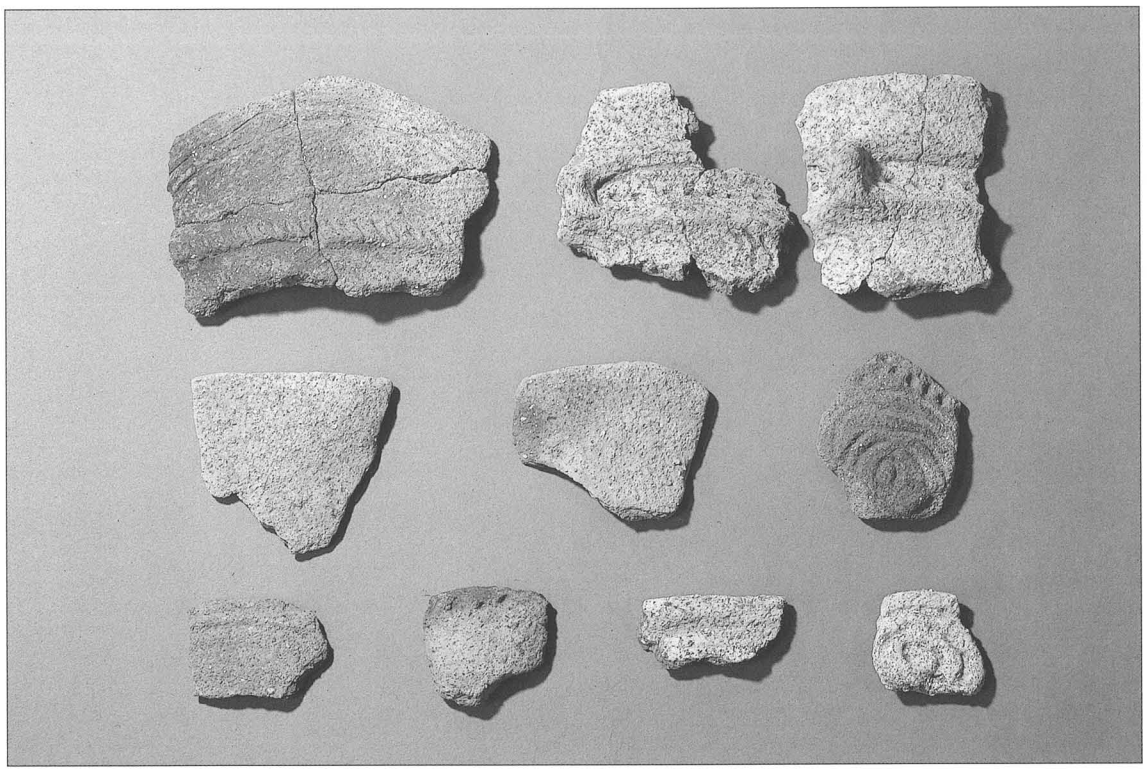
2　SX02埋設土器（2）

3　SX02埋設土器口縁部

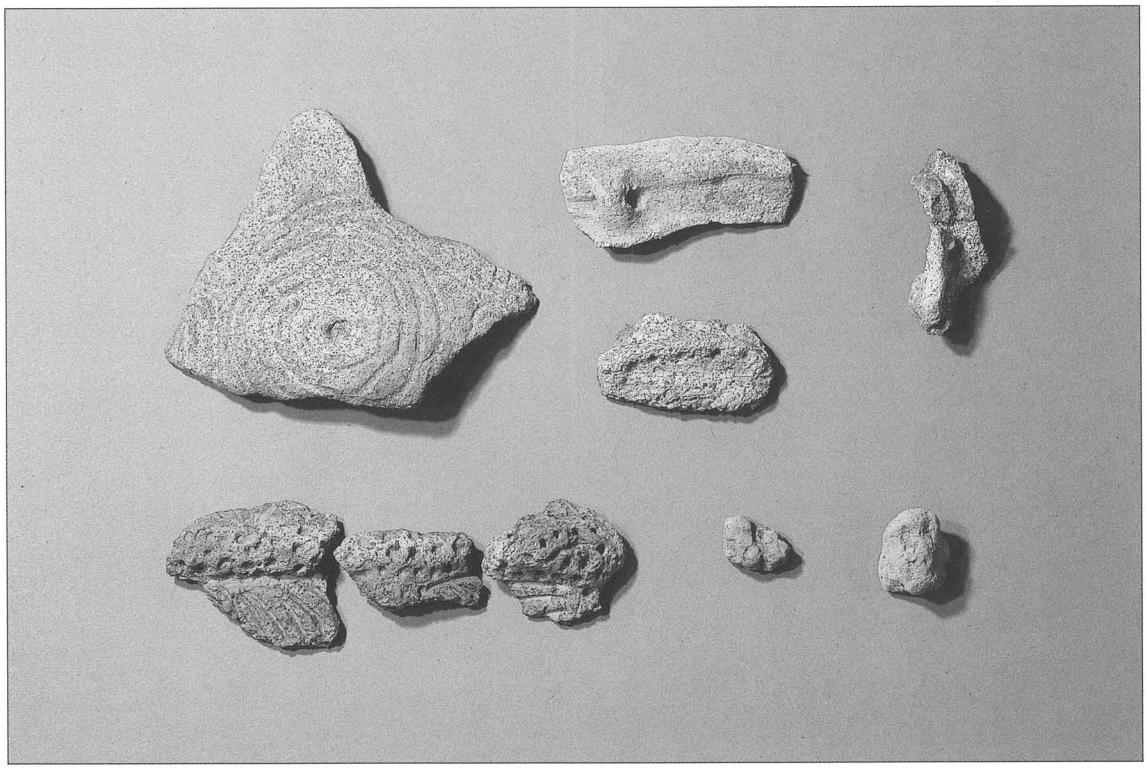
図版17

1　小穴出土遺物（1）

2　小穴出土遺物（2）

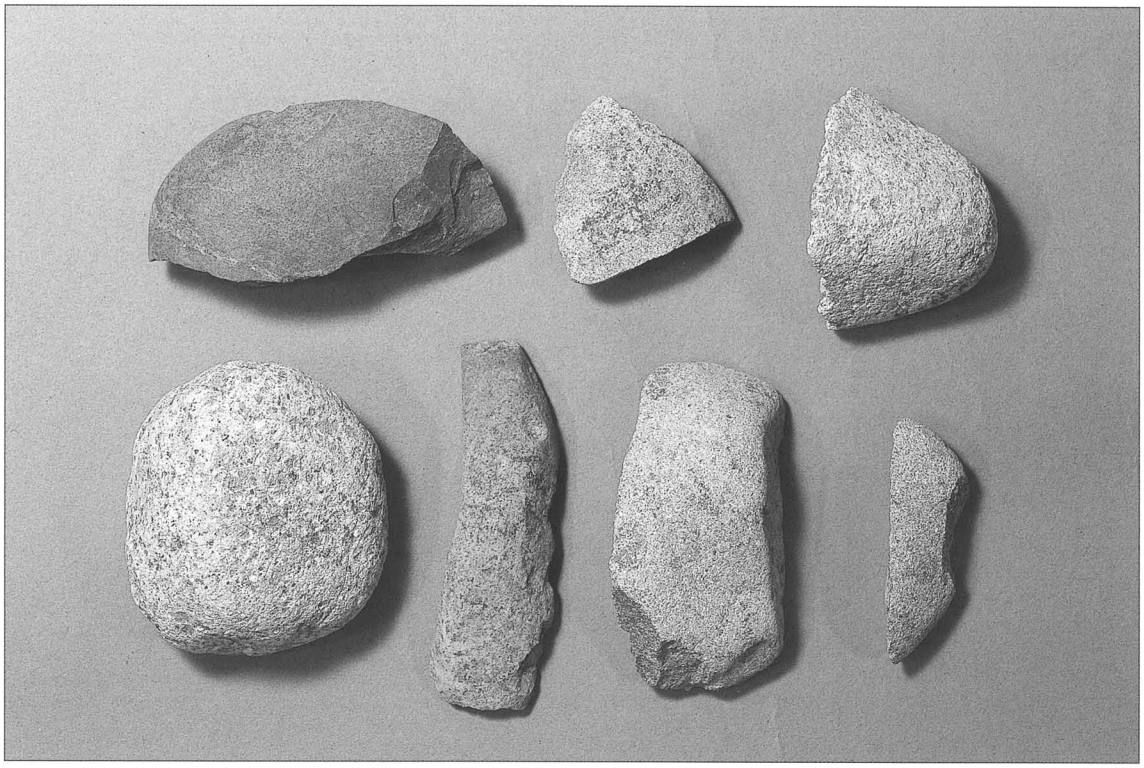


1　包含層出土遺物（1）

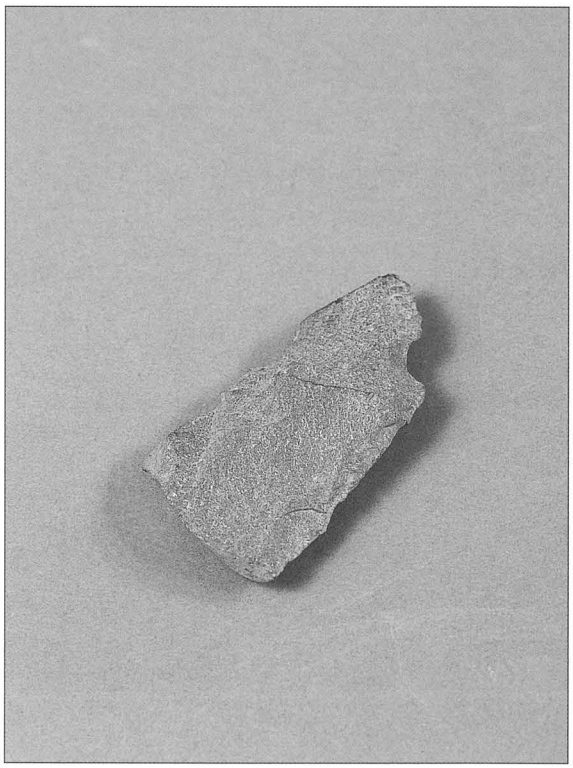


2　包含層出土遺物（2）

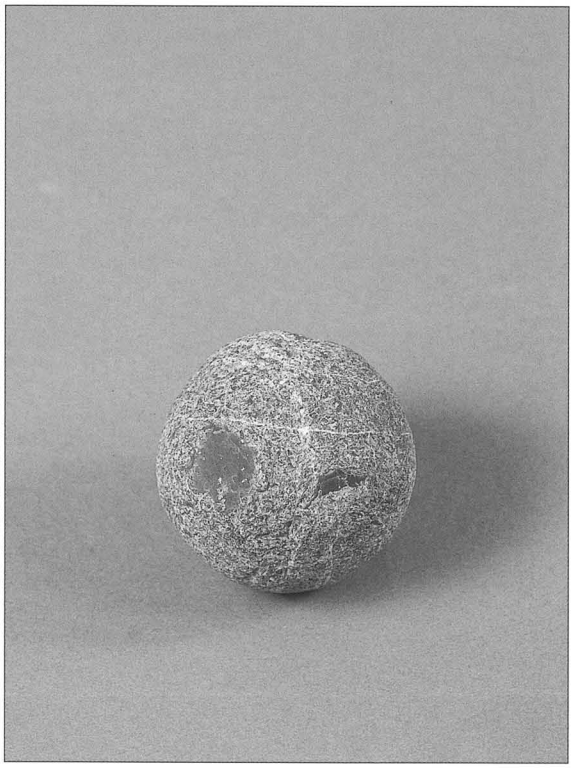
図版19



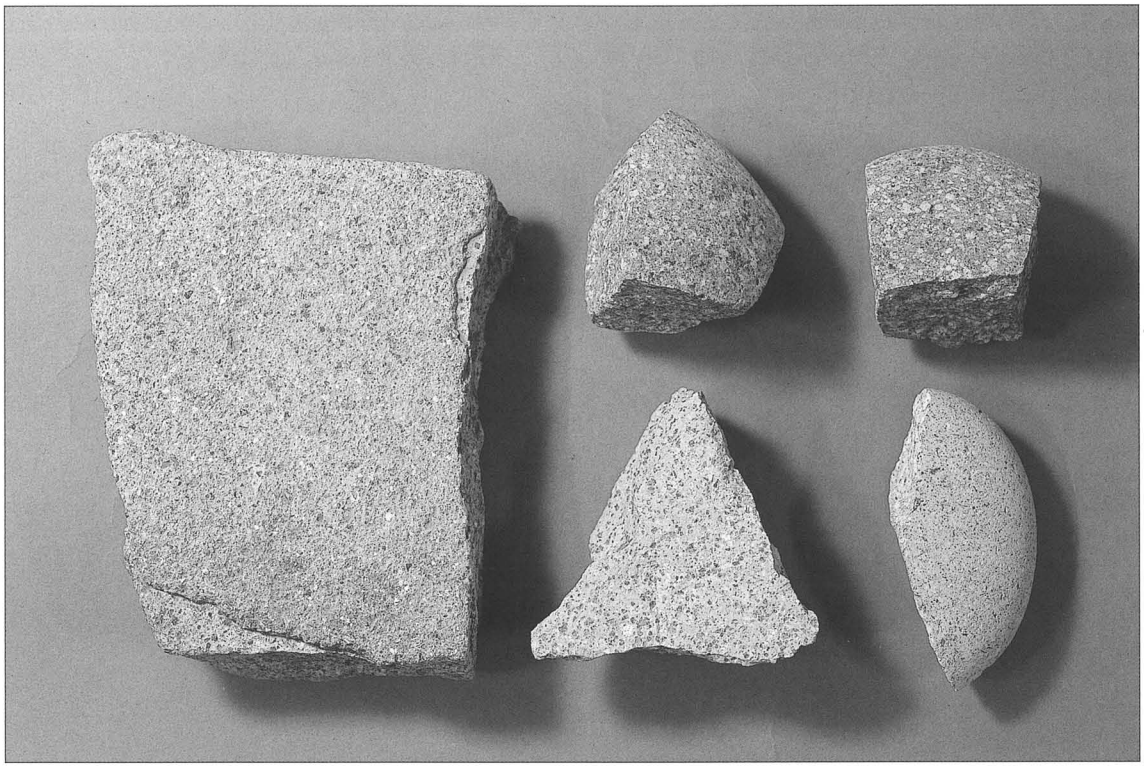
1　遺構出土石器



2　石匙

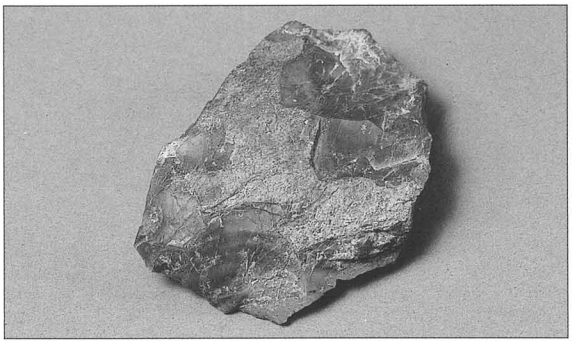


3　敲石

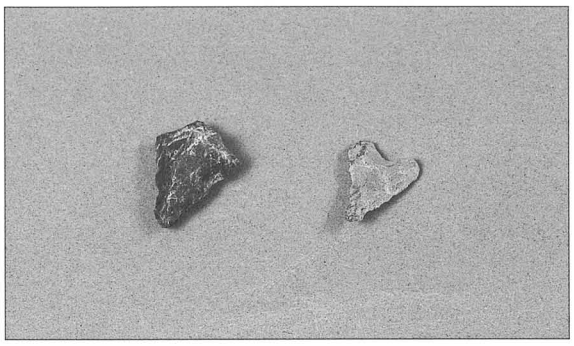


1　包含層出土石器

2　磨製石斧

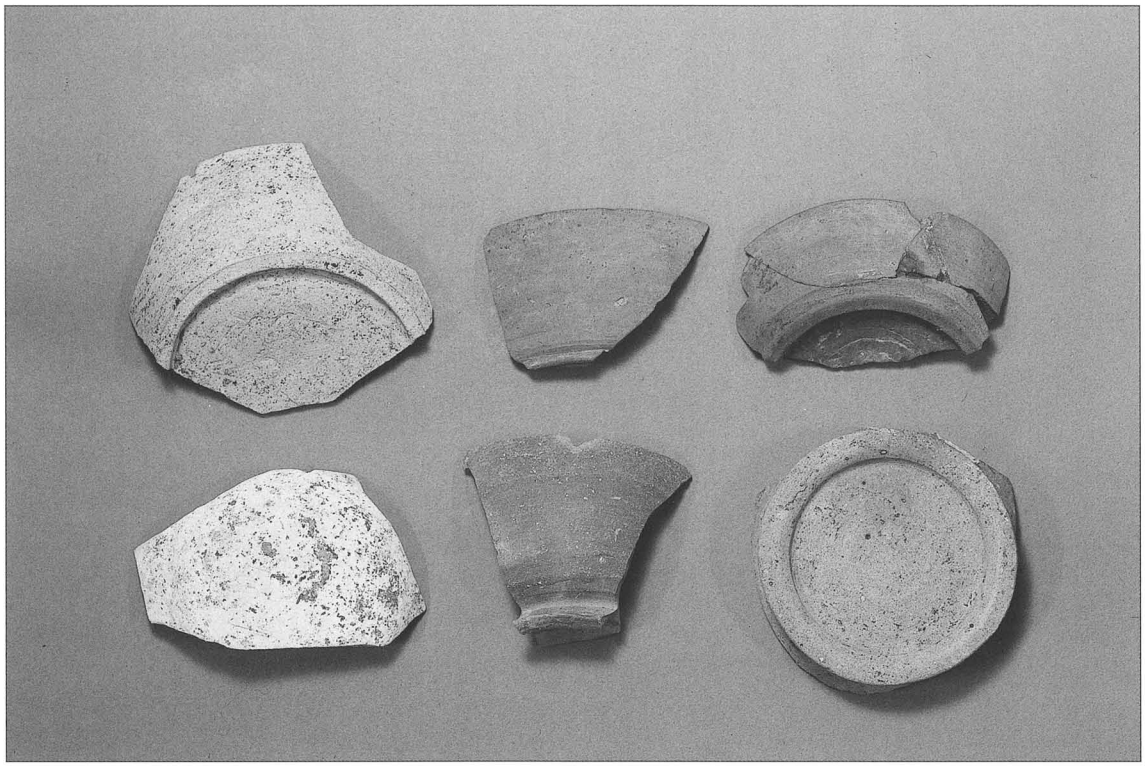


3　石核

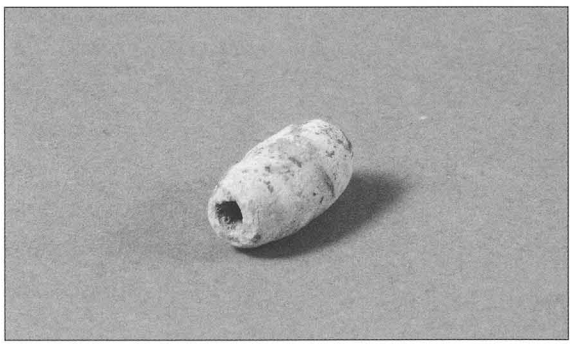


4　石鏃

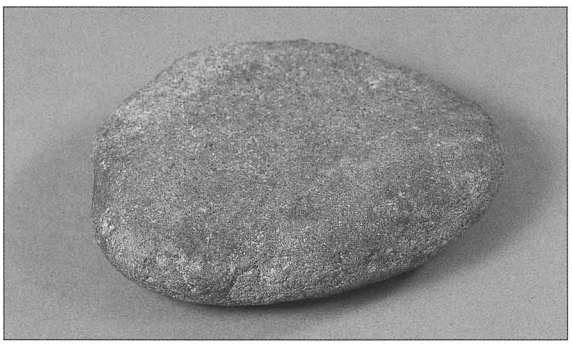
図版21



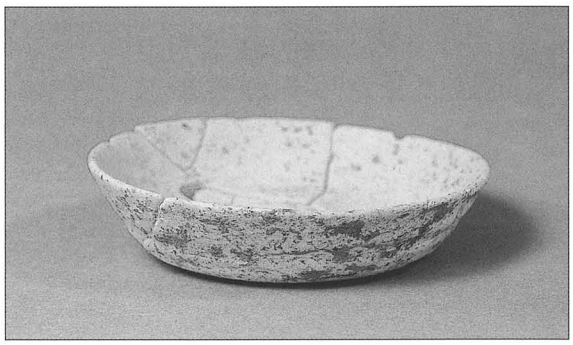
1　SX12出土遺物



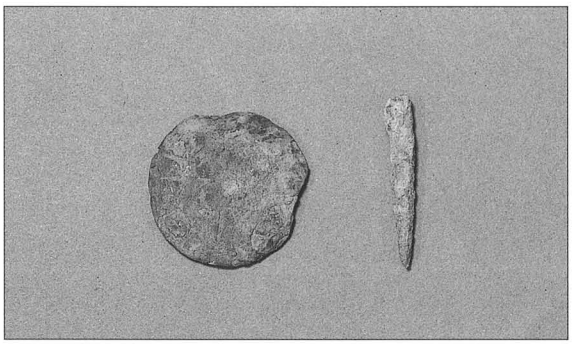
2　SB01（SP14）出土土錘



4　SA04（SP141）礎板石



3　SP05出土土師器坏



5　出土鉄製品

報告書抄録

ふりがな	ちょうだいせき2
書名	丁田遺跡Ⅱ
副書名	宅地造成工事に伴う発掘調査
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	48
編著者名	戸塚洋輔
編集機関	彦根市教育委員会　文化財課
所在地	〒522-0001　彦根市尾末町1番38号　TEL0749-26-5833
発行年月日	20110331

所収遺跡（しょしゅういせき）	所在地（しょざいち）	コード		世界測地系		調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
丁田遺跡（ちょうだいせき）	彦根市（ひこねし） 高宮町（たかみやちょう）	25202	139	35度 24分 5秒	136度 25分 20秒	1296㎡	20091221 ～ 20100226	宅地造成工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
丁田遺跡	集落	縄文時代 中期末 奈良時代～ 平安時代初頭 平安時代以降	竪穴建物 土坑 埋設土器 竪穴建物 掘立柱建物 柵列 土坑 畦畔 畝状遺構	縄文土器 石器 翡翠大珠 土師器 須恵器	犬上川流域における縄文時代中期末を中心とする集落 埋設土器から翡翠大珠が出土

彦根市埋蔵文化財調査報告書第48集

丁田遺跡Ⅱ

－宅地造成工事に伴う発掘調査－

平成23年（2011年）3月発行

編集・発行：彦根市教育委員会文化財課
彦根市尾末町1番38号
TEL 0749-26-5833

印刷・製本：サンメッセ株式会社
滋賀県彦根市小泉町300番地9
（サンロードビルⅡ301号）

CHODA SITE

March, 2011

Hikone Educational Bureau
Cultural Asset Division